ダークサイド・オブ・マイ・マインド　00
The Darkside of my Mind. -00-

ウィ・ウィッシュ・アポン・ア・スター
We Wish Upon a Star.

太田巳波

ハウプ出版

ウィ・ウィッシュ・アポン・ア・スター
We Wish Upon a Star.
ダークサイド・オブ・マイ・マインド　００
The Darkside of my Mind. -00-

不可侵領域

　男はこれまでの道を確かめるように後ろを振り返った。そこには赤土の砂漠が延々と続いている。砂漠といっても、一面の砂ではなく、照り付ける日差しに耐える、小さな緑が所々に見えている。
　男はあふれ出す汗をぬぐいながら、ここまでやって来られた成果に笑みを浮かべる。が、その笑みを一瞬で厳しい顔に戻し、前を向く。そこには白銀に見える世界が広がっていた。赤土と白銀の境は定規で引かれたがごとく一直線でその線は右の地平線から左の地平線へ続いている。さらに白銀の原をよく見ると、白は雪の白ではなく、何層にも積み重なった朽ち果てた白骨だった。そして、その白骨は時折吹く風に揺らされカタカタと音を立てている。
「コール、ランナーズ！」
　男の声に合わせて、数百人の同じ顔をしたボックスパンツ一枚の男が境界線に沿って出現する。
「オンヨァマーク！」
　ボックスパンツのランナーズがまるでロボットのように一斉にスタンディングスタートの体勢をとる。
「ゴーッ！」
　男の叫びでランナーズは全く同じ動きで白骨の原に向かって走り出す。
　パスッ。パスッ、パスッ。
　ランナーズが境界線を越えた瞬間から乾いた音が響き渡り、一回の音で一人のランナーがその場に崩れる。隣を走るランナーは崩れた男を見ることもなく、何かをボソボソつぶきながら、前だけを見て走り続ける。
　パスッ、パスッ。ドサッ、ドサッ。
　ランナーズは走り、倒れていく。号令をかけた男は、無表情に、ただ、その風景を見つめている。
　パスッ、パスッ、パスッ。
　進軍の号令から三十秒ほどたっただろうか、走るランナーズが半数以下になったとき、最初に倒れたランナーが突如として消え、境界線の赤土側、スタートラインで復活する。そして、最初に倒れたランナーに続くようにして倒れたランナーが倒れた順で復活していく。
「リターンナンドゴー、スタート！」
　先頭を走るランナーの何人かが何の前触れもなく消え、スタートラインに現れる。復活したランナー達は戻ってきたランナーの左右に三人ずつ並び、手をつなぐ。手がつながれた瞬間、つながった七人のランナーが消え、戻ってくる直前に走っていた位置に現れる。現れたとたん、七人はそれぞれ

前に向かって走り出す。
走るランナー。倒れるランナー。スタートラインで復活するランナー。先頭から戻るランナー。戻ったランナーと手をつなぎ、再び白骨の原に戻る七人のランナー。
その動きがごった返すことなく、整然と繰り返され、ランナーズは白銀の先へ先へと進んでいく。
それを見守っていた男の顔が満面の笑みに輝いた。
「よし、いけるぞ！」

ミドガルズオルム

ＶＲＭＭＯＲＰＧ(Virtual Reality Massively Multiplayer Online Role Playing Game)。五感、すなわち、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚を仮想現実上に再現し、その中で多数の人が同時にロールプレイングゲームを遊ぶ。ＶＲＭＭＯＲＰＧで中堅どころと評される『ミドガルズオルム』。ミドガルズオルムはミッドガルドの蛇のことだ。世界のフチをぐるりと取り囲み、自らの尾を自らの口で咥える巨大な蛇。世界蛇。一般にはウロボロスとも呼ばれる蛇とその蛇が取り込んでいる世界を舞台とした英雄譚。その中で、剣と魔法で戦うゲームがミドガルズオルム、通称、ミドだ。
仮想の世界には山々があり、森があり、川が流れ、草原が広がっている。北の果ては氷で覆われる氷原、南は灼熱の砂漠、東には延々と続く毒の沼地、西には登頂不可能な断崖絶壁がそびえ立つ。
平原には人々が暮らす都市や街、集落が点在し、それらを結ぶ街道が存在する。街、集落の外には小動物や小型のモンスターが現れ、森や山や辺鄙な土地には亜人、怪物、聖獣が巣くう。
街に住む人間種は亜人種を差別侮辱し、亜人種は人間種に敵意を抱《いだ》く。モンスターはモンスターの生息地に侵出してくる人間種、亜人種を攻撃し、人間種、亜人種は攻撃してくるモンスターを打ち倒す。そして、それぞれのいざこざの中で生まれた犠牲が憎しみを募り、さらなる犠牲を呼ぶ。憎しみの連鎖と犠牲の連鎖。もはや始まりもなければ終わりもない。自らの憎しみが自らの犠牲を呼ぶ。まるで、自分の尾を飲み込み輪になったミドガルズオルムがごとく。
その世界で、プレイヤーは『冒険者』としてゲームに参加する。『冒険者』は人間種、亜人種、モンスター種のいずれかとなり、ある者は他種族を滅ぼすため、ある者は全種族に平和をもたらすため、自己の欲望を満たすため、他の冒険者を支援するため、ミドの中で生活する。
人間種は灰色種族、褐色種族、青色種族、赤色種族、白色種族の五種族だ。主に灰は西、青は東、赤は南、白は北、褐色は中央に暮らしている。白は剣による近距離攻撃、灰は呪術や魔法攻撃、青は弓による遠距離攻撃、赤は打撃系の接近戦を得手とするが、それはあくまでそのような傾向があるという程度で、種族によって特定の能力が有利になることはない。
ただ、種族の違いは用意されるクエストに影響を与える。例えば、ゲーム

開始直後にゲームの世界観や操作方法、注意事項を教えるクエスト『チュートリアル』はその種族によって使う武器が異なってくる。もちろんチュートリアル後にチュートリアルの武器と違う武器を装備することは何ら問題がない。

種族は武器の種類に影響を与えないが、職業は違う。ミドの全プレイヤーの最初の職業は冒険者で、全員が冒険者レベル一を持つことになる。チュートリアルクエストを完了すると、総合レベルが上がるが、このとき、人間種は冒険者以外の職業を選ぶことができる。冒険者は冒険をするための能力がバランスよく伸びるので、多くのプレイヤーはそのまま冒険者を選択し、冒険者レベル二となるが、剣に特化したいプレイヤーや魔法使いにあこがれるプレイヤーは、戦士や魔術士を選ぶことも稀ではない。

冒険者レベル一、戦士レベル一のプレイヤーは冒険者レベル二のプレイヤーより武器の扱いがうまく、魔法攻撃力が弱い。逆に魔術士は武器による攻撃力が弱く、魔法による攻撃は強い。職業が低レベルの時はその差は微々たるものだが職業レベルが上がっていくにつれ、差は顕著になっていく。さらに職業の選び方で就くことのできる上位職が異なってくる。魔戦士になるには、戦士と魔術士の両方のレベルがある程度必要だし、呪術士は戦士をいくら上げても表れず、就くには魔術士をレベル三以上にしなければならない。治療士の上位職である聖職者は黒魔法を使う職業や暗殺者のように殺人を主とする職業を持っているものはなることができない。

ミドに設定されている職種は、最初から選べる基本職とその上位職、すべてを合わせて判っているだけで数百種に及ぶ。先に述べた戦士、魔術士も総称であり、実際には剣戦士、槍戦士、斧戦士、火魔術士、氷魔術士、雷魔術士などと武器種や魔法の種類によって細分化されている。両手剣は剣戦士レベル三以上でないと装備できないとか、火の上位魔法である地獄の業火は火魔術士レベル五以上が必要とか、職業による制限は多くある。が、種族に関しては制約がない。

種族制約がないといったが、ただし、それは人間種に限った話だ。モンスター種を選んだプレイヤーは、選んだモンスターの種族によって使える武器や魔法が著しく制限される。スライムなどの不定形生物は、そもそも装備をすることができない。体を使って打撃するか魔法を使って攻撃することになる。その代わり、基本ステータスが高めに設定されていて、MP（マジックポイント）を消費せずに酸による攻撃を行うことができる。また『切る』系の攻撃無効化など特殊な能力を持つこともできた。もっとも、変身や擬態のスキルを取得した高位のスライムは人間種に変身し、武具や防具を装備することも可能だった。

亜人種は人間種とモンスター種の中間に位置する。人間種より高い基本ステータスと特殊能力を持ちつつ、一部を除いたほとんどの装備を使用できる。ただし、基本ステータスが高いといってもモンスター種に比べると劣っていた。

モンスター種、亜人種は就くことができない職業が多いが、職業とは別に『種属』を選ぶことができる。亜人種には妖精族、獣人族、死神族などがあ

るが、妖精族は種属としてエルフ、ダークエルフ、ドワーフ、レプラコーンなどがあり、それらのうちの一つをキャラクターメイキングの段階で選ぶことになる。人間種はチュートリアル終了時に職業を自由に選択できたが、亜人種、モンスター種はチュートリアル終了でこの冒険者のレベルが二になり、職業を選ぶことができない。必ず冒険者（種属名）レベル二となる。これはチュートリアル終了時限定の特性で、以降のレベルアップでは種属レベルを上げるのも職業レベルを上げるのも人間種同様に自由だ。

モンスター種、亜人種の種属の数も数百。多様性が個性を生み、ゲームの謳い文句『千人いれば千通りの遊び方』を実現している。

種属、職業の多様性と魔法の多様性から生まれる個性。ＶＲＭＭＯＲＰＧに詳しい人なら知っているだろう、いや、さほど詳しくない人でも名前を聞いたことがあるかもしれない。日本では国民的ＶＲＭＭＯＲＰＧと呼ばれた某有名ゲーム『Ｙ』を。

ミドはＹとかなり似ている。ＲＰＧはどれも似通ってしまうが、それでもミドとＹはシステムの基本思想や操作感覚は同じシステムといっていいほどだ。そのため、Ｙのユーザーからはパチモンと呼ばれたりしていた。

「似ているのはシステムソースコードが盗まれたから」「訴訟にならないのはユーザー個人情報も同時に盗まれ、そのことで脅迫されているから」まことしやかにそうささやかれるほど、両者は似ている。公表はされていないが、二つは同じシステムをベースにしている。システム開発部隊の一部が経営者側との意見の相違から退社独立し、敵モンスターの名前や魔法の名前、システムウィンドウの配置や色などの表面的な一部を変更したのがミドである。

システム流用について何も問題がなかったといえばウソになる。ソースの知的所有権をめぐり両者の間で一時は訴訟寸前までいったのだが、間に入った双方を知る人物の人徳と訴訟にかかる費用の予想額から、一応の決着を見て、その後は互いに不問となっていた。Ｙからすれば『弱小』サービスを相手にするのは『大手』としては大人げないという気持ちとポーズだったのだろう。

政治と呼ばれるそういう対外的なやり取りも、無限の可能性、無限の個性もすべて今日で終わる。今日の十四時を以って、ミドがサービスを終了するのだ。

継続性のあるサービスの終了はタイミングが難しい。終了するのが会社唯一のコンテンツで、サービス終了とともに会社も整理となるのなら、唐突なサービス終了も可能だが、別サービスを展開している会社であれば、下手なサービス終了は、既存の継続するサービスにも影響を与えてしまう。

ミドはサービス終了の告知から実際の終了までに一年をかけた。有料コンテンツの購入も故意に手順を煩雑にした。明快な購入意図を持った人のみが購入可能とし、告知直前に購入したアイテムは無条件に返品返金に応じた。これらの対応からユーザーに『誠意』が認められ、残るテーブルゲー

ム系サービスへのダメージもわずかなもので済むこととなった。

ミドが終了せざるを得なくなったのは、一言でいうとユーザー離れである。サービス開始から七年。時代の流行が変わったことも要因だし、マンネリ化から飽きられたことも大きい。だが、決定的な原因はいくつかのＶＲＭＭＯＲＰＧで発生したゲーム中の事故とそこからの仮想現実《ヴァーチャルリアリティ》への不安。そして、事故防止のための法規制によるゲーム内の行動制限だ。特に行動制限はユーザーの自由度低下につながり、仮想現実の優位性が薄れてしまった。

ミドの基になった某有名ＶＲＭＭＯＲＰＧもミドに先立ってサービス終了していた。Ｙのサービス終了で同じシステムのミドに人が流れ込むのが期待されたが、Ｙのサービス終了日にも事故があったとされ、世間からＶＲＭＭＯＲＰＧ全般に対する熱が失われてしまい、人が増えるどころか逆に減ることとなってしまっていた。

支者《ししゃ》

ジョケンスタッドはミドの中央地区やや東寄りにある。周囲に森が点在する地方都市だ。武器屋兼防具屋、状態異常の解除や復活アイテムの売買を行う教会や、魔導書などの販売を行う本屋、クエスト屋と食堂を兼ねた宿屋、フリーマーケットエリアがあり、都市扱いになっているが、規模はさほど大きくなく、街といってもおかしくない。褐色種族の初期集落や亜人種妖精族の初期集落からも近く、隣接する森にも初心者用の低レベル迷宮がいくつも存在することから、少しゲームに慣れたプレイヤーが本拠地にする都市だ。

その都市の中をよっしーが歩いていた。着ているものはフルレザーアーマー。脛あても籠手も使い込んだ革製。背中には二本の短剣をクロスさせて背負っている。が、背はかなり低く小柄なため、背中の短剣も普通の剣に見えてしまう。小柄でピョコピョコ歩く姿は子供の冒険者に見えるが、顔は大人のそれであり、とがった耳ととがった頭から、子供ではなく亜人種、それも小型の妖精族であることが判る。

初心者の都市を歩いているが、よっしーは初心者ではない。ミドの最高レベルである総合レベル百のキャラクターだ。ミドでは戦闘勝利やアイテム生成、冒険クエスト完了などの冒険と称される行動で経験値を得る。その経験値がある程度溜まると総合レベルがレベルアップする。総合レベルが一レベルアップするごとに職業レベルのどれかを一つ上げることができ、魔法もしくはスキルを三つ覚えることができる。レベル百まではそうやって上がっていくが、レベル百になると次のレベルへの必要経験値が無限大になり、誰も百一に達することができない。すなわち職業の最大合計は総合レベルと同じ百である。魔法とスキルの合計もレベルアップで覚えられる数は最高三百だ。が、魔法やスキルはレベルアップ時以外にも、魔導書を読んだり、特定クエストを完了することで覚えることができる。また、魔法枠を十枠増やす課金アイテムやスキル枠を十枠増やす課金アイテムもあり、よ

っしーはすでに限度を超える魔法と、スキルを持っているが、魔法枠、スキル枠ともに五つの空きがある。大型アップデートでは魔法やスキルが新設されることがあるので、五つの空きはそのための予備枠だったが、サービス終了となっては全くの無駄枠になってしまった。

ミドはレベルアップが難しくない。確認されているレベル百までの最短記録は六十四日。それは特殊な例としても、レベル三十までは容易といってもよく、平均的なプレイヤーがレベル三十になるにはおよそ一ヶ月半程だ。そこからはそれまでに比べればレベルアップの速度は落ちるもののレベル六十には十ヶ月程で、レベル百も二年もあれば到達できる。二年は長いと感じるかもしれないが、ミドがスタートして七年。アクティブなプレイヤーの平均在籍年数は三年。レベル百のプレイヤーは全体の三割以上存在する。

よっしーは中央広場の端の教会の横に出ている屋台の前で立ち止まる。

「店番娘《みせばんこ》、売れ行きは？」

「全然ですぅ」

屋台の横に立っていたコンビニ店員ユニフォーム風の服にエプロンを付けた少女が営業スマイルを崩さずに答える。よっしーはどこからかパッドを取り出して売り上げを確認する。売れているのは高位のポーションがちょっとだけ。ジャンプアイテムがちょっとだけ。他は一切売り上げがない。サービス最終日ということで無謀な戦闘にチャレンジし、死亡したり重傷を負った人が薬を買いに来るかと、高位のポーションと復活アイテムを中心に教会の近くで割安の屋台を出していたのだが、みな、自分の持ちの倉庫の中でデッドストックと化していたアイテムを消費しているのだろう。今日に限らず、ここ数日は全く売り上げが上がっていなかった。デッドストック消費についていえば、よっしー自身もここ一ヶ月ギルド倉庫のアイテムを消費するだけで購入は行っていなかったので人のことは言えない。売り上げがなくても屋台を出してしまうのは今までの習慣からだ。今日ポーションを買った人も今までの習慣で買ったのだろうか。

「明日からは、もう、これもないのか」

よっしーは小さく独り言をつぶやいた。その横で店番娘はニコニコと営業スマイルを続けている。よっしーは周りを見回すが、数台の屋台とその店番ＮＰＣがいるだけだ。プレイヤーは広場の反対側の端に数人いるが、閑散としている。店を開けても閉めても大きな変化はないだろう。無駄な開店なら閉めてもいいかと思ったが、それなら開けていてもいいとも思う。

「店番娘。アイテムの値段、一律九割値下げして」

あと一時間で終わりなら店を開けていても閉じていても同じ。儲かっても損しても同じだ。同じならほかのプレイヤーにちょっとぐらい幸せな気持ちになってもらってもいい。

「復唱しますぅ。全品九割引、すなわち一割の価格で販売ですねぇ」

「そう」

「かしこまりましたぁ。およっしー様ぁ」

店番娘はニコニコしながら立ち続けるが、突如、屋台の屋根に「大幅値引

きセール中」の看板が現れる。
「じゃ、店番よろしくな」
「いってらっしゃいませ。およっしー様ぁ」
プレイヤーが直接操作するキャラクターは一般にＰＣ（プレイヤーキャラクター）と呼ばれ、それに対し、システムが動かすキャラクターはＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラクター）と呼ばれる。ミドではＮＰＣの内、迷宮やフィールド上に現れ、斃されると、しばらくしたのち、自動的に湧き出る、固有名を持つ教会や武器屋の店員、クエストを進めるうえで必要なキャラクターは単にＮＰＣと呼び、個人またはギルドが所有し、プレイヤー側が行動パターンをＡＩ定義できる固有名持ちのキャラクターを支者《ししゃ》と呼ぶ。支者は姿かたちはもちろんのこと、自分を呼ぶ一人称や話し方、声も定義できる。性格もかなり細かい点まで設定することが可能だ。
支者はプレイヤーをサポートするキャラクターである。プレイヤーに付き従い迷宮の攻略やクエスト進行をたすける。プレイヤーと同じように種属や職業を持っていて、アイテムを作成することもできるし、店番として他のプレイヤーへのアイテム販売も行える。
支者にとってプレイヤーは自分を生み出した創造主だ。宗教的な神が揶揄的な意味での創造主であるのに対し、プレイヤーは実際に自分自身を生み出した直接的な創造主である。故に、支者は自分の所有者を創造主として崇《あが》め奉《たてまつ》る。その崇拝は並みの崇拝ではない。
支者にはギルド所有の支者と個人所有の支者が存在する。ギルドは創設時、迷宮所得時、城所得時にそれぞれ決められたレベル分の支者を無料で作ることができる。それはどのようにレベルを配分してもいい。例えば創立時に作ることのできるキャラクターはレベル三十のキャラクターなら一体だけだが、レベル一のキャラクターなら三十体作れる。ギルドの無料支者に対し、個人所有の支者は一レベル当たりいくらの完全課金アイテムだ。その金額は一般アイテムから比べてもかなり高い。レベル百の支者を作ろうとすればバイト三十時間分の賃金と同じくらいの課金が必要になる。それでもミドには多くの支者がいる。数でいえばプレイヤー一人あたり四体の課金支者だ。
店番娘は今はギルド支者だが、当初は違っていた。初代ギルドマスターがギルド創設時に個人所有からギルド所有へ権利移管している。個人所有の支者は所有する個人が全てを設定管理する。ギルド所有の支者はギルドで設定管理する。ギルドマスターとサブマスターは支者ごとにどの機能をギルドメンバーに公開するかを決定できる。
支者はプレイヤーキャラクターとほぼ同じだ。戦闘もできるし、アイテム生産もできる。もらう経験値によってレベルアップもする。特に三年前の大規模アップデートによって、プレイヤーが支者でログインできるようになってからは、日常的なプレイをする分には全く同じといっていいほどである。プレイヤーキャラクターと支者の違いは、携帯アイテムのエリアが極端に狭い。一部のクエストが行えない。一部の魔法やスキルが取得できない。

一部の職業につけない。支者単体でのギルド加入不可。などでインベントリ関連の制約以外は『そういうもの』と割り切ってしまえば、許容範囲に入ってしまうものであった。

プレイヤーは必ずレベル一から始まり、チュートリアルを受け、一レベルずつレベルアップしていく。支者は課金さえすればいきなりレベル百から始めることができる。ストーリークエスト上のレベル制限で支者を使用できるのはレベル十からで、そこまではレベルアップさせなければいけないが、支者を使えば、それ以降のレベルアップの苦労なしに最高レベルの戦闘を楽しむことができる。そのことから、常に支者でログインし、正式なプレイヤーキャラクターではログインしないユーザーも多くいた。

ギルド支者になってから店番娘はいつもギルドで出している屋台の店番をしている。よっしーの所属するギルドの支者に対するポリシーは支者の創造主はフルコントロール可能で、一般ギルドメンバーは創造主の認めた機能だけを許可している。店番娘の設定は、ギルド内とジョケンスタッド間の移動と、店番のみが可能だった。もっとも、サブマスターのよっしーはミドのシステム設計によってフルコントロール可能だが。

支者はユーザーでログインしていないときは、ＡＩ（人工知能）によって動いている。ユーザーが話しかければ、それにふさわしい行動や答えを自動的に返す。ＡＩは全ての行動をユーザーがプログラミングできる。また、プログラムできないユーザーのためにも簡易設定画面が用意されいる。簡易設定画面とはいっても、かなり細かい点まで設定できるのでほとんどのユーザーはこの画面を利用し性格設定をしている。そこでの初期設定では、ギルド支者はギルドメンバーのことを正式名に『様』を付けて呼ぶように設定されていた。よっしーの正式キャラクター名は『およっしー』のため、支者はよっしーを『およっしー様』と呼ぶ。今では慣れてしまったが、初めの頃は違和感に戸惑ったものだ。

実世界《リアル》でよっしーは子供のころ、『よっしー』と呼ばれていた。今でも中学時代からの友人はよっしーのことを『よっしー』と呼ぶ。『よっしー』の由来は名前からきているが、ゲームを始めるにあたって、よっしーはその呼び名に苗字の頭の『お』を付けて、『およっしー』とし「およっしー、およしになってぇ」とか「およし、およっしー」とかおやじギャグを言っていたのだが、ウケたことは一度もなかった。

キャラクター名と種族は一度決めると変更することはできない。よっしーのように自分の名前に後悔しているものや、ギルドや親しいプレイヤー間で名前がかぶってしまったキャラクターのために通称設定ができる。通称は人物鑑定の魔法で通称として正式名に先立って表示される。名前に先立って表示されるため通称を二つ名として使用しているキャラクターも多い。『疾風迅雷』『大槍の』『エンディオンは俺の嫁』。通称は何回でも書き換え可能なので、日々書き換えているキャラクターもいるが、表示は相手が人物鑑定の魔法を使った時だけなので、その努力のほとんどが無駄に終わっている。正式名と異なった名前の表示は通称のほかに偽名があるのだが、偽

名スキルは取得条件が厳しいため使用しているものはあまりいなかった。

ＰＫＫ《プレイヤーキラーキル》

ズッドーン！　広場の反対側の建物の陰で閃光が走り、大勢の湧き上がる声が聞こえてくる。よっしーから見える二人も手を叩いて喜んでいる。

「人物鑑定《フー？》」

二人のうちの片方に見覚えを感じ、小声で人物鑑定の魔法を唱える。と、その答えとして、よっしーの持っているパッドに相手のステータスが表示される。

名前：マモーミ。ギルド：星のまほろば。パーティ回数：十五回。最終パーティ：腐肉の森迷宮（二十二日前）。

何回かパーティを組んだことのある盗賊だ。

よっしーのメイン職は暗殺者。マモーミは盗賊。どちらも持っているスキルから迷宮攻略では斥候を任されることが多い。

ミドでバランスのいいパーティとは斥候兼前衛一人と前衛専門二人、後衛の攻撃魔法使い二人、参謀兼支援魔法使いの六人組といわれるが、腐肉の森のように毒系の罠が多くある迷宮や、物陰に隠れ背後から襲い掛かってくる敵が多い迷宮は斥候を一人追加で入れることがある。

よっしーのギルドはログイン率が低くギルドでの冒険はできずにソロでの冒険が多くなっていた。ソロでは限界があるため、条件が合うパーティメンバー募集があると、率先して参加していた。マモーミとは同じ斥候ということもあり、街で見かけると声をかけ、情報交換をすることもあった。よっしーはマモーミの隣の男にも人物鑑定をかけると、二人に近付いた。二人が見ている方向には人垣があり、がやがやとしている。が、背の低いよっしーには何が行われているのかよく見えない。

「マモーミさん、みの虫さん、ちはー。何？　何集まってんの？」

みの虫と呼ばれた男が急に振り返る。

「びっくりしたぁ。気配消して近づかないでくださいよ」

「あ、よっしーさん、久しぶりです。これですか？　ＰＫＫ祭りです」

「ＰＫＫ？」

よっしーがマモーミとみの虫の間を抜けて前に出る。そこでは足を鎖で縛られたボックスパンツ一枚の男が大勢に嬲られている。死にそうになるとヒールをかけられ、そこからまた攻撃受ける。ヒール、攻撃、ヒール。それが何回も繰り返される。

「いいねぇ、陰湿だねぇ。ＰＫ野郎には陰湿が一番」

よっしーがしみじみとつぶやく。

「あれ？　よっしーさんもそういう考えですか」

「そうだよ。でもどうしてここでＰＫできてんの？　街の中だよ」

「よっしーさんは『殺しの許可証《ライセンス》』ってアイテム知ってますか」

「ああ、ＰＫ禁止エリア解除アイテムね。あれ使ってるの？　あれって、も

のすごく高いじゃん」

ミドは基本無料のゲームだ。完全無料で遊ぶことができる。が、月課金と呼ばれるサービスを利用すると、取得経験値が三割増しになり、レベルアップが無課金ユーザーより三割楽になる。また、一日一個、特別アイテムを貰えたり死亡時のアイテムドロップペナルティもなくなる。屋台出店やギルド運営、支者でのログインはこの月課金が必要だ。月課金の価格は『バイト一時間半』である。『バイト何時間』この表現はよっしーのギルドでは『円』に代わってリアルマネーの単位になっていた。それはギルド内での会話に由来する。レベルアップが遅々として進まないと嘆くギルドメンバーに、当時のギルドマスターが月課金に入っていないのかと聞くと「ボクはまだ学生なんで。月課金ってバイト一時間半分ですよ、貧乏学生にはそんな大金払えませんって」の答えが。その二分後にログインしてきたギルドメンバーに、貧乏学生が月課金について話しかけたところ「入ってるよ。月課金ってバイト一時間半ぐらいの金じゃん。十分出せるでしょ。ミドはそのくらいの価値はあると思うよ」と即答。正反対の二人の意見と『バイト一時間半』という全く同じ表現に、その場にいた全員が笑い出し、そこから『バイト何時間』が『円』と同義語になっていた。

殺しの許可証ことＰＫ禁止エリア解除アイテム。混乱防止のため、都市や集落の内部、イベント会場ではＰＫが禁止されている。その設定を逆手にとってＰＫＫを逃れるＰＫが出てきたため、それに対する方策として出されたのがＰＫ禁止エリアのの禁止設定を無効にするこのアイテムだ。意図があって制限をしていることの解除ということで、金額は高い。一個あたりバイト五時間だ。月課金の三倍以上という高額にもかかわらず、予想をはるかに超える売り上げがあったという。それほどまでにＰＫに対する恨みが大きい人が多くいたということだろう。

「高いアイテムほど、使わないのはもったいないじゃないですか」

「そうすよ。使わないとお金払っただけで、全くの無駄になっちゃうんすよ」

よっしーの「高い」発言に対し、マモーミとみの虫がすかさず、切り返してくる。確かにその通りだ。いくら高額のアイテムでも、あと一時間後にはすべて『無』になってしまう。

と、攻撃されていた男へのヒールが間に合わず、ＨＰゼロとなり、男がよっしーの目の前で倒れる。その顔を見てよっしーが首をかしげる。

「あ、こいつ。知ってるかも。人物鑑定《フー？》」

周りのやじ馬たちはあっけない幕切れにブーイングをしている。

「やっぱりだ。俺、こいつに八回ＰＫされてる」

ＰＫはプレイヤーキラーもしくはプレイヤーキルの略だ。プレイヤーを殺すプレイヤー、もしくは、プレイヤーを殺す行為をさす。ＰＫにＫがついたＰＫＫはプレイヤーキラーキラーもしくはプレイヤーキラーキルとなる。ミドはＰＫを否定も肯定もしていない。が、ＰＫ行為を嫌うプレイヤーは多い。特に低レベルのときにＰＫされた経験を持つプレイヤーはＰＫをする者を毛嫌いする。よっしーもレベル十一になってすぐ、目の前で死んでいる

男、スザックにＰＫされた。

レベル十までのプレイヤーは初心者として保護される。ＰＫは対象外にされるし、冒険中に死んだとしても、ペナルティなしにその場で復活できる。ところが一回レベル十一に達すると、その保護はなくなる。死ねばその場に所有アイテムを一つドロップし、三十秒の行動停止ペナルティが課せられる。さらに復活する場所によってレベルダウンペナルティが変わる。システムＮＰＣが売っている、安いその場復活アイテムでの復活は、死亡したその場所で復活するが、その際、レベルは三つ下がってしまう。迷宮の入り口や最終訪問都市（集落）での復活がレベル二ダウン。復活アイテムを使わない復活はキャラクターの登録ホームポジションで復活し、その際のレベルダウンは一レベル分だ。

レベル十一のプレイヤーは一番ＰＫにあいやすい。低レベルでステータスも低いし、装備も整っていない。ＰＫをする者にとってはカモである。よっしーはそのころ集中的にＰＫを受けた。レベル十一でＰＫされレベル十にダウン。レベルを戻してまたＰＫ。避けるように狩場を変えてレベル十二にしたら、偶然出会ったクエスト用の迷宮の入り口で連続ＰＫされ、レベル十に逆戻り。八回目のＰＫの三十秒停止ペナルティ中に「こんなことをされまくるなら、もうミドなんかやめよう」と考えていたとき、たまたま通りかかった人が、まだその場に残っていたＰＫ男、スザックに仇討ちをしてくれた。さらにその人は「もう使わないから」といって、そのころのよっしーからすればかなり高額の装備を手渡し「また襲われることがあったらすぐさまメッセージ送って。すぐに駆けつけるから」とまで言ってくれた。その人がいなかったらよっしーはその時点でミドをやめていただろう。

「八回っすか？」

みの虫がよっしーを見る。

「や、だって初心者の頃だったから。そのあと、二回仇討ちしたし」

みの虫の発言が「こんな奴に八回も負けたのか」と莫迦にした発言に聞こえたよっしーがすかさず言い訳する。

「おーい！　ここに、こいつに八回ＰＫされた人いるっす！」

みの虫がＰＫＫしていた連中に向かって叫ぶ。

「そんなこと大声で云うなよ。恥ずかしいなぁ」

「ドロップを被害者に分配してるんですよ」

マモーミがみの虫の弁護をする。みの虫の叫び声が聞こえたのか、ＰＫＫのリーダーらしき男がよっしーに近付いてくる。

そして、よっしーの前に来たとき、倒れていたスザックの身体が黒く光り、消えていた鉄の鎖が復活する。鎖の出現とともにやじ馬たちからスザックにヒールの雨が浴びせられ、高速にＨＰが回復していく。ＰＫＫリーダーはスザックの胸ぐらをつかんで立ち上がらせると、オーバーアクションでアッパーカットをくらわす。スザックは空高く舞い上がるが、鎖に引き戻され地面に叩きつけられる。リーダーはそれで満足したのか続きは仲間に任せてよっしーと向き合った。

「八回だって？」

「二回仕返ししたからプラマイで六回かな」
「今の待ちの先頭がＰＫ二回だったから割り込みで次のドロップやるよ。…いいね！　次の人。八回の人が来たから、割り込み！」
「ＯＫ！　なんか次あたりクリスタル袋の気がするんだよね。僕、アイテム生成できないからクリスタルいらないし。その次の武器袋のがいいし」
ＰＫＫリーダーの元いたところに立っていたダークエルフがリーダーに向かって叫んでいる。
「や、や。いらないって。もらったって、もうゲーム終了だし」
「そんなこと言わないでもらっとけばいいじゃないですか、よっしーさん」
「そうすよ、よっしーさん。記念すよ」
「何の記念なんだか」
そんな会話の間もやじ馬の輪の中央ではスザックへの蹂躙《じゅうりん》が続いている。高位の剣技で攻撃してはヒール。高位の魔法で攻撃してはヒール。スザックはもう抵抗する気もないのか、されるがままになっている。
「いくぞー！　とどめ！　太陽落下《フォーリング・サン》」
スザックを前にして魔法使いが叫ぶ。と、上空に小型の太陽が現れ、どんどん近づいてくる。小型といっても優に都市を覆い尽くす大きさだ。
ドッカーン！　爆音と周りを埋め尽くす爆炎の赤。皆、耳をおさえ、目を閉じてしまう。
よっしーが目を開けると、そこには倒れたスザックの姿と水晶の絵が描かれた袋が転がっていた。
「ビンゴ！　クリスタル袋！」待ちの順番をよっしーに譲ったダークエルフがガッツポーズをする。「やったー、次はきっと武器袋だ！」
ＰＫＫリーダーは魔法使いに向かい「おいおい、街、壊す気か」といいながらマジッククリスタル袋を拾うと、よっしーに向かって投げる。
「ほら、やるよ」
「おう。何か判んないけど、ありがとう」
よっしーはマジッククリスタル袋を振って礼を言う。
「死亡ドロップに袋なんかあるんだね。知ってた？　マモーミさん」
「僕も今日はじめて見ました。インベが空になると倉庫から落ちるみたいですよ」
「倉庫って、何回ＰＫしてるの」
「さあ。でもかれこれ一時間近くになるらしいです。きっと、もう、レベル一に戻ってますよ」
「それなのに、なんでログアウトで逃げないんだろ」
「マゾなんじゃないすかね」
「ＰＫなのに？　ＰＫならＳだろ」
よっしー、マモーミ、みの虫が揃って笑う。
「クリスタル、いいのあったすか」
みの虫の問いによっしーが袋の中を覗き込む。
「うーん。数は山のようにあるけど。六位と七位がほとんどかな。十位が一個で超位はなし」

「しょぼいすね」
「ギルド倉庫にでもぶち込んどくよ」
ミドでは『位』が強さを表している。魔法やアイテムには『位』があり、位が高くなれば効果が大きくなる。一位が一番低く、十位が通常の最高位なのだが、十位の上に特別枠として超位が存在する。一位、二位は初心者用だ。魔法では、五位、六位あたりがよく使われるが、高レベルの魔法使いは七位、八位の魔法も使用する。但し、九位以上の魔法はＭＰ使用量が莫大であることと修得の難しさからあまり目にしない。先程、スザックが受けていた『太陽落下』は十位の魔法だ。十位の魔法は高レベル魔法使いの半数ほどが持っているが、超位となると所持しているプレイヤーは二パーセント以下といわれている。魔法使いでないよっしーは超位の魔法はなく、アイテムとして超位の籠手を一つ持っているだけだ。一つ持っているのだが、破損を恐れて、普段はギルド内の個室に置きっぱなしにしている。
マジッククリスタル。プレイヤー間では単にクリスタルと呼ばれている水晶だ。大きさは親指程度のものが多い。通常のＲＰＧでは、敵を斃すとお金やアイテムがドロップする。ミドでドロップされるのはお金とこのマジッククリスタルだ。マジッククリスタルは一つずつ固有の属性がついている。防御の属性のついたクリスタル、氷魔法の属性のクリスタル、革属性のクリスタル、鎧属性のクリスタル、玉ねぎ属性のクリスタル、片手剣属性のクリスタル、などなど。ＨＰ回復のクリスタルと水のクリスタルでポーション作成のスキルを使うとＨＰポーションを作ることができる。このとき一位のクリスタルを使うと一位のＨＰポーションになり、三位のクリスタルでは三位のＨＰポーションができる。三位のポーションを作るのは三位のポーション作成スキルを使用する。三位ポーション作成スキルはレベル三以上の薬師でないと覚えることができない。武器も同様で五位の剣を作るには剣属性を持った五位のクリスタルと金属属性のクリスタル、そして五位以上の刀鍛冶スキルが必要だ。
プレイヤーの総合レベルは一から百である。レベル一から十は俗に一位の冒険者と呼ばれる。十一から二十が二位で、以下同様。レベル九十一から百が十位の冒険者だ。アイテムは自分の位プラス二までのものが使用できる。装備に関しても同様で、三位すなわち総合レベルが二十一から三十のものは三位プラス二の五位までの武器や防具が装備できる。
「ところで、よっしーさんのギルドって、人、残ってます？」
「全然。いつもログインするのは俺だけ。月一でちょっとだけ入る人がもう一人いるくらい。そっちは？」
「うちの普段はみの虫さんと僕ともう一人位ですけど、今日は別に四人入っています」
「二百人ギルドでもそんなものかぁ。うちは、今日も俺以外誰も入ってないよ」
「よっしーさんのギルドは何人ギルドなんすか」
「五十人ギルドにしたんだけどね。結局二十五人を越えたことはなかった

よ」
「そうすか、で、このあとなんすけど」と言うみの虫の声にかぶって「あ、ＰＫ禁止解除、残り一個だ」と叫ぶＰＫＫの声が聞こえてくる。それを耳にしたよっしーがみの虫を手で制して、目の前にあけた闇の空間に顔を入れる。
「ＰＫ解除許可証、ギルド倉庫の自由棚に十二個あるから、渡すよ」
よっしーは空間に手を入れ、お札を取り出し、ひらひらさせて見せる。それを見たＰＫＫリーダーが再びよっしーに近付いてくる。
「いいのか？　そんなに」
「クリスタル袋のお礼」
「そっか、あり。でも結構持ってるんだな、殺しのライセンス」
「うちもＰＫＫギルドだから」
「じゃ、参加する？　ＰＫＫ」
「うーん。今日はやめとくよ。代わりに思いっきり、あいつ懲らしめてくれ」
「おう。まかせとけ」
ＰＫＫリーダーは札を手に仲間の場所に戻ると、札をＰＫＫメンバーに分配していく。
「よっしーさんのギルドって、素材提供ギルドだと思ってました」
マモーミがよっしーの顔と手の中のパッドを見比べながら聞いてくる。
「今は素材提供しかしてないけど。でも元々はＰＫＫギルドだよ」
「そうだったんですか」
「あ、で、さっきは話し止めてごめん。何？」
「あ、えぇと。このあとなんすけど、よっしーさんはどうします」
「うーん。ギルド部屋で感慨に浸ろうかと思ってるんだけど」
「世界蛇狩りがあるって聞いたんですけど、行きませんか」
「蛇ってミドガルズオルム？　どこに出るの？」
「赤の砂漠の先らしいです。参加者は十三時二十分にケープホップに集合ですって」
赤の砂漠は世界の南にある大きな砂漠だ。荒廃した大地が広がるだけで、モンスターもあまり湧かない。しかし、たまに湧くモンスターはかなり強い。その上、そのモンスターはマジッククリスタルをドロップしない。そのため、訪れるプレイヤーは皆無に近い。世界の果てに世界蛇《ミドガルズオルム》がいるのだが、赤の砂漠の先には侵入者を阻む骨ヶ原があり、誰もたどり着くことができなかった。
「赤の砂漠の先って、不可侵領域はどうすんの」
「エスピリさんって知ってますか。彼が突破したらしいです」
ミドは職業、種属の情報、アイテムの情報、クエストの出現条件など、冒険に関する多くのことが説明されない。キャラクター作成時に初期で選択できる種属や職業の説明があり、チュートリアルで基本動作の説明はあるが、初期装備、初期アイテム以外は全くと言っていいほどゲーム内では情報がない。
その情報不足を補っているのは公式ウィキである。私設の非公式ウィキ

サイトもいくつかあるのだが、一番にぎわっているのは公式ウィキだ。公式ウィキには不確定情報ページと承認済情報ページがある。まず、プレイヤーはログイン認証を受けて、不確定情報ページに投稿する。その不確定情報ページに書かれた内容を運営側がチェックし『中』以上の適合率の情報と判断されたものは、運営側の手によって承認ページに掲載される。その際、その情報の信用度、『中』『高』『極高』と一番初めに情報を投稿したプレイヤーの名前が併記され、そのプレイヤーには掲載された情報の重要度によって、ゲーム内通貨や課金アイテム、もしくは通常では入手できない特別なアイテム、魔法、スキルが配布される。そのアイテムを得ようとして多くのプレイヤーがウィキに書き込み、その結果、非公式が廃れ、公式がにぎわうことにつながっている。

よっしーも『運』の計算式に関する仮説を投稿したことがある。たまたま、その仮説が正解に近かったらしく、適合率は『中』であったが、特別な情報系のスキルブック二冊を貰っていた。

エスプリはその公式ウィキのクエスト攻略の分野で神とあがめられている人物だ。

「ウィキで有名な人でしょ。攻略法の調査に協力してくれって云われて、何回かクエのメンバーに入れたことあるよ。さすがエスプリさん。骨ヶ原攻略したんだ」

「で、どうします？　一緒に行きませんか。よっしーさんって総合レベル百の戦闘系じゃないですか。そういう人、必要にされますよ」

「そうすよ、行きましょうよ。そして、一緒に死にまくりましょうよ」

「う。ちょっと興味あるかも…」

プポーン。よっしーの頭の中で音が響く。よっしーはぴくっと動くが、マモーミとみの虫にはその音は聞こえないらしく、よっしーが続きを話すのをただ待っている。

「あ、ごめ、前のギルマスがログインした。ギルド部屋行くわ」

ギルドメンバーログインインフォメーションの音がのりののログインを告げるものであることを確認したよっしーが、誘いの断りを入れる。

「そうすか。じゃあ来れるようなら来てください」と残念そうに言うみの虫に、マモーミも同意する。

「ギルマスさんも誘って来てくださいね。みんなで一緒に世界蛇、斃しましょうよ」

「あ、うん。でもあの人、話し長いから無理かも。後で誰かがアップしたムービー見るよ。蛇戦頑張って。じゃ」

「はい。では、またどこかのゲームで」

「うん。別のゲームで」

（別のゲームか。それはないな）

よっしーは頭の中でそう答える。よっしーにとってミドは今までやってきたゲームの中で最高にのめりこんだゲームだった。つぎ込んだ金額も、遊んでいたゲーム時間も一番多い。愛着も一番だ。だから、ギルドメンバーが

誰もログインしなくなっても、たった一人で続けていた。そんなゲームにはそうそう出会わないだろう。ミドが終わるからと言ってすぐにほかのゲームにを楽しむ気になどなれない。

（しばらくゲームは休止だ）

よっしーが左手中指の指輪を回すと、よっしーの視界がすっと暗くなる。そして、よっしーの姿は広場から消えた。

ギルド部屋

さほど高価そうに見えない三人掛けのソファーと一人用のソファーが二つ、それにローテーブルの一般的なソファーセット。五人ほどが腰かけられるバーカウンター。西部劇の酒場に出てきそうな小さな丸のハイテーブル二つとその周りに椅子が三脚ずつ。バーカウンターの中ではひざ上十センチのミニスカートメイド服のメイドがグラスを一個一個磨いている。

そこへ、よっしーがジャンプインしてくる。ギルド部屋はギルドメンバーがログインするときに最初に出現する部屋だ。死亡時にギルド部屋での復活を選択した場合もここで復活する。ギルド部屋の構成はギルドによってまちまちで、謁見室をギルド部屋にしているギルドもあれば、復活時を意識し、診療所をギルド部屋にしているギルドもある。よっしーのギルドは談話室をギルド部屋にしていた。チャットゲーム化してきたこの頃のミドでは、その系統のギルド部屋が一番多い。

部屋に現れたよっしーは周りをきょろきょろ見回すが、メイドには目もくれない。

（のりのさん、いまどこですか？）

（王座）

よっしーの頭の中からの呼びかけに、のりのが頭の中への応答で短く返す。

（王座ですか。今行きます）

よっしーは左手の指輪を触り、ジャンプアウトした。

広めの部屋の床に敷かれた赤絨毯。その赤絨毯の上に片膝をついて頭《こうべ》を下げたよっしーがジャンプインしてくる。

「お久しぶりです。女王様」

「なに莫迦なことやってるのよ。元気だった？　よっしーさん」

「元気でしたよ」

よっしーが顔を上げると、目の前の赤い羅紗をふんだんに使った王座に、赤と黒のファーマントを羽織った女性が座っているのが映る。その姿はいかにも悪役の魔女か心根の悪い女王のようだ。

「いやあ、やっぱその王座はのりのさんが一番似合ってますね」

よっしーは立ち上がり、のりのの横に進む。

「あ、ごめん。今は美月《みづき》ちゃんの王座だったね」

のりのもささっと立ち上がり、よっしーと並ぶ。

のりののキャラクター正式名はのりのっ。そして、前のギルドマスターだった。歴代でいうと二代目のギルドマスターで、ミド終了が告知されてすぐ「入院する」と言い残して美月に三代目ギルドマスターを譲り、以降は月に一回程度のログインとなっていた。

「いいですよ、座ってて。美月は飾りなんですから」

「そんなことないよ。サービス終了の今日まで、ここがこのまま残っているのは美月ちゃんが課金を続けてくれたおかげだし」

「俺、社会人なんで、バイト一時間半ぐらい出せますよ。それに美月は終了告知の二日前に一年間分の前払いしてましたし」

厳密には、二十七日間課金期間が残った状態で、一年後のサービス終了告知の二日前に一年間の課金延長をしたため、二十五日分は過剰に課金したことになるが、その分は日割りで清算返金されていた。

ギルドを運営するには月課金が必要だ。だが、それはギルドマスターとサブマスターの課金があればいい。一般のギルドメンバーは月課金をしていなくても、ギルドに参加することができる。しかし、ギルドマスターの課金切れはギルド機能の停止につながる。課金切れがギルドメンバー全員に通知され、通知から二週間の猶予後、ギルド所有の迷宮、支者、倉庫は凍結され、一切使用できなくなる。凍結の後、二週間以内に月課金するか、月課金している人にギルドマスターを委譲しない限りギルドは強制解除となり、ギルドの財産はすべてミドの運営に没収されてしまう。

課金切れによる財産没収を避けるため、通常、ギルマスターとサブマスターは数ヶ月単位で月課金を前払いしている。よっしーはサブマスターなのでよっしー分としてもバイト一時間半、美月の分を合わせると月にバイト三時間の課金額だが、ミドにはその金額に見合うだけの価値があると思っている。いや、価値はそれ以上だ。だから、月課金のほかにも支者作成や課金アイテムの購入で、月にバイト十五時間から二十時間分の金をつぎ込んでいた。

美月は三代目のギルドマスターだ。そして、よっしーのサブキャラクターでもある。ミドはアカウント一つにつき一キャラクターだけで、サブキャラクターを持てない。公式にはサブキャラクターを持てないが、抜け道はある。別アカウントを作成し、そのアカウントでキャラクターを作ればいい。ミドの運営も課金をしている別アカウントは売り上げの面からも規制はせず、黙認している。

「それより、のりのさん。体調はもういいんですか」

「体調ってなんのこと」

「入院してるんですよね。時々昼間にログインだけしてるのって、病院からログインしてたんじゃないんですか。病院からだから長居できずにすぐアウトしてるのかなと思ってたんですけど」

「入院？」

のりのはじっとよっしーを見下ろす。入院は秘密の話だったかと、その時の様子を思い起こすが、円卓会議室に、当時のアクティブメンバーがほとんど揃った状態での、のりの自身による報告で、秘密の話ではなかったはず

だ。
「美月にギルマス譲るとき、入院でしばらくログインできないからって云ってませんでしたっけ」
のりのは首をかしげるが、しばらくしていきなり笑い出す。
「ああ、それね…」
そこまで言って周りを気にするようにぐるりと見渡す。

バロック調を基調にしたやや高めの天井とやや広めの部屋。謁見室というともっと広く、もっと天井も高い大広間を想像するが、ギルドに与えられたスペースの関係もありそこまでは広くない。前に誰かが「体育館の半分ぐらい」と言っていたのだが、実際にはさらにその半分もないだろう。
その部屋の一段高くなった壇に王座がぽつんとあり、王座の右後方に大鎌を持った軽鎧の女性騎士と燕尾服を着たよっしーより幾分背の高いインプがいる。そして、王座の左後ろには濃い黒のスライムがゆっくりと伸び縮みしている。王座から前を見ると、直立の黒い狼人、頭に翼の生えた女性騎士、小鬼が一匹ずつ扉に向かって壁に沿って並び、同じ組み合わせが向かい側の壁にもいる。そして、一番先、大きな扉の両脇にはメイド服の女性が立っている。
「ねえ、よっしーさん。よっしーさんは最後までそのキャラでいるつもり？」
「そのつもりだけど」
「美月ちゃんは、もうログインしない？」
「美月は午前中にログインしたから。よっしーのがメインキャラだし、こっちでいるつもりだけど」
「そっか」のりのはよっしーから目をそらし、扉の方に顔を向ける。「そっか。美月ちゃんはもうログインしないのか」
そう言われてしまってはよっしーも無下にはしにくい。
「美月の方がいいですか」
「う。うん。なんかね、美月ちゃんのが話しやすいんだよね。…それに、ギルマスが最後の最後にいないなんてどうかと思うよ」
よっしーからすればよっしーがメインキャラで、ミドの最後はよっしーで迎えたいという気持ちがあるのだが、ギルドメンバーからすれば、最後の瞬間にはサブマスターではなくギルドマスターがいるべきだという考えも理解できる。
「そう云われるとそうですね。じゃ、最後はギルマスで迎えますか」
「ごめんね。わがまま云って」
「いいですよ。最後の瞬間にログインしていることが大事なんで。それがよっしーか美月かは二の次です」
「ありー」
「じゃ、CC（キャラクターチェンジ）してきます」
言い終わると同時によっしーの姿が消滅した。

サブキャラクター

サブキャラクターは運営から黙認されていて、プレイ可能なのだが実際にサブキャラクターを使っているプレイヤーは多くない。それはサブキャラクターを使用することに利点が少ないからだ。二つのキャラクターを育成するのにかかる時間は、一体のキャラクター育成時間の倍の時間がかかる。いつもは剣士だが、たまには魔法使いという違うスタイルで遊びたいと思うのなら支者を作った方がいい。支者であれば最初から育成が終わったキャラクター、もしくは育成途中のキャラクターでプレイできる。

支者はギルドに加入することができない。サブキャラクターの利点を挙げるとすれば、メインキャラクターとは別のギルドに属することができるということだろう。が、よっしーと美月は同じギルドに所属している。利点を生かすことのない美月を続けているのは、一度作ったキャラクターへの愛着からだ。

美月が王座に足を組んだ格好で現れる。黒いシャツに黒のロングガウン。インディゴブルーのショートジーンズパンツに黒いニーハイのソックス。暗い茶色のロングブーツ。濃い褐色の肌。少し吊り上がった右目。漆黒の長めのボブヘアーに少し隠れ気味になっている左目には黒い眼帯がかかっている。のりのを高貴な女王様とするなら、美月は粗野な女海賊だ。

美月の出現とともに、美月の背後に白ずくめの女が湧き出る。腰まである白髪。裾が足首近くの白いロングコートに白いロングムートンブーツ。透き通るような白い肌。色合いは美月と正反対で、目は美月より丸く、眼帯もしていないが、他の顔貌《かおかたち》や体型は美月とそっくりだ。

「やっほー、美月ちゃん。おひさー」

「ただいま」

美月は答えると、すぐさま立ち上がり、のりのの横に立つ。美月はよっしーと違って背が高い。設定上は百八十三センチだ。よっしーを見下ろしていたのりのも、美月を見るときは見上げている。

「やあ、美月ちゃんだ。元気だった？」

「さっきもその話、したじゃないですか」

美月の声はよっしーの声とは異なり、女性の声になっている。女性の声としては低い方だが、それでも男性の声には聞こえない。それは美月がボイスチェンジフィルターを使用しているからだ。

ミドでは声が即時にそのまま別のプレイヤーに届くことはない。ゲーム参加に年齢制限がないため『不適切』な発言はブロックしなければならないという法規制の制約を受けるためだ。この対策としてすべてのプレイヤーの発言はシステムで自動的にフィルタリングされる。その不適切感知フィルターでプレイヤーの発した不適切な発言は、無音になるか別の言葉に置き換えられる。例えば『この腐れまんこが』とか『ちんかす野郎』などの発言は自動的に別の言葉、成人の耳には『あばずれ女が』『下種野郎』に聞こえ、未成年には『ふしだらな女』『かす男《おとこ》』に変わって伝えられる。

差別的な発言も同様で『てめーはめくらかっ』は『目が見えないのかっ』といった具合だ。これらの『不適切』発言はフィルターによって他のプレイヤーの耳には届かない。が、だからといって発言が許されている訳ではない。不適切フィルターにひっかかると、プレイヤーに警告が与えられ、五分間の発言停止処置がとられる。発言停止処置がとられた発言は、後にすべて運営側の人間の耳で再確認され、フィルターの誤認識と判断された場合は、警告が取り消される。が、意図を持った発言と運営が判断した場合は、正式に警告としてカウントされる。そして、その警告が既定の回数以上になると、ペナルティとしてアカウントの一時凍結や、重い時にはアカウント削除が課せられる。

荒らし行為防止のため、どういったワードがフィルター対象になるのかは公開されていない。明らかに問題があると判る言葉は気をつけようがあるが、中には何故『不適切』と判断されているのか判らないものもある。『スンスンスン。ハッ』何の問題もないようなこの言葉が、何故か禁止ワードになっている。そのため「禁止ワードの基準が判らない」との運営批判論争はしょっちゅう発生している。

プレイヤーはその不適切フィルターを切ることはできない。切ることはできないが、別のフィルターを追加することはできる。追加できるのは他国語を言語変換する翻訳フィルターや、声質を変えるボイスチェンジフィルター、語尾や文体を変える口語体変換フィルターなどだ。

実世界でのよっしーの地声はこもっていて聞き取りにくいといわれることがある。そのため、ミドでのよっしーの声は、よっしーの地声をベースにして、明瞭化の設定を上げたボイスチェンジフィルターを追加している。美月の声はベースはよっしーと同じで地声だが、ボイスチェンジフィルターとして、声の高低は女性にしてはやや低めにした女声化フィルターを設定し、一人称は『私』、文体もやや女性的になるような口語体フィルターを使用している。

プレイヤーの中には美月のようにプレイヤーの性別とキャラクターの性別が異なっているものは多くいる。公式の発表ではプレイヤーの男女比は男性六割、女性四割だが、ゲーム内のプレイヤーキャラクターは圧倒的に女性キャラクターが多い。

女性キャラクターの中には追加フィルターを使わず、男の地声で話すキャラクターもかなりいる。プレイヤー本体は男だというアピールなのかもしれないが、美月からすると女性キャラクターが男の声と口調で話すのは興醒めでしかない。男であることを伝えたいなら美月のようにキャラクター紹介の公開ページや最初の自己紹介で公表すればいいだけだ。女性キャラクターが男の声で話すよりは、男が女だと偽って女性キャラクターを操作する方が「ゲームを楽しむ」という観点からは何倍もましだ。

のりのは再び謁見室を見回す。

「宝物庫、行こうか」

のりのは支者の目が気になるのか美月を宝物庫に誘う。美月はＰＣ（プレ

イヤーキャラクター）はＰＣ、ＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラクター）はＮＰＣと割り切って考えるたちなので、ＮＰＣはいてもいなくても気にならない。だが、プレイヤーの中にはＮＰＣとＰＣを分けて考えない人がいるのも事実だ。美月はその程度のことであれば、そういう考えも否定しないし、自分の意見を押し付けようとも思わない。

「いいですよ」

「ブリュンヒルデ、ステイ。じゃ、先行ってるね」

右手薬指の指輪を触ったのりのがジャンプアウトで消える。美月も左手中指の指輪を触るが、ふと気が付いて後ろを振り向く。

「待ってて、美雪」

白い女が「うん」と言ってうなづくのを見届けると、指輪をくるりと回しジャンプアウトする。

のりのと美月の消えた謁見室は何一つ動くものはなく、誰もいないかのように静寂に包まれた。

ギルドの財産管理はギルドごとに異なる。どのような形態をとったとしてもトラブルは起きる。正解はないが、みな正解を求めて、あるいは正解を押し付けて、ギルドの決まりを定める。美月のギルドではギルドの財産は宝物庫と呼ばれる倉庫で管理されていた。宝物庫と言えば格好いいが、実態は幅が狭くて奥行きはやたらとあるウナギの寝床のような倉庫に棚がずらっと並んでいるだけだ。天井はかなり低い。背の高い美月でも頭が天井につくことはなかったが、圧迫感はかなり受けるし、手を伸ばせば簡単に天井に手が届いた。

宝物庫はエリア分けされていた。ゲーム内通貨の格納場所。消費アイテムの格納場所。マジッククリスタル場所。武器場所。防具場所。各格納場所は迷宮褒賞用、ご自由にお使いください（所有権も放棄）、ご自由にお使いください（ただし、返してね）、使わないで（個人倉庫がいっぱいなのでここに置いてます）に分かれている。自由使用のアイテムはわざわざ宝物庫に来なくても、迷宮内や特殊エリア以外では個人インベントリのギルド倉庫リンクから出し入れが可能で、美月はまず、ここを訪れることはなかった。そのため、こうして改めてこの場に来てアイテムの数を目《ま》の当たりにすると、その数の多さに驚いてしまう。

「うわぉ」

「すごいね。こうやって見ると」

のりのも美月と同じ思いらしい。美月は何回か右目をまばたきする。

「金貨が十二億枚。アイテムの総額はシステム評価額で金貨二十億枚分です」

「でも、そう云う数字じゃないよね」

「そうですね」

のりのは棚に置かれたアイテムを眺めながら、宝物庫の奥へと進んでいく。

「これなんかさぁ」

そう言って、装備品の棚にあるペンダントを手に取り、しげしげと見つめる。ペンダントには赤と青に輝く小さな卵形のペンダントトップがついている。

「覚えてる？　百円さん」

「覚えてますよ。その迷宮も」

「そ、百円さんが絶対にいいアイテムがあるダンジョンだって云い張って。ギルドみんなで繰り出してさ」

「そうでしたね。普段、そんなに我を張らない百円さんが、どうしたのかって思いましたよ。あの時は」

「ハハ。わたしもそう思った。どうしちゃったのって」

「潜り始めたのが、土曜の夜十時頃で、結局終わったのが、もう明け方近くの五時ごろでしたよね。一つの迷宮だとギルハンの最長記録じゃないですか」

「百円さん、三回死んでたし」

「よっしーも一回死にました」

「わたしも課金アイテム、何個か使ったんだよね」

ペンダントはのりのの目の高さでキラキラ輝いている。

「で、手に入れたのがこれ」

「うーん。価値じゃないですよね」

「そ、思い出だよね。って云いたいけど、にしても、この性能の低さは何！八位のアイテムのくせに、自然回復速度向上、ＨＰ回復微々、ＭＰ回復二十パーセント向上だっけ」

「百円さん、接近戦オンリーで魔法はあまり使わなかったから、ＭＰ回復向上って宝の持ち腐れでしたもんね」

「それでも意地でずっと身につけたたけどね。…ってこれがここにあるってことは」

「先月、終了スケジュールの正式発表の後、完全引退するって、持ってるアイテム全部と支者、ギルド倉庫に入れてきました」

「そっか、百円さんも引退か。この前インしたとき、ギルメンのリストにいないなとは思ってたんだけど」

のりのは武器の棚から日本刀「今宵虎徹」を出して、居合斬りの真似をする。日本刀「今宵虎徹」は「斬鉄剣助真」とともに百円が愛用していた刀だ。ギルドハンティングのような普段の狩場では、七位の剣である「今宵虎徹」を主に使用し、特別に強い敵が出てくるクエストのときは十位の「斬鉄剣助真」を使用していた。そして、どちらを腰にしていても、迷宮の入り口で百円はいつも居合斬りの型を見せていた。それは、百円にとっても一緒に回るパーティメンバーにとっても、毎回行う儀式みたいなものである。

「知ってました？　百円さん無課金じゃなかったんですよ」

「知ってたよ。月課金はしないけど、アイテムは買わない訳じゃない。課金アイテムのために、月に百円ずつ積み立ててるって」

「月、百円ですか」

「名前にちなんでそうしてるんだって」

美月とのりのは思わず顔を見合わせて、クスクスと笑う。
「百円さんはね、美月ちゃんのこと好きだったんだよ」
「何云ってるんですか。百円さん、私がよっしーだって知ってますよ」
「うん。でもね、好きだったみたい」
「え？　そっち系だったの？　百円さん」
「違う違う。キャラとして美月ちゃんのこと好きだったんだよ」
のりのは刀を棚に戻し、ペンダントを美月に渡す。
「百円さんも楽しい人でしたよね」
美月はペンダントを受け取りながら「あれれ？」と首をかしげる。
「どうしたの」
美月はペンダントを凝視している。左目は眼帯のため、美月の視界は他のプレイヤーより狭い。左側の四分の一が欠けている。美月からは、そのかけた場所に各種情報が投影されて見えている。

ミドではプレイヤーは実世界と同じように物を見て行動する。戦闘の場合も同じで、見て、音を聞いて、風で気配を感じて、敵を察知し、剣で斬りつけたり、魔法を放ったりして敵を斃す。右からの攻撃、左からの攻撃、飛んでくる火の魔法。戦闘において視覚は一番大事なファクターだ。片目を失うことは、視界の一部を失うだけでなく、遠近感も失う。斬る動作はある程度遠近感を補正できるが突きや投擲は距離感がつかめないと的中率は極端に落ちる。遠近感がないことは圧倒的な不利になる。

にもかかわらず、美月が隻眼を選んだのは、代わりに得られる特典のためだ。片目に対するボーナスステータスは「視界外の動きを察知する能力」「指定系統の魔法をスキルとしてＭＰ消費なしに使用できる」「ベースのステータスを二割増しにする」のいづれか一つだ。
美月は魔法のスキル化を選び、その系統は情報系魔法としていた。
アイテム：八位装備品（ペンダント）、アイテム名：赤と青のくすんだ輝き、効果：回復速度向上（ＨＰ五パーセント、ＭＰ二十パーセント）、評価額：千五百万金貨。
「千五百万金貨」
「そんなにするの？　このしょぼいのが」
美月はのりのに見せるようにペンダントを渡す。
「システムの評価額って何を基準にしているのかホント判んないですよね」
のりのは美月と向き合うと、背伸びをして美月の首にペンダントを付けた。
「いえいえ、百円さんのですし」
「ギルドの物はギルマスの物だよ」
「のりのさんはやっぱり横暴ですね」
ギルドではギルドマスターが全ての権限を持っている。先の宝物庫の他人は使用不可設定も、ギルドマスターとサブマスターはその設定自体を書き換え可能で、使用制限の対象外になっている。独裁的なギルドではギルドマスターが傍若無人に振る舞うこともないではないが、そのようなギルド

はすぐにギルド内部から崩壊していく。
美月のギルドはみな逆に「ご自由に」棚にあるものでさえ、借りるときには事前に連絡し、使い終わったら元に戻すとともに、その時の収入のいくらかを「ご自由に」棚に加えていた。
「ギルマスはギルド内のすべての設定を書き換え可能なんだよ。美月ちゃんは書き換えなかった？」
のりのにしても、口ではそういっても、実際には個人の利益だけではギルドマスター権限を使っていなかったはずだ。
「ＭＯＢのとか迷宮のとかの設定は変えましたけどね」
「わたしは人の作った支者の設定とかも変えちゃったよ」
「え。えー！」
美月の中では支者は完全に個人の所有物だ。保管上、ギルド所有に変更したとしても、安くはない課金を実際にした人が権利を主張すれば、その人の主張を聞くべきだ。
アイテムはいざとなれば同じものを買い揃えることができる。だが、支者はＰＣと同じで百人いたら百の個性。全く同じ設定でも、別個性に思えてしまうのだ。支者は作り出した人、育てた人の思い入れがあるはずで、そういった意味で支者は個人の物だ。
「さすがに、よくログインしている人のは変えなかったけど『ああ、この人、もうログインしないな』って思った人のは書き換えちゃった」
「そ、そうですか」
今までログインしていた人が、いきなりログインしなくなることはよくある。熱心だった人のログインが二日置き、三日置きになり、そのままフェードアウトすることも多い。「引退する」と宣言する人や、キャラクターを削除する人はまれだ。ログインしなくなった人の中には一年後にひょっこり戻ってくる人もないではないが、戻ってくる人か、こない人かはそれまでの付き合いから大体判る。
「ほら、闇面のＳＮＳで美月ちゃん、全部の支者の設定書いてたじゃない」
「全部じゃなくて主要キャラだけですけどね。あそこだけです。美月名義で書き込んでたのは」
「あれって、すごいなぁって思ってたんだ」
「妄想族なんで、ああいうの好きなんです。下手の横好きですが」
闇面ＳＮＳ。ギルド、ダークサイド・オブ・マイ・マインドのメンバー専用ＳＮＳ。ミドとは一切関係のない一般向けＳＮＳグループサイト上に作られた、ギルドメンバーしか参加できないＳＮＳサイトだ。ギルドの連絡やメンバー間の懇親のために作られたサイトで、美月はよっしー名義ではゲーム日記を、美月名義では支者のサイドストーリーを書いていた。
「弘明寺さんはキャラ設定が薄かったでしょ」
「キャラ自体はメッチャ強かったですけどね」
「でも『地獄の犬・その一』『地獄の犬・その二』はないでしょ」
「それは私も思いました。だからＳＮＳに設定を書いたんです」
「それ見て、弘明寺さんに『美月ちゃんの設定に変えなよ』って云ったんだ

けど。そしたら『ギルマス権限で変えといて』って。で、わたしが変えたの。そしたら、いやぁ、ひどかったよ。犬その一は『凶悪』、その二は『極悪』としか書いてなかったもの。だからその後ろにに美月ちゃんの文章を貼りつけたの。それが最初かな。人の支者の設定変えたのは」

「そ、そうですか」

「支者設定見てると人それぞれで楽しいよね『あ、このキャラ、表設定と裏設定、全然違う』とかあったり」

支者の設定には公開設定欄と非公開設定欄がある。表設定は人物鑑定魔法や鑑定スキルを使えば、誰でも見ることが可能だが、裏設定は所有者しか見られない。だが、どちらの設定も支者の性格に反映される。裏と表が極端に異なる場合、ＡＩがフリーズを起こすという噂もある。美月はＳＮＳに投稿したサイドストーリーを表設定に、さらに細かいほとんど短編小説といっていいほどの長い話を裏設定に書いていた。

「私は見ないようにしてます。人の支者の裏設定は」

「そうなの？　それぞれの設定、知ってないと反旗翻されるかもよ」

「反旗って支者がギルドに対して反乱起こすってことですか」

「そ。空想の翼のこと聞いてない？」

「空想の翼？　何ですか、それ」

「空想の翼って云うギルドで支者が団結してギルドルーム占拠して、ギルメン殺しまくったらしいよ」

「それって、ただの噂じゃないですか。それにうちは絶対服従規定があるから大丈夫ですよ」

「何それ」

「ギルド創設の時、最初に決めましたよね」

絶対服従規定は、ギルド所有支者の共通設定で個別設定より優先されるよう定義されている。正確な文章は忘れたが「支者はギルド及びギルドメンバーに絶対服従で、ギルドメンバーを神のように敬うこと」「そのことに一切の疑問を持たないこと」が謳われている。

「わたし、ギルドの立ち上げのときは、まだいなかったから」

のりのはどこからか取り出したパッドで規定を調べている。

「うーん。これなら大丈夫かな。ま、実際に大丈夫だったんだけど」

「何か心配事でもあったんですか」

「ほら、ジェスターとくまちゃんの狂気の魔女。ジェスターはいつもわたしに、たてついてくるし、狂気の魔女は精神の均衡が崩れると魔法少女を道連れに自爆するよ」

「ジェスターの設定は平気です」

「なんだ。美月ちゃんも支者の設定見てるんじゃない」

「いえ、見てないですよ。ツカサバルちゃんに頼まれて、性格設定手伝ったんで知ってるんです。あの辛辣さはギルドを想ってのことで、より良い案をギルマスに検討させるためですから」

「でも、口悪すぎ。わたし、へこんだこと何回もあるよ」

「私もです」

「『のりのっ様っ。本当に…』」
「『本当にそれが一番の方法だとお思いですかっ』」
のりのの言葉を美月が引き継ぐ。
「云い方がキツイのよ」
「そうそう」
のりのと美月は楽し気に、そしてどこか淋し気にジェスターの悪口を言い合う。
「でも、狂気の魔女って知らないです」
「何だっけなぁ、名前。なんとか沙里菜だったと思うんだけど」
「サリナですか。記憶にないです。領域統括じゃないですよね」
「統括じゃないよ。一般支者かな」
「うーん。一般の支者までは覚えきれてないです」
「でも、確かレベル百だよ。って、あれ？　くまちゃん個人持ちの支者だったかな」
「個人持ちならギルマスでも設定見れないじゃないですか」
美月の言葉にのりのが固まる。そして、下を向くがすぐに美月を見上げる。
「それもこれも、あとちょっとで終わっちゃうんだよね」
ミドのシステムは微妙な感情表現はできないのだが、美月の顔をのぞき込むのりのの眼は淋しそうに見えてしまう。
「そうですね」
「美月ちゃんとはいろんなことを話したね」
「はい」
のりのが美月の左頬に右手をそっと伸ばし、優しくぷにゅぷにゅとつまむ。
「好きだったよ。美月ちゃん」
女性の姿かたちをしているが、美月の中身は男だ。女性からのぞき込まれるように見上げられ「好きだ」といわれたらドキドキしてしまう。
「本当に好きだったよ。妹みたいで」
…妹かよ。弟でもなく、妹かよ。
二人きりの密室でドキドキしていたのが一気に興醒めである。
「い、妹って。また」
「あー、あのことは云わないでよ。あれ、わたしのミドガルズオルム生活の最大の汚点なんだから」
ドキドキを失った腹いせにのりのが「失敗した」と思っていることを話題に挙げる。美月からすればそんなに大したことではないと思うのだが、のりの自身は気にしていて何度も美月、もしくはよっしーにからかわれていた出来事を。
「じゃあ、今日は特別にチクチクいじめるのやめときます」
「そう云う優しいところが、やっぱり美月ちゃんだね。ほら、ミドって『俺TUEEEE』って人多かったでしょ。そんな中で人のためにアイテム作ってる美月ちゃんはすごく可愛かったよ」

ミドには最高位の冒険者が大勢いる。大勢いるということはいろんな人はいるということで、弱い相手に無双をしているプレイヤーもよく見かける。パーティを組んでいても一人で敵を斃しまくり、周りから顰蹙を買う前衛職は履いて捨てるほどだ。その上、そういうプレイヤーに限って、少しでも後方支援が遅れるといつまでもネチネチと嫌味を言い続けるから始末に負えない。

よっしーもどちらかといえばそのタイプだった。自ら戦ってこそがＲＰＧの醍醐味と思っていて、後衛職のプレイヤーが後方支援に徹するのを理解できずにいた。あるとき、ギルドの治癒職に「ヒーラーってどこが一番楽しいの」と聞いたところ「判んない？　パーティメンバーの生き死にって、ぼくのさじ加減一つなんだよ。ヤな奴へのヒール後回しにして、好きな人が助かって、ヤな奴が死んだときなんかゾクゾクするよ」と答えられた。それからだ、よっしーが後方支援をないがしろにしないよう心に決めたのは。

実は美月の誕生もそんなところの延長線にある。アイテムを作って後衛にプレゼントするという姑息な手段だ。よっしーでアイテム生成を行おうとすると、総合レベルは百までという制約からどうしても戦闘力が下がってしまう。そこまで自己を犠牲にするつもりはない。アイテム生成用の支者を作って、それにアイテムを作らせる手段もあるが、それではありがたみが少ない。ならば新しく別キャラクターを作ってそれに作らせればどうか。そのためのキャラクターが美月で、のりののように、人のためにアイテムを作ってるなどといわれると、心苦しくなってしまう。

「よっしーは俺ＴＵＥＥＥＥでしたから。私はその対極に位置付けていましたし。それにあんな罠作ってて、可愛いはないでしょう」

「あまりに可愛いから、生まれてきた娘にミズキってつけたの」

「ふえ？」

話の展開についていけず、美月は素っ頓狂な声を上げてしまう。

「ツに点々じゃなくて、スに点々だけど。瑞々しい希望で瑞希」

「はい？　え？　娘さん？」

確かのりのは独身だったはずだ。ギルドに加入してきたころ、彼氏との悩みやのろけ話を美月にしてきていた。その後、結婚したとは聞いていない。まあ、結婚はしなくても子供を産むことはできるだろうが。

「入院って云ったのは出産入院。その後は育児が忙しくって、全然ログインできなかったのよ。ナメてたわ、育児。これほどまでとは思わなかった」

セミリタイアしたいからギルマスを降りる。ちょっと入院するし、その後も今迄みたいにはインできないから。そんな感じの言い方だったはずだ。出産入院。間違ってはいないが、明らかにミスリードを誘っている。思い出してみれば、入院云々と言い出す半年ほど前からのりのは急に迷宮に行かなくなった。ギルド迷宮の近場の森でかなり弱い初心者レベルのフィールドモンスターを相手にするか、ギルド部屋で仲間内でのチャットをするだけだった。ミドに飽きてきたのだろう。そう思っていたので、セミリタイアの話が出たときは、本当に病気なのかなと、変な勘繰りをしたのだが、今回の

話を聞けばあの時ののりのの行動も納得できる。
「おめでとうございます。全く、そう云うおめでたい話は内緒にしないで、早くに云ってくださいよ」
「でも、ほら、美月ちゃんにはいろいろ、相談と云うか話ししちゃったじゃない。ちょっと恥ずかしくって」
「じゃあ、あの時の話の彼と？」
「ったく、昼には帰ってくるって云ってたのに。半休なんかじゃなくて、今日ぐらい休めばいいのに」
「旦那さんの話ですか」
「そ。くまちゃん」
「ん？　くま、ちゃ、ん？　えっ！　旦那さんって、あのくまちゃん？」
「そうだよ」
「それじゃあ、略奪愛したんですか」
　ギルド加入時の感じとか、その後の二人の雰囲気からのりのの相手はくまちゃんじゃないかと疑っていた。ただ、くまちゃんには奥さんがいることを美月、というか、よっしーは知っていた。のりのとくまちゃんは不倫カップル。そのことでのりのは悩みを持っている。そう確信していたのだが、あってるか違っているか。さすがによっしーも当人には聞けない。逆に他のギルドメンバーから「よっしーさんはくまちゃんと親しいですよね。くまちゃんとのりのさんって、できてるんですか」と聞かれた時も「そうなの？　全然気づかなかったけど」ととぼけていた。旦那さんがくまちゃんというなら、くまちゃんは奥さんと離婚し、のりのとくっついたということなのだろう。
「は？　略奪…。そうだ、美月ちゃん、あの時誰にも何も云ってないって云ってたけど、くまちゃんに何か云ったでしょ」
「や、や、や、や、や。何も云ってないですって」
「うそ。くまちゃん云ってたよ『よっしーが云ってたけど、のりの、恋愛関係で悩んでるんだって』って」
「や、や、や。そんなこと、一言も云ってないですって。本当に」
「じゃあ、そういうことにしておきましょう」
「本当にホントですって」
　のりのが再び美月の頬をぷにぷにする。
「ううん。感謝しているの。あのときもあのあともいろいろあって。でも、今が幸せなのは美月ちゃんのおかげだと思っている」
「私は何もしてないですよ」
「何をしたか、してなかったかじゃなくて、一緒にいてくれたってことだけで、十分ありがたかったよ、本当にありがとう」
「やめてくださいよ。しんみりしちゃうじゃないですか」
「うん。そうだね。でも、本当に楽しかったなぁ。今まで知らなかった自分とか知ることができたし」
「楽しかったですね」
　のりのと美月がお互いを見つめあい、同時に突然笑い出す。

「ガラにもなくギルマスやってて、わたしってタカピーな女王様の面があるんだって、ミドで初めて発見したよ。実体はものすごくおしとやかなのに」
「何云ってるんですか、私は本物ののりのさんと会ってるんですよ。そのままの人だったじゃないですか」
「違う違う。あの時はゲームと同じで役を演じてただけだよ。それに、私が会ったことがあるのはよっしーさんで美月ちゃんじゃないからね」
「何とでも云ってください。でも、私も、美月で迷宮の罠作ってて、ホントの自分はこんな陰険なんだって、びっくりしました」
「そうそう。美月ちゃんの罠、陰険すぎ」

ギルドの収入はギルド屋台の売り上げやギルドメンバーからの寄付もあるが、メインは迷宮からの収入だ。ギルド所有の迷宮に入っている人数とその時間によって、運営から配当金が分配される。多くの人が長い間入っていればギルドの収入が増える。さらに、迷宮内でプレイヤーが消費したアイテムのシステム評価額の三割がギルドに支払われる。また、迷宮内で物を落とした時は、六十秒以内に拾わないと、そのアイテムは消滅し、ギルドの所有物としてギルド倉庫に移動する。

迷宮内のＭＯＢはフィールドＭＯＢと同様に、斃されればランダムでゲーム内通貨やマジッククリスタルをドロップする。これらはシステム側が提供し、ギルド側での出費は発生しない。だが、ＭＯＢに特別な装備やアイテムを持たせるときはギルド側で用意しなければならない。もちろんそのアイテムの費用はギルド持ちだし、用意した分をすべて使い切れば、その次に湧くＭＯＢからは装備しなくなる。なおかつ、これら特別に所持しているアイテムや装備品はＭＯＢであっても死亡ドロップの対象になる。

ＭＯＢは斃されることを前提にしている。斃されれば持っている装備品をドロップしてしまうので、通常はわざわざＭＯＢにアイテムを持たせることはしない。

迷宮にはモンスター（ＭＯＢ）がでる。それを斃せばマジッククリスタルやゲーム内通貨、経験値が手に入る。さらに素材提供迷宮では、素材となるマジッククリスタルも採取できる。しかし、迷宮にはフィールドにはない罠があることも。

迷宮に入るプレイヤーの目的は素材集めか経験値集めで、ＭＯＢのドロップは副産物と思っている冒険者がほとんどだ。些細なＭＯＢからのドロップを拾うのに時間をかけるより、その『拾う』時間を使って数多くの迷宮を攻略し、迷宮完了報酬をもらったほうが効率的だというプレイヤーさえいる。パーティを組んで迷宮に入るときは、よほど親しい身内だけのパーティでない限り、ＭＯＢドロップは拾わないのが礼儀にさえなっている。

美月の罠で最も効果を上げていたのは毒トラップだった。手に取ると毒を受けるという罠をゲーム内通貨に仕掛け、それを五割の確率でＭＯＢに持たせる。迷宮に入ってきたプレイヤーがＭＯＢを斃すとそのＭＯＢが罠通貨を持っていれば、罠を落とす。ＭＯＢドロップを拾わないプレイヤーは

多いが、拾うプレイヤーもいる。拾うプレイヤーは罠通貨を拾うと、罠が発動しプレイヤーが毒を受けてしまうという仕組みだ。通常のＭＯＢドロップのみのときは毒は受けないのだが、二回三回と罠で毒を受ければ、九割以上のプレイヤーはドロップを拾わなくなる。拾われなかった通貨は全てギルドの収入となる。罠通貨はそのまま再利用すればいい。罠をプレイヤーに拾われてしまっても、受けた毒をアイテムで解毒すれば、そのアイテムの価値の三割がギルドに還元される。毒や罠は購入しているのではなく、美月が薬作り、アイテム生成の鍛錬の一環として作っているため、比較的安く済んでいる。システム評価が高い毒消しアイテムの三割とほぼ変わらない額だ。もちろんドロップのたびに罠発見の魔法を使い、罠があったら罠解除の魔法を使われれば、すべてを失ってしまう。だが、たかがＭＯＢのドロップごときに毎回、罠発見の魔法を使うのはそれこそコストパフォーマンス的に非効率だ。

美月は、迷宮内のモンスターも独自の配置法を組み入れていた。迷宮に配置している敵キャラクターはほとんどがＭＯＢだ。ＭＯＢは最大レベルが三十までで固有名も個性もない。その代わり、初期設定時にゲーム内通貨か、課金を支払えば、以降はたとえ斃されても追加費用なしに永久的に使用できた。支者は斃されれば高価な復活アイテムを使わない限り、死亡状態が継続し、以降使うことができない。素材提供迷宮では、プレイヤー撃退に重きを置かないため、迷宮内に支者が配置されることは少ない。配置した支者が斃されてしまったら、高額な出費が発生するからだ。

闇面の素材提供迷宮は一部の領域に中ボスとしてジャイアントアントクイーンのＭＯＢとその取り巻きとしてジャイアントアント、ジャイアントアントソルジャーのＭＯＢを配置している。その迷宮エリアはシステム評価で三位に評価されている。やってくるプレイヤーも総合レベルが二十一から三十の三位の冒険者と三十一から四十の四位の冒険者がほとんどだ。アントクイーンはレベル二十二。取り巻きのアントはレベル十、アントソルジャーはレベル十七。アントとアントソルジャーの数はやたら多く、その上アントクイーンには標準でアントの召喚魔法があるので、さらにその数は増す。そのため、初心者には難しいかもしれないが、推奨レベルのプレイヤーであれば攻略は十分に可能だ。…通常ならば。

美月はここにジャイアントアントの支者を配置した。大きさも形もＭＯＢのジャイアントアントと同じで固有名が『シャイアントアント』という戦闘系の支者を。支者はＭＯＢと異なり、個性を持つ。通常のアント系は火属性を弱点としていて、同時に多数湧くことが多いため、プレイヤーは火属性の範囲魔法で攻撃することが多い。シャイアントアントは火魔法の耐性を持ち、さらに四位の防御力向上スキルを持ったレベル三十四の暗殺者だ。この支者は乱戦となったとき、十回に一回の割合でその場にジャンプインしてくる。そして、ＭＯＢのジャイアントアントに紛れプレイヤーの背後に回り込み攻撃する。

生産系である美月は暗殺者ではないが、よっしー自身は暗殺者で使用する武器には毒を塗っている。よっしーの作る支者も暗殺者が多い。それは、

戦闘は卑怯であればあるほど効果的だという信念があるからだ。

アント系のモンスターは種属スキルとして蟻酸毒を所有している。蟻酸毒は一時的に視界を奪う毒だ。ＡＩでの発動確率は千分の一程度であるため、軽視されがちだが、乱戦中の視界喪失は致命的になりやすい。シャイアントアントの前足に装備した武器にはこの蟻酸毒が塗ってある。種属スキルとしての蟻酸毒は攻撃毎に千分の一の確率での発動だが、武器に塗った毒は、攻撃がヒットすれば、三割程の確率で発動する。それはヒット毎に三割だ。背後から連続して四回前足を突き刺せば、かなりの確率でプレイヤーは視界を失う。シャイアントアントは四回攻撃するか、反撃を受けると再びＭＯＢのアントの中に紛れ込み、ジャンプアウトで戦線を離脱する。

視界を奪われ結果斃れた、もしくは、シャイアントアントの攻撃でそのまま斃されたプレイヤーからすれば、乱戦の中で運悪く死亡したようにしか見えない。毎回、同じように殺されるのなら怪しむこともあるだろう。が、これが起こるのは『乱戦』になったうちの十回に一回だ。さらに斃したプレイヤーの名前は記録に残していて、シャイアントアントが乱入するのは二回まで。同一人物相手には三回目は乱入しないようＡＩ定義してある。

運が悪いとだけ思ったプレイヤーは、今後もまた迷宮に来てくれるし、大抵、高価な復活アイテムを使用し、ペナルティを少なくしてその場で復活する。そしてその三割がギルドの収入になる。復活アイテムを使わなかったとしても、死亡ドロップがあれば、そのドロップ品はギルドの所有物になる。

「陰険であればあるほど、卑怯であればあるほど、戦略としては正しい戦略でしょ」

「おー。美月ちゃんも云うねぇ。さすがダークサイド・オブ・マイ・マインドのギルマス。まさに闇面だね」

「そんなに褒めないでください」

二人は顔を見あわせて笑った。

ダークサイド・オブ・マイ・マインド(The Darkside of my Mind)。通称、闇面。それが美月がギルドマスターを務めるギルドの名称だ。命名は設立当時のメンバー全員の合議となっているが、それでも初代ギルドマスターのくまちゃんの意見が大きい。実世界ではできないことをやろう。それがいいことでも悪いことでも。そういうスタンスを持つプレイヤーが集まり結成したギルドだ。よっしーが初心者の頃、ＰＫをされていたとき助けてくれたのがこのくまちゃんだった。

「実世界じゃあ、人助けなんか絶対しないのに、あのときは何故かよっしーを助けなきゃって思っちゃったんだよね」

ギルド創設会議を兼ねた初めてのオフ会で、くまちゃんがよっしーに照れくさそうにそう言っていた。

「いやー、あのとき、よっしーがこっちが恥ずかしくなるくらい感謝してくれて、うれしかったな。それからだよな、二人でつるんでＰＫＫはじめたの。最初は正義感でＰＫＫしてたんだけど、この頃は人殺す行為自体が楽しくなっちゃってさ」

「ったく、そんな闇の発言、公共の場でしないでよ」

よっしーが笑いながらそう窘め、周りを見ると、会話の途中、人殺す云々のあたりで料理を運んできた居酒屋店員のいぶかしむような、おびえたような視線にぶつかり、その場の全員がふき出すように笑いあった。

料理の皿をテーブルに置き、逃げるように去っていく店員の背に向かって「大丈夫ですよ。彼は闇の仕事人ですけど、堅気の人は手にかけないですから」と追い打ちをかけたのは、当時はまだ友好関係にあったタブンモリだったか、健次朗だったか。

その流れからギルド名が「闇」をイメージする名称と決まり、各人意見を出し合ったのち、くまちゃんの「これでいいね」の一言で決まったのが、ダークサイド・オブ・マイ・マインドだ。ただ、会話で使うにはあまりに長い名前なので、いつもは闇面と呼ばれるようになっていった。

「じゃあ、わたしも先代のギルマスとして、ちょっとだけ闇面、披露しちゃうね。…あのね。わたし、くまちゃんと一緒になってもうすぐ十年だから。ミド始めたときはとっくに結婚してたよ。だから略奪愛じゃないからね。ま、みんながわたしたちのこと不倫カップルじゃないかって疑ってたのは知ってたけど。本当のこと云わないでおいたほうのがおもしろいかなって思って、いままで黙ってたんだ」

ぽかーん。

まさに、ぽかーんだ。美月は何か言おうとするが、過去のいろいろな場面でののりのの言葉やくまちゃんの言葉が思い出され、頭の中の整理がつかず、言葉が出てこない。

「えぇと、あのー」

「じゃ、秘密の告白も終わったから王座戻ろ。最後の瞬間は全ギルド支者集めて、賑やかに終えよっか」

「え。えぇと、そう、ですね」

「なんだ。美月ちゃん、まだわたしの闇面のダメージ負ってるの。じゃあ、わたし先に行ってるから、落ち着いたら来て」

そう言ってのりのは間髪入れずに指輪ジャンプする。美月も後を追うように左手の指輪に手を伸ばしかけ。

ふぅ。

大きく息を吐く。

「ったく、絶対あの時のの仕返しだ」

頭を下げた美月の顔は周りからは見えないが、独り言の口調から、苦笑いしているのがうかがえる。

「ちっ。最後の最後にしてやられた」

美月は顔を上げて、倉庫をもう一度見渡す。これが実世界だったら感傷で涙を流すのかなと考えながら、システム上、涙が流れることのないミドガルズオルムの中で、いとおしむように倉庫の中の品々を眺めていた。

カウントダウン

謁見室。のりのの後ろに従っていた女騎士ブリュンヒルデを先頭にヴァルハラの乙女たちが控えている。少し離れて原色ピンクのいかにも少女趣味のフリル服の少女の後ろに色違いの服を着た同じような四人の少女が膝をつき列をなしている。そんな中で、ブリュンヒルデとピンク服の間で白い女、美雪が所在なげに立っている。

王座に美月がジャンプしてくる。

「わたしの権限だと、第一層と第四層しか呼べなかったよ」

王座の横に立っていたのりのが、美月の到着を確認すると、支者が全員そろっていない言い訳をする。

「じゃあ、残りは私が。って支者全員呼ぶとこの部屋、いっぱいになっちゃいますね」

「うん。そう思ってわたしも統括しか呼んでない」

「じゃあ…。コール、全階層統括支者。コール、全領域統括支者」

美月の声に合わせて、赤いオーガが平伏した姿で現れる。赤いオーガの後ろには二匹の大きな犬と上半身裸の筋肉質の男が控える。白い女、美雪も赤い絨毯の上で膝をつき、その背後には二人のエルフが続いている。美月とのりのの前で跪《ひざまず》く支者たちは戦闘に特化した支者たちで、普段はギルド所有の迷宮で防衛活動をしている戦闘支者だ。

ギルドは既定の金貨と五人以上の創立メンバーがいれば創立できる。だが、すべてのギルドが迷宮を持っている訳ではない。ギルドを作ってすぐ与えられるのはギルドハウスの中の一室だけだ。ギルドハウスは、各都市の中にある。

ギルドは創立時にどの都市を本拠地にするかを決め、その都市のギルドハウスの管理人に創立申請書を提出する。ギルドハウスの中にはその都市を本拠地として登録しているギルドの数だけ部屋が存在することになるが、実際には、ギルドハウスの中にはギルドの設定管理を行うＮＰＣの横に扉が一枚あるだけでその扉を通過すると自動的に所属するギルド専用の部屋へ転移するシステムになっている。

ギルドが所有する迷宮はギルドハウス毎に数が決まっている。美月のギルド、闇面が本拠地とする都市、ジョケンスタッドではその数は二十だ。ジョケンスタッドの登録ギルド数は最盛期で百八十。闇面設立時は百弱だった。

迷宮が欲しいギルドは、迷宮の権利を、所持しているギルドから買うか、奪うしかない。奪う方法は、その迷宮を所持するギルドに対し宣戦を布告し、迷宮を完全攻略し、迷宮所有ギルドメンバーとの戦闘に勝利することだ。迷宮攻略の直後に対ＰＣ戦となることや迷宮戦の日時は防衛側が指定できることから迷宮戦は圧倒的に防衛側が有利だ。

だが、闇面は権利購入ではなく奪取により迷宮を取得した。迷宮を持つと決めた時から足しげくギルドハウスに通い、迷宮持ちのギルドを調べ、それぞれのギルドメンバーの活動パターンを収集した。その一方でギルド迷宮を周回し、攻略対策を立てていった。最終的には対象を三つに絞り込み徹底

調査の上、宣戦布告。それでも何回か返り討ちにあい、奪取できたのは三つ目のギルド迷宮で、トータル五回目の挑戦の時だった。

迷宮はその迷宮ごとに使用できる大きさが決まっている。大きさは決まっているが、中は権利所有者が自由に変更できる。闇面では迷宮を五階層に分け、さらにその階層内を四つのブロックに分割していた。

第一階層から第四階層までは通常のダンジョンとして構成し、第五階層の第一ブロックは最終迎撃エリアとし、残りはギルドの居住区としていた。そして、ダンジョン部の階層には階層全体を統括指揮する支者を置き、その中のブロックにはその領域内を統括指揮する支者を領域統括支者として配置していた。

階層分割や統括支者の考えは闇面独自のものではない。ギルド迷宮運営の手引書にモデルケースとして書かれている。PCだけで迷宮防衛を行おうとするとPCは二十四時間体制で張り付かなければならなくなる。PC不在時はもちろん、ログイン時も通常プレイができるようにするには自分と同じレベル、もしくはそれ以上の支者を使えばいい。また、支者使用の提示はゲーム運営会社にとって支者販売の広告の一つでもある。

今、美月とのりのの前にいる支者は、この統括支者たちだ。彼らのほかにはシャイアントアントのような通常の戦闘支者が何体かいる。統括支者の主たる業務は迷宮防衛だが、素材提供迷宮に攻略目的で入ってくるプレイヤーはほとんどいない。また、闇面の迷宮を攻略目的で入ってくる場合は謎解き的なトラップを解き明かさなくては次の階層には進めず、実際に四階層まで来た侵略者は、迷宮運用開始から今まで一組しかなかった。素材採集目的で迷宮に入ってきたプレイヤーに対しても、統括支者は時折出撃し、ギルド収入アップに貢献しているが、通常時は暇を持て余している。ブリュンヒルデや美雪は階層統括だが、のりのや美月の随行支者も兼ねている。美月がログインすると、美雪は自身が戦闘中や警戒待機中でない限り、美月の横に付き添うようAIプログラミングされていた。

「統括のほかには…」美月は周りを見る。「ジェスターとロデムーも前へ」

背後にいたインプとスライムが「はい」と返事をして、統括支者の横で跪く。

「せっかくですから、百円さんのキャラも呼びますか。それと工人も呼んでいいですか」

「いいよ」

美月がぶつぶつと何かつぶやくと、美月の視界に支者のリストが表示される。

「コール黒明星、コール全工人頭領、コール全参謀」

工人はギルドの工房に配置したアイテム生成を主とする支者だ。PCが高位の武器を作ろうとすると、職業として刀鍛冶のレベルを上げ、武器作成のスキル一つずつ上げていかなければならない。武器作成のスキルを上げるには鍛錬と呼ばれる活動をしなければいけないが、支者であれば、一気に十位の武器生成スキルを持った刀鍛冶レベル十の支者を作ることができる。

支者では超位のアイテムは作れない。PC作成品より微妙にステータスが低い。などの欠点はあるが、実際に使う分には問題ない範囲でミドで流通しているアイテムのほとんどは支者製だ。

ミドでのアイテムは六種に分類される。武器、防具、服、薬、料理、護符。それらを作るにはそれぞれ、刀鍛冶、甲冑士、裁縫士、薬剤士、調理士、祈祷士の職業資格とスキルが必要だ。職業の最高レベルは十であるから、レベル六十一の支者が一体いれば十分に事足りる。支者はプレイヤーの冒険者に相当する職業として支者レベル一を必ず持つため他の職業レベルを取るにはレベル二以上が必要になる。そのため六十の職業を取るにはレベル六十ではなく、六十一が必要だった。

闇面にもそのような支者が一体いる。ギルド創立時によっしーが寄贈したオッチャという名のノームだが、最近はあまり使われていない。オッチャのほかにもアイテム生成を主とした支者が大勢いる。各アイテム種別ごとにそれぞれに特化した支者たちが一体ずつ。さらによっしーが職業と魔法の展開の調査用、兼、マジッククリスタル採集手伝いとして作成したレベルの低い支者が何体か。他にも、ギルドメンバーが育成に失敗した支者たちが、最低限の職業とスキルを与えられ、半ば姥捨て山のように工房に追いやられていた。

一方、参謀はロデムーと呼ばれた黒いスライムを筆頭に、情報収集を主に扱う情報参謀と戦術指南が名目の戦術参謀が二体ずつの計四体いる。参謀と名乗っているが、情報参謀は斥候役が足りないときの手伝いで、戦術参謀は後方支援の援護者が足りないときの手伝いにすぎない。しかし、プレイヤーとともに行動することが多い分、親しみは工人と比べると多少強かった。

美月の呼び出しに応えるように黒服の女とドワーフ、オークがインプの後ろに現れ膝をつく。そして、ロデムーの後ろには、二人の男と一人のダークエルフ、さらには、白い霧状の浮遊体が現れる。のりのは黒い背の高い女に近付いていく。

「この子が百円さんの？」

「はい。黒明星、顔を上げて」

黒明星と呼ばれた黒服の女は「ハイ」と答えながら、顔を上げる。のりのはその顔をじっと見つめる。

「どことなく美月ちゃんに似ていない？」

「そうですか。服が黒いんでそう思うのかもしれないですね。それに、その服は私のおさがりだし」

「じゃあ、前の服だったら、雰囲気違ったのかな」

「明星は初めからその服ですよ。百円さんは女物持ってないから、美月のおさがりもらえないかって云うので、黒明星って名前に合わせて、私の黒い服、プレゼントしたんです。戦闘服も黒い私のおさがりです」

「そうなんだ」

黒明星を見るのりのの目が厳しくなる。まるで、穢れたものを見る目だ。

「あなたは百円さんにアイされていたのね」

黒明星は小首をかしげながら小さく「ハイ」と答える。
「皆、面《おもて》を上げっ」
美月の号令に「ハッ」と声を揃えて返答し、支者たちが顔を上げる。ギルドマスターの醍醐味の瞬間だが、美月がかけるこういう場合の号令は何故か安っぽい時代劇風になってしまう。そんな自分に苦笑しながら、今度は優しく「立って」とだけ命じる。すべての支者がじっと美月を見ている。のりのはその支者の列の中を歩き、一体一体の顔を見ていく。魔法少女の列、オーガの列、美雪の列、そしてブリュンヒルデ。のりのはブリュンヒルデの前で立ち止まり、頬をなでる。
のりのさんて、頬触るの好きだったっけ？　美月は今までのことを思い出してみるが、特に頬に関する記憶は出てこなかった。
「あ、そうだ。さっき云ってた沙里菜も呼びますか」
美月は先ほど支者のリストの中に見つけていた佐伯沙里菜の名を出す。のりのは支者に対して思い入れが強いようだ。そののりのが気になっていた支者なら呼んだほうがいいのではないか。そう思っての問いだ。
「ダメダメ。あの子、こんなところに呼んじゃあ。空気壊すだけだから」
即答である。
「ってどんなキャラなんですか」
美月は視界の中のリストから佐伯沙里菜を選び、詳細ステータスを表示する。
名前：佐伯沙里菜、通称：狂気の魔女、種族：人間種（白色族）、総合レベル：百、主たる職業：治癒士、聖職者、狂戦士…。
「あっ。ちょっと待って」
のりのが一瞬フリーズする。
「ええとね。帰ってきたみたいだから、ちょっと抜けてすぐ戻ってくる」
「もしかして、くまちゃんですか」
「そ、彼にもインするように云うから、ここで待ってて」
のりのは美月の返事も待たず、いきなり消える。のりのが消えると謁見室は静寂に包まれる。支者たちは身じろぎ一つしない。こういうところを見てしまうと、美月には、支者とＰＣを同列に扱う気持ちが判らない。
美月の視界の中のデジタル時計が十三時五十六分を示している。美月がまばたきをすると、その表示が十四時へ向けてのカウントダウンに変わる。残り三分二十二秒。
「あと三分。のりのさんじゃないけど、くまちゃんも今日ぐらいはもうちょっと早く帰ってくればいいのに」
美月は昨日、今日、明日と休暇を取っていた。これだけ思い入れのあるゲームだ。最後の最後は遊び倒したい。遊んで遊んで遊びつくしたい。どこまで行っても「遊びつくす」ことはないだろうが、少しでもその境地に近付きたい。でなければ悔いが残る。食事とトイレと少ない睡眠。昨日はそれ以外はずっとログインしていた。初心者のころ、何度も死んでやっとの思いで攻略した迷宮。ギルド設立当時にみんなとよくギルドハンティングに出かけた迷宮。レベル八十時代にチャレンジし続けたが、結局はあきらめ、リベン

ジをしていなかった辺鄙なフィールド。そして、最近のルーチンワークにしていた迷宮。それらの迷宮に潜り続けた。初心者迷宮はほんの二十分で楽々攻略し、ギルドハンティングの迷宮もソロで余裕だった。「よし、かなり強くなっている」と自画自賛だったが、あきらめたフィールドは最後のボスの直前でＭＰ不足となり、やっぱりあきらめで、「さほど強くなってなかったか」と嘆いたり。

そして、今日は朝から美月で入り、素材が揃っている中で最高位のアイテム。剣、兜、復活薬、小型原子爆弾を作り、その後、美月と美雪のお揃いの服を何着か。靴や帽子もいくつか作っていた。そして、よっしー用にダマスカス鋼のダガーを二本、美月用にはナックルと籠手。最後に晩餐代わりの豪華な昼食を作り、一人寂しく、少しだけつまんでいた。そういえば、料理の途中で久々に美月のレベルがアップしたんだっけ。最後にもう一度、よっしーで日常の迷宮に行くため、詳細は確認せず放置していたのを思い出す。本来なら、レベルアップ直後は職業レベルを上げ、魔法のレベルも上げるか、新たにリスト入りした魔法を覚えるのだが、今日となってはレベルアップもあまり意味がない。それに、魔法やスキル修得のクエストを行う時間のほうが惜しい。

今は、もう残り二分を切った今は、ただ感慨に浸っていたい。

「よいしょっ」美月は王座から、ぴょんと立ち上がる。「みんな、楽にしていいよ」

支者たちは、サッと起立の状態から休めの状態に移行する。中にはきょろきょろしだす支者もいる。そんな支者たちを美月は見ていく。

左端のドワーフ。美月の視界にステータスが表示される。

名前：ホワイト・スミス、種族：亜人種（ドワーフ）、役：甲冑士頭領、主たる職業：甲冑士。

それと同時に工房のホワイトの姿を思い出す。

工房で籠手を作っているホワイト。出来あがった籠手を特攻服を着たスケルトンウィザードが受け取り、魔法を付与する。スケルトンウィザードから籠手を受け取ったよっしーが装着すると、籠手は一瞬黒く輝く。よっしーが手首を曲げると、三本のトゲがハリネズミの針のように飛び出る。

ドワーフのいる列の先頭のジェスター。

名前：ジェスター・クラウン、通称：ジェスター、種族：亜人種（インプ）、役：ギルド執事、主たる職業：執事。

ログインする美月の視界に表示されるジェスター名義のギルド収支報告書。それにかぶってジェスターの顔が見上げている。王座に座った美月に指を突き付け、何かを言うが美月はそっぽを向いている。

真嶋まなか。

名前：真嶋まなか、種族：人間種（黄色族）、役：第四階層統括、主たる職業：魔法少女、聖職者、弓騎士。

ギルドハンティングに同行するまなか。よっしーの背後の敵を弓で次々と斃していく。圧倒的に強い。

赤いオーガのイェマラジャ。

名前：イェマラジャ、種族：亜人種（オーガ）、役：第三階層統括、主たる職業：裁判官、死神。

灼熱地獄で人間の冒険者を待ち受けるイェマラジャ。金棒を振り回す。メスのウェアウルフと背中合わせで、冒険者パーティからの攻撃に対抗する。

白い女、美雪。

名前：美雪、偽名：夜美雪（イェメイシェ）、通称：美雪、種族：亜人種（イエティ）、役：第二階層統括、主たる職業：氷魔術士、暗殺者。

美月に随行する美雪。鉱山で鉱石採集している美月の周りで、雑魚キャラを蹴散らしている美雪。雪山の頂上で並んで座って星を見ている美月と美雪。

ブリュンヒルデ。

名前：ブリュンヒルデ、種族：亜人種（ヴァルキューレ）、役：第一階層統括、主たる職業：槍騎士、死神。

常にのりのに随行するブリュンヒルデ。

「のりのさん、遅いなぁ」美月が小さくつぶやく。

「はい。そうですね。早く戻ってきてほしいです」

美月の独り言を自分への問いかけと認識したのか、ブリュンヒルデが唐突に答える。その不意打ちに美月はビクッとしてしまう。こういうところだ。こういうところが美月が支者と人とを同列に扱えなくしているのだ。支者のＡＩは雰囲気を感知し、反応を返すのだが、その対応基準が美月にはいかにも『システム的』に思えてしまうのだ。

だが、美月に支者に対する思い入れが全くない訳ではない。人型のものと一緒に過ごせば愛着も湧く。システム的な会話しかできなくても、否、システム的な会話しかできないからこそ、話せることもある。だが、それは人間の友達に対するものとは違う。ペットに対する愛着、ペットに話しかける行為、これと同じ感覚だ。

「そうだね。早く戻ってほしいね。最後だからログインサーバーが混んでるのかな」

美月の視界にワールド情報が表示される。

ログインＰＣ人数：３５８４、ログインＮＰＣ人数：１２８、ＮＰＣ：６５４７０、ＭＯＢ：１３００７２。

「いつもよりは多いけど、でも障害起きるほどじゃないよなぁ」

全盛期には、美月はまだワールド情報の表示スキルを持っていなかった。聞いた話によると三万人以上が同時ログインしていたという。美月が見た最大数は二年前のサマーイベントで一万四千人がログインしていた。それが、最近は千人超えるか超えないかだ。それからみると、今日の三千五百人はかなり多い。普段のログイン人数が減ったためログインサーバーを減らしたらしいと噂になっていたがそれが本当のことで、三千五百人でもログインに影響が出ているのだろうか。それでも、サーバーは止まっているのではないらしく、ログイン人数はパタパタと変動している。カウントダウンはあと六秒。

「のりのさん、間に合わないか」

美月がブリュンヒルデを見るが、今度は女騎士は何も言わない。
「ばいばい。ミドガルズオルム」
カウントダウン、ゼロ。
ログインＰＣ人数：４、ログインＮＰＣ人数：０、ＮＰＣ：２５６、ＭＯＢ５１２。カウントダウン表示が消える。
ログインＰＣ人数：２、ログインＮＰＣ人数：０、ＮＰＣ：１２８、ＭＯＢ２５６。カウントダウン表示『マイナス００２』。
「え？」
ログイン人数が２から１へゆっくり変わる。
ガンッ。
美月は頭に殴られたような衝撃を感じる。そして、視界が暗転した。
周りがざわついていて騒がしい。ゆっくりとだが美月の視界が回復していく。
「痛い。いったいなぁ。いくら強制ログアウトだからって、もっと優しくしてくれよ」
美月が頭を押さえる。何回か緊急メンテナンスとかで強制ログアウトを経験したことはあるが、これほどひどいログアウトは初めてだ。システム終了が影響しているのだろうか。
「美月様。美月様。いかがされましたか」
完全に目を開けると、ブリュンヒルデが心配そうに美月をのぞき込んでいる。ふと横を見ると美雪が倒れ掛かった美月を抱きかかえるようにして支えていた。
（なんだ、まだログアウトしていなかったのか）
「大丈夫、ちょっとクラッとしただけ。大丈夫だから」
そう答えるものの、美月はどこかに違和感を感じていた。周囲を見ると支者たちがみな心配そうに美月を見ている。ジェスターなどはあわてて駆け寄り、美月の腰のあたりを支えている。背の低いインプが背の高い美月の腰のまわりに付き添う姿は、助けているというより、母親にまとわりつく子供のように見えてしまう。
「美月様はお疲れであるっ。いったん王座へっ。…それとも横になられますかっ」
「もう大丈夫だから」
美月は気持ち悪さを感じながらも、そう答えてしまう。いつもそうだ。
「この仕事、今週末までにやって。来週から試験稼働したいから。大丈夫か？　できるか？」
無理だ。ボリューム的にできる訳がない。言っている本人だってそれくらい判っているはずだ。でも答えてしまう。
「大丈夫です。どうにかします」
『無理』と答えることはできない。相手もそれを望んでいない。下請け会社の社員に求めることなどそんなものだ。無理な仕事を押し付けて、その人間

がつぶれても大企業の腹は痛まない。福利厚生だの社員の待遇向上だののお題目を掲げても、その恩恵にあずかるのは、大企業に直接雇われた社員だけだ。下請けは、大企業の社員の福利厚生のために、さらなる重稼働を強いられる。

美月は違和感の一つが情報ウィンドウにあることに気が付いた。

人間種：１６７１０８９ＸＸ、亜人種：９３５５４４ＸＸ、モンスター種：２００４０９９ＸＸ。

下二桁は常に変動している。

「何これ、どうしたの。全然判んないんだけど。表示が、表示が狂ってる」

「いかがされましたかっ」

ジェスターが不思議そうに美月を見上げている。美月は左のこめかみを軽く叩く。

「ワールド情報ステータスの表示が…」

美月がジェスターを見る。そして視界にジェスターのステータス詳細を表示させる。

名前：ジェスター・クラウン、通称：ジェスター…、ＨＰとＭＰのパーセント表示の小数点以下が絶えず変動する。

美月は次にブリュンヒルデの顔を見る。そしてブリュンヒルデのステータスを表示。美雪の顔とステータス。イェマラジャの顔とステータス。どの顔も戸惑った顔をしている。

「システム、ログアウト」美月が叫ぶ。「システム、ログアウト。ログアウト！」

プレイヤーキャラクターはある程度、自分の思うように動くことができる。肘や膝、首、手首、足首、指。主だった関節は人間と同じように動く。プレイヤーが支者でログインした時も同じだ。だが、ミドと実世界では違うところもある。ミドでは微妙な感情表現ができないのだ。笑顔、泣き顔、困惑顔、怒り顔の基本パターンはあるが、それは定型パターンで都度、変化するものではない。もちろん、毎回、顔の表情パターンをプログラムしなおせば、前回とは違う表情をすることも可能だが、だからといってプレイヤーもしくは支者が自由に表情を作れる訳ではなく、決められた表情を再現しているにすぎない。ＡＩで動くＮＰＣや支者には動作基本パターンが数百あるので、生きているのと変わりがない動きに見えるが、よくよく注意してみるとシステムが動かしているのが感じられてしまう。それは目の動きで顕著だ。人は物の配置を主に目で把握する。情報収集はかなりの割合で目を使う。そのため、視点が一箇所に留まることはまずない。常にあちこちを見ている。支者はシステムデータから、直接情報を得る。もちろん動くものを目で追う動きはできるが、それは物を見ている訳ではなく、動くものの座標データに向けて視線を合わせているに過ぎない。結果、普段なにげなく支者に接するときはいいのだが、意図を持って支者の目を凝視したときなどはどうしても『死んだ目』に見えてしまうのだ。

先ほどから見せている支者たちの表情は、いつもと違う。システム的な感

じがしない。動きも発言もシステムが用意したものとは思えない。何かがおかしい。支者にあんな微妙な表情などできる訳がない。意図的でない『まばたき』などある訳がない。ましてや、無意識に目の下を掻くなどの行動を痒みが存在しない支者がとる訳がない。カウントがゼロになってから、何かが狂っている。他のゲームで死亡者が出たと噂された、システム事故が頭の中をよぎる。ログアウトしなければ、強制ログアウトでも、緊急ログアウトでも何でもいい。

「システム！　ログアウト！　ログアウトしろー！」

美月は喚きながら、両手を振りまわして暴れる。そうすれば、ログアウトできるかがごとく。

「美月様、おちついてくださいませ」

「美月様っ。どうされましたかっ」

支者たちは恐る恐る美月をなだめようとしている。美月は「ログアウトだ」と叫びながら暴れるのをやめない。スライムのロデムーがびょーんと縦に長くなる。

「全階層統括は美月様をお守りすべし。佐久間涼は部隊を率いて、美月様に精神攻撃を仕掛けている者を索敵すべし。領域統括は美月様の狂戦士化《バーサーク》を警戒しつつ周りで警護、敵発見しだい殲滅すべし」

一部がパニックになっている場での一人の冷静な者の存在は千金の価値がある。明瞭な指示はただオロオロするだけだった群衆を動かす力となる。息を荒くして無秩序に周りを殴りまくっている美月を、体の大きいイェマラジャが背後から羽交い絞めにする。右腕をブリュンヒルデが取り押さえ、左腕には真嶋まなかがぶら下がっている。

バシッ。

美雪が美月を平手打ちにした大きな音が聞こえる。力一杯ふりぬかれた美月の頬には手の跡がくっきりと残っている。そして、その音で全員の動きが止まる。イェマラジャもブリュンヒルデも真嶋まなかも、そして美月も。

美月の視界の左端には悲しげな表情の美雪と美雪のステータスが映っている。

そして、美雪は動きの止まった美月を抱きしめる。まるで我が子をいとおしく抱くように。

「大丈夫。大丈夫だから。ねっ」

頬と頬を合わせながら、美雪が涙を流す。美月は視界の隅でその涙をとらえた。

（ありえない）

ミドには涙は存在しない。用意されている泣き顔もウソ泣きだ。それは支者もＰＣも同じだ。ありえない。支者であろうと、プレイヤーキャラクターであろうと、涙を流すことはありえない。

ここにいる女の形態をした生物は何なのだ。そもそも生物なのか。ただのシステムデータなのか。

「誰？　あなたは誰」
「何云ってるの変な子ね」
美雪が身を離す。そして美月の目の前に立つ。
「自分の双子の姉のことも判らないの？」
美雪は美月を見つめ、涙を流しながらニコッと笑う。
「ありえない」
美月の視界が暗転する。
（ありえない）
そのまま美月は意識を失い、イェマラジャの腕の中に倒れこんだ。

精神世界

気持ちがいい。ふわふわとした浮遊感と脱力感。何も気負う必要もなく、何からも束縛されない。ものすごく気持ちがいい。どこでもないところで、かつ、どこでもあるところ。一面の黄金に近いオレンジ色の世界。至福の時、至福の世界。オレンジの世界が穏やかな風に揺れている。その世界で、ただふわふわと浮いている。
遠くで人の声がする。何を話しているんだろう。周りはただオレンジで何もないし誰もいない。話している人たちはどこにいるのかな。何を言ってるのかな。もっと近くで話してくれないと聞こえないよ。
…しても、どうされ…
今までにこのような…
よしよし、近付いてきた。もうちょっと、もうちょっとこっちきて。
…美雪。どうなのですかっ。お前は常に随行していたから判るで…
ああ、私はなんてことをしてしまったの。支者でありながら、やんごとなき御方《おんかた》に手をあげ…
「あの状況ではしかたがないのであーる」
「そう、不可抗力なのです」
うんうん。やっと聞こえるようになってきた。
「でも不敬には違いないことで…」
「美雪の処罰はのちほど美月様に決めていただくとしてっ。それより今は美月様の御不調が一番の重要事項であろっ」
「そのとおりであーる」
みんな変な口調。笑っちゃう。時代劇でもやってるのかな。「美月様の御前であるぞ。頭が高い、控えおろう」なんちゃって。…ん？　でも、どこかで聞いたことあるような。美雪？　美月様？　面《おもて》をあげっ？　うーん。何だっけ。
「ああ、どうして私は美月様と姉妹なの。私は支者。この御方はやんごとなきお方。無理。無理がありすぎなのに」
「それは、およっしー様がそのように定められたからであーる」
よっしー？　俺、何かしたのか…。…んーと…今日はミドの最終日で…あれ？　世界蛇退治に行って死んだ？　うーん。違うような…。ギルド部屋戻

って…支者たち集めて…。
「…そう。でも敵はいなかったのだから」
「佐久間涼が発見できなかっただけであーる。いなかったとは限らないのであーる」
「だけれども、佐久間涼は十位の情報収集魔法が使えるのですよ」
「そういうことだっ。佐久間涼が見つけられなかったということは、敵は『いない』と同じだっ」
…しゃべっているのは、ジェスターとロデムーとブリュンヒルデかな。相変わらずジェスターは口調がキツイなぁ。もっと優しくしゃべればいいのに。…あっ。ちょっと周りが見えてきた。

ギルド部屋。美月が三人掛けのソファーに横たわっている。美月の寝ているソファーの前で美雪がうなだれている。美月の目がゆっくりと開くが、うなだれている美雪はそれに気づかない。美月は目だけをゆっくり動かす。最初の見えたのはうつむいた美雪。次はカウンターの手前側の椅子に座っているブリュンヒルデ。美雪の陰に半分隠れているがジェスターは丸テーブルのところにいるのだろう。そして、そのジェスターの隣にいるのは上下左右に伸び縮みしているロデムー。美月は瞬時に状況を把握する。
はっ。
おちつけ、おちつけ。おちつけ！
美月の息をのむ音で、美雪が気づく。
「あっ、美月さま…美月。気がついたの」
美雪の声に、まっさきにジェスターが駆け寄ってくる。
（お！　ち！　つ！　け！）
「美月様っ。お見苦しかったですぞっ。皆の前であのようなっ」
「ジェスター、何があった…」
「ハイ？」
普通に話したつもりだったが、その弱々しい声に美月自身も驚いてしまう。正直のところ、もう少し休んでいたい。でもそう言ったなら、ジェスターに何と言われるか判らない。美月は力を振り絞る。
「状況はどうかと聞いている！　どうなっているのか！」
「失礼しましたっ。順に説明いたしますっ。美月様が我々を謁見の間に集められ…」
「そこはいい！　私が…」
美月のもとにブリュンヒルデとロデムーも寄ってくる。
「ブリュンヒルデ、起こして」
美月はブリュンヒルデを見止めるとブリュンヒルデに向かってさっと手を伸ばす。
計算だ。この四人の中で誰に声をかけるか。誰に手を伸ばすか。近くにいるジェスターも美雪もどちらかというと建前で動く者たちだ。一言二言、余計なやり取りが必要になる。今は極力体力を使いたくない。ロデムーとブリュンヒルデなら美月を気遣ってくれるだろう。体面のためには弱いところ

は見せられない。それは子供のころからの性分だ。そうあれと教え込まれたその結果だ。

「しっかりしろ。男だろ」「何だ、男のくせにみっともない」「もう少し男を見せろよ。そんなんだから女上司にナメられるんだ」男なら、弱いところを見せるな。男女平等なんか、ただのお題目だ。いつの時代も男は男、女は女。男はいつも強くあれ。

美月の姿をしていても、子供のころから沁み込んだ性分はなおらない。弱いところは見せられないが、本当に弱っているときは気遣ってもらってもいいじゃないか。ならば、手を伸ばす先はブリュンヒルデしかない。ロデムーは最初から対象外だ。スライムには美月の手を取る腕がない。

「大丈夫でいらっしゃいますか」

ブリュンヒルデは戸惑いながらちらっとジェスターを見る。美月はそれを無視してブリュンヒルデの腕を取り上半身を起こす。

ふぅと一息。大丈夫だ。身体的には大丈夫だ。

「ごめん。いろいろ。ちょっと混乱が残っているみたい。もう大丈夫だから。で、私、狂戦士化した？　しなかったよね。ロデムーのみんなへの指示、的確だったよ。ありがとう。美雪もね。そこで私、倒れたよね。その後のこと教えて。何が、何があったの」

ジェスターと美雪とブリュンヒルデとロデムーが互いに互いを見合う。ロデムーの目はどこにあるんだろう。目の位置が判らないのに、なんで見合っているのが判るんだろうと、場違いなことを思いながら、美月は四人をぼんやり見ていた。

「ではっ。報告はわたくしからっ。美月様の御不調でまずは横にとっ、美月様のお部屋にお連れしようと思いましたが我々がお部屋に入るのは失礼かとっ。ですからっ、一旦このギルド部屋へっ。ここは広くありませんのでっ、われわれ四名でお見舞い申し上げておりましたっ」

そうか、四『名』って云えばいいんだ。ロデムー以外は三『人』って云っていいと思うけど、ロデムーは人じゃないよね。だったら、四人はおかしいし。じゃあ、なんて云う？　四匹？　それはさすがに失礼でしょって思ってたけど、四名か。なるほど。四名って言い方ならいいかも。

「敵は見つからないよ」

「はい？」

「私が索敵してないとでも思った？」

そう言いながら美月は左耳の後ろを掻く。それを見たロデムーがビョーンと一回横に伸びる。美月自身は気づいていないのだが、美月もよっしーも他愛のないウソをつくときは左耳の後ろを掻いてしまう。周りでそれを知っている者は少ない。ロデムーはその少ない中の一名だ。逆にロデムーは気になることがあると縦か横に伸びる。危険を感じ取ったときは縦に、危険がないときは横だ。それがスライムの特性なのか、ロデムー個体の特徴なのかは判らないが、美月はそのことを知っている。ロデムーの動きからウソがばれたことを知り、一瞬身構えるが、その動きが横方向だったことに安心す

る。
「私にも判らないってことは、敵はいないか、超位の魔法で隠れてるってこと」
「超位の魔法を使う者がいるのなら、警備を厚くすべし」
「ちょっと待って。まずはいるかいないかを調べることが大事。枯れ尾花相手に無駄な事したくないし。最初にそこ、調べて。相手は超位の雲隠れ使ってるとなると、普通に探しても見つからないからね。ちょっとでも変わったことがあったら、それが何でも報告するように」
「索敵も大事ですが美月様の体調のほうがより重要事項ですっ」
「私のことはどうでもいい！　ジェスターは一般使用人およびＭＯＢからの聞き取り調査とりまとめ。ロデムーは各参謀と工人。美雪は真嶋たち、イェマラジャたちと分担して迷宮内の調査。ブリュンヒルデは乙女たちをつれて外を見てきて。ただし、あまり遠くへは行かないように。それと、もし何者かを発見しても接触はしないで。今は敵の情報がない。なさすぎる。不用意な接触は危険だから」
「ハイ」
「こちらに情報がないのであれば、相手にのこちらの情報がないはずっ。だから高位の魔法を用いてまで、こちらを調べているっ。故にっ、こちらの手の内を知られる前に叩いてしまえばっ…という考えもないではありませんがっ、危険でございますねっ。接触しないというのは正しいご判断かとっ」
　ジェスターも批判だけじゃなくて、褒めてくれることもあるんだ。と美月は感心する。今まで褒められたことがなかったのは、よっぽど自分がギルドマスターとしてダメだったか、それとも今回の変化でジェスター自身が変わったかのどちらかだろう。と考え、早くもこの状況を許容しつつある自分に内心驚愕する。
「予見を与えたくないから本当はこんなこと云いたくないんだけど。…おそらく敵はいないよ。でも、それ以上のことが起こってる。何が起こっているのかはまだ判らない。ただ、未曾有のことが起こっているのは間違いない。そのつもりで調べて。些細な変化も見逃さないで」
　敵の攻撃などという、そんな単純なことで命を持たないシステムデータの支者が、生きているかがごとく動き出す訳がない。当然それ以上の『何か』が起きているはずだ。
　美月の言に四名の支者が「ハイ」と返す。
「いい？　じゃあ、それでよろしく」
「美月様！」
　美雪が美月の前で平伏する。
「何。どうしちゃったの。改まっちゃって」
「先ほどの私の所業、大変申し訳ございません」
「一体、何のこと」
「支者の身でありながら、やんごとなきお方に手をあげる…あげるなど…あげるなどという…」
　美雪の声は涙に震えて聞き取れない。

「私がさぁ、何でもないって云ってるんだけど、それじゃあダメだって云うの？」
「あの場には大勢の者がおりましたっ。皆が見ておりますっ。今後の示しのためにも不問という訳にはっ」
「その通りでございます。なにとぞご処分を」
まったく以って安い時代劇だ。時代劇は嫌いではないが、安すぎる。子供のころは勧善懲悪の絶対君主のいる時代劇が好きだった。この世界はそんな美月の精神世界なのだろうか。ただ、そういう世界が好きだったのは何も知らない子供のころだけだ。大人になってからは、世の中には完全なる善も、完全なる悪も存在しないことを知ってしまった。一方の主張する正義は相手にとっては悪であり、悪と主張されているものこそが、他方の信じる正義であるということが歴然として存在するのだ。それは単に立場の違いや価値観の違いでしかない。絶対的な善悪が存在しないのであれば、勧善懲悪は単なる子供だましのおとぎ話だ。
「ったく。死んでお詫びするとでも云うつもり？」
時代劇はすぐに死ぬ。時代劇でなくても善と悪がテーマの劇は簡単に人が死ぬ。特に悪の組織はちょっとしてミスでも許さず、部下を死に追いやる。闇面というギルド名から、支者たちはここを悪の組織と思っているのだろうか。ミスした者は悪の親玉、すなわちギルドマスターの美月によって死を言い渡されると考えているのだろうか。でも、それは明らかに間違っている。死を命じるのは、上に立つ者として誤った選択だ。人的な損失は簡単には取り返せない。熟練した一人を失えば、代わりになるものを育てるのにどれだけの労力と時間がかかるのか。それをまったく無視した判断でしかない。どんなミスをしたとしても絶対に死を言い渡してはいけない。悪だろうと何だろうと組織を維持していくつもりならば。死以外の何らかの処罰と言う名の活用法を見出してこそ上に立つ者だ。ただそれは、仲間内の話で、相手が敵や裏切者となれば別の話だが。
「いえ、そんな軽い処分で済むとは思っていません」
はぁ？　死が軽い処分？　狂っている。価値観が狂っている。美月の中で死は一番二番を争う重い処罰だ。死以上の処罰は身体を拘束されながら、ただ生かされることぐらいしか思いつかない。その死を軽いとされるのであれば、もとより与えるつもりのない罰をどうやってごまかせばいいのかも思いつかない。
「判った。示しというならあの場にいた全員をまた集めて。今から…そうだね。今から二時間半後の午後五時にまた謁見室で。その場で罰を云い渡す。合わせて、さっきの調査報告もそこで聞くからね」
「ハイ」
美雪が消え入りそうな声で答える。とりあえずの時間稼ぎでしかないが、これが今できる精一杯だ。
「じゃあ各自…っと、その前にと。ちょっと聞きたいことあるんだけど。私はようやってここに連れてこられた？」
「わたくしとロデムーの指輪はギルド部屋へ入れますっ。それを使ってこ

ちらへっ」
「そうなんだ。指輪できたんだ」
「申し訳ないのであーる。美月様の許しもなく、指輪ジャンプで入ることのできない美雪とブリュンヒルデを連れてきてしまったのであーる。処罰を受けるのであーる」
「いえっ。連れてきたのはわたくしの判断っ。処罰はわたくしがっ」
処罰処罰とどうして支者たちはこんなにもマゾヒスト体質なのだろうか。システム設定として共通設定されているのだろうか。半ば嫌気を感じながら、美月はその申し出を拒否する。
「そういうことじゃなくて！　確認したかっただけ。ジェスターの判断に誤りはないから問題なし。この件はこれで終わり。みんな、さっさと命じた仕事にうつってって云おうとしたけど。やっぱ、ジェスターはちょっと残って。他は調査よろしく」
「ハイ」
ロデムー、ブリュンヒルデがジャンプアウトする。美雪はためらいがちに美月とジェスターを見た後、うつむきながらジャンプアウトで消える。ギルド部屋に残されたのは美月とジェスター。それにカウンターの中でグラスをみがきつづけているメイドだけ。美月はふぅと大きな息を吐く。
「ちょっと楽にさせてもらうよ」
「まだ、お加減がよろしくありませんかっ」
「うーん」
美月は唸りながら、ソファーに横になる。
「正直、あなたたちと話してて余計に疲れたよ」
「それは申し訳ありませんっ」
美月はさらに息を吐いて、ソファーに体を沈ませる。美月からはジェスターの肩越しに黙々とグラスをみがくメイドが見える。
「えぇと。…白石さん？　お茶淹れてもらえる」
美月がメイドの名前を呼ぶまでに一瞬の間があったのは、その間に視界の中の情報ウィンドウでメイドの名前を確認していたからだ。普段から身近にいる支者の名前はあらかた覚えている。が、接点の少ない支者の名前までは覚えきれない。だからといって「ちょっとそこのメイドさん」と呼ぶのは気が引ける。
「わっ、わたしが、で、でましょ、でしょ、でしょうか」
「そこの棚に紅茶あるでしょ」
「あ、あ、あの。わ、わたしは、り、りょ、料理のスキルは持っていらっしゃ、持ってなし、持って…」
「はぁ？　料理スキル？　そんなもん持ってなくたって、お茶ぐらい…」
ミドでも料理が可能だ。ミドの料理は料理スキルを持った者が、料理の材料となるマジッククリスタルを使って『料理』することによって行うことができる。調理士の職業を取って、料理を覚えなければ料理することはできない。
ミドの料理が種類が多い。肉料理、野菜料理、ミドの海や川は凍結してい

て魚は採れないのだが何故か魚料理もある。飲み物も、緑茶、中国茶、紅茶、コーヒー、牛乳、果ては各種アルコール飲料まである。闇面のギルド部屋のバーカウンターには、美月とギルドの料理長である朱大人《ズゥタイジン》が作った、ウィスキー、ジン、ウォッカ、日本酒、どぶろく、ワインが置いてあった。また、棚には緑茶葉、紅茶葉、コーヒー豆のマジッククリスタルと水のマジッククリスタルがあり、カウンター内の簡易コンロを使って、お茶やコーヒーを淹れることもできた。ただ、ミドの中ではお茶を淹れられるのは料理スキルを持った者に限られるが。

「あっそ。じゃあ、私が淹れるからいいよ」

何でもかんでもスキルと魔法によって制限されるのはゲームシステムとしてはしかたがないことかもしれないが、実世界との境があいまいに感じられる仮想現実の世界では、融通のなさが際立ってしまう。

「いえっ。わたくしがっ。わたくしの前職はバーテンダーでしたので、料理は二位まで持っておりますっ」

そう言ってジェスターがカウンターの中に入る。

「そう？　じゃあお願い」

ジェスターの前職設定についてツカサバルと話したことがあっただろうかと、美月は記憶をたどる。辛辣な口調になった経緯は話し合ったし、ギルドのSNSにも書いた覚えがある。そのときのジェスターはすでに執事だったはずだ。主人に強く言うことができず、結果としてその家が没落し、まだ十歳になったばかりの娘は高利貸しに借金のかたとして取られ、どこその娼館に売られた。息子は妹を取り返そうとして娼館に乗り込むが、女郎に篭絡され、さらにそこで性病に感染し体が腐って死んでいく。それを知った主人は失意のうちに自殺するという、ものすごく救い難い話だったはずだ。

が、今はささいな支者の設定を思い出すより、ゆっくりしたいしたいというのが美月の本音だ。ジェスターが代わりにお茶を淹れてくれるというなら、よろこんでそれを受け入れよう。

「じゃ、白石さん。白石さんはちょっと席をはずしてくれる」

「えっ、席をはずす？　ですか」

「そ、私はジェスターと話があるから」

「せ、席をはずすとは、ど、どのよう、よい、どのようにしたらよい、よいのでしょう」

「はぁ。判んない？　ここから出てってって云ってんの」

美月もよっしーも今までギルド部屋のメイドのことなど気にかけたこともなかった。くまちゃんがメイド支者を作ったときに不適切フィルターに引っかからない程度の下卑た会話をしたくらいで、それ以降はギルド部屋の調度品の一つくらいにしか思っていなかった。今日、はじめて会話らしい会話をしてみて、何故くまちゃんがこのメイド、白石支津香をこれほど低能に設定したのか、その理由が思いつかない。

「うぅ」悲し気なうめき声が聞こえる。と、「うわー」と叫びながら支津香が美月に向かって駆け寄り平伏する。

「ご、ご勘弁を。つ、追放だけはご勘弁を」

涙声で美月に言い寄る支津香にあきれ果て、嫌気さえ覚えた美月が目でジェスターに助けを求める。
「わたくしの配下の者がご無礼をっ。ここはわたくしがっ」
ジェスターは支津香の横に立ち、嗚咽を漏らしている支津香に対し静かに告げる。
「白石支津香。わたくしがいいと言うまで円卓会議室の掃除をしてくださいっ」
「は、はい。申し訳ございません。つ、追放だけはご勘弁を」
「いいからっ。早く行きなさいっ」
平伏し続ける支津香に向かってジェスターが追い立てる。支津香は「は、はい」とつぶやき、泣きながら部屋を出て行った。
「何なの、あれ」
「部下の不手際はわたくしの責っ。お詫び申し上げますっ。ですがっ、料理を持っていない者に料理をさせるのは、美月様にもまったく非がないとは申せませんっ」
そう言いながらジェスターはソファーまで戻り、美月に紅茶のカップを差し出す。美月は確かめるように一口飲み、その後、もう一回口をつける。ジェスターはそれを見届けるとまたカウンターの中に戻り片づけを始める。
「ねぇ、ジェスター。何か変わったと思わない？」
「美月様がでしょうかっ」
「ううん。この世の中が」
美月が感じているこの変化を支者たちがどう感じているのか。変化の原因を知るには自分以外の意見もほしい。
「正直に申しますとっ、微妙に空気が異なっている気がしますっ。不敬を承知で申し上げますがっ、美月様が以前より近しく感じられますっ」
「そうか。ジェスターも変化を感じてたんだ。…絶対何かが起きている。まずはそれを調べないと」
「はいっ。正しいご判断ですっ」
「細かい設定は覚えていないこともあるから、教えて。…まずは指輪ジャンプ。あなたたちが持っている指輪ってギルド迷宮内だったら誰でもどこでも行けるんじゃないの」
「指輪ジャンプはっ…」ダーク・サイド・オブ・ザ・ムーン・リング(Dark Side of the Moon Ring)。闇面の指輪。形状は皆既日食をモチーフにギルドメンバーのツカサバルがデザインし、使用回数無制限のジャンプ能力を保有する闇面専用の指輪だ。皆既日食のとき見えているのは月の闇となっている面である。そのことからギルドのシンボル的アイテムとして闇面の全ギルドメンバーと、主要ギルド支者に配布されていた。機能的には一般的なギルド指輪で、ギルドの領地、迷宮所有ギルドなら迷宮内で、城所有ギルドなら城内と治めるフィールド地域全体のどこでもと、以前に訪問したことのある都市や集落、前回ログアウトした場所、百ヶ所まで登録できる特定登録地の中の任意の場所にジャンプ可能な指輪である。美月の記憶ではギルド内なら制限なく転移できるはずだ。

だが、先ほどの話では、美雪とブリュンヒルデは制限があるという。その疑問に対するジェスターの答えはこうだ。制限がないのはギルドマスターとサブマスターだけで、一般ギルドメンバーは、王座や他メンバーの個室にはジャンプできない。また、ギルド加入二ヶ月未満のメンバーは宝物庫には入れない。などの制限がある。支者はさらに宝物庫、会議室、ギルド部屋には入れないとのことだった。

「いやいや、ちょっと待ってよ。のりのさん、さっき王座に座ってたよ」

「のりのっ様は謁見室にジャンプしてこられっ、そこから歩いて王座に座られましたっ」

ジェスターとロデムーが本来支者がジャンプできないギルド部屋にジャンプ可能なのは、くまちゃんがギルドマスターをしていたときに個別に許可を与えたからだという。また、コールとジャンプは別物で、コール先はジャンプ制限の影響を受けず、随行中はコールと同じ扱いとのことだ。

「じゃあ、私がコールすれば、誰でもここに来れるんだね。試してみるよ」

美月が左のこめかみを押さえてロデムーにメッセージを送る。

(ロデムー。バイシャジャ、ちょっと借るよ)

「コール、バイシャジャ」

作務衣を着た、どことなく女性的な面持ちの細身で初老の優し気な紳士が美月の前に現れる。

「お呼びでしょうか」

「ジャンプに変なところはなかった?」

「それはどのような意味でございましょうか」

「文字通りの意味で。前までのジャンプと今のジャンプでどんな違いがあった?」

バイシャジャは首をかしげる。その仕草はいかにも上品な仕草で、セレブ層の出であることがうかがえる。薬師如来《バイシャジャ》。ギルドメンバーの弘明寺仁王が設定した、闇面のポーション作成と治療、復活のための支者だ。

「はて、違いはなかったように思えましたが。ですが、特に気をついていた訳ではございませんので、単に気が付かなかっただけかもしれませぬ。お役に立てず、大変失礼いたしました」

「しばらくの間は、すべての行動、すべての事象に対して昨日までと違いがないか、気をつけてみて」

「御意にございます」

「で、本題だけど。バイシャジャは診察できる?」

バイシャジャが再び首をかしげる。美月はそれを見て、自分の失敗にすぐ気づいた。バイシャジャは医者だ。診察できない医者はいないだろう。

「医者レベルは十でございます。どこかお具合がよろしくないところでもございますか」

「診察って云っても、健康診断をやってもらいたいんだけど。時間ってどれくらいかかる?」

「内容にもよります。簡単なものでございましたら十分程度。体の中の透視

を行う詳細診断でございましたら半日ほど。血の分析を行うのでございましたら、結果が出るまでに二日ほどいただきたく存じます」
レントゲン検査もできるのか。ミドにはそんな魔法もあったのだろうか。
「透視診断って、そんな魔法あった？」
「美月様のお持ちになっておられる十位の人物鑑定スキルの医者版でございます。美月様の人物鑑定はステータス情報を調べるものでございますが、透視検査は骨格や臓器の位置を調べます。骨や内臓の形を整形することにより、容姿を変えることができます。それをご所望でございますか」
確かに、高位の医者は顔や体型を変えることができた。それが、そんな仕組みになっていたのは、整形を受けたことがない美月は知らなかったし、興味もなかった。
「あ、そういう訳じゃなくて、そんなこともできちゃうんだ。すごいな。って思っただけ」
「お褒めいただきありがとうございます」
「とりあえず、簡単な検査をして」
「かしこまりました。ですが、診察は美月様のお体に触らさせていただくことになります。よろしいでしょうか」
「もちろん」美月はそう言ってシャツのボタンをはずしはじめる。「ジェスター、使用人たちへの聞き取りは誰かに任せて、もうしばらくつきあって」
「その旨の指示はっ、すでにぴぃなに出してありますっ」
「ぴぃな、かぁ」
「ぴぃなではいけませんでしたかっ」
「や、そうじゃないけど。ジェスターの好きなようにやって」
「はいっ」
支者をつくるときは大抵よっしー名義で作っていた。アカウントに紐づく課金がよっしーのほうで習慣化していたためだ。美月は年単位での月課金ぐらいしか、課金手続きをしていなかったが、月課金以外に課金していない訳でもなかった。ぴぃなはそんな美月名義で作った数少ない支者の一人だ。いつもは謁見室の扉の横にじゅん子とともに立っているメイドで、戦闘力はほとんどない変態だ。性的な発言や行動が制限されているミドでは、変態面は目立たないが、裏に隠れたその設定から、美月はぴぃなを信用できない。同じ変態のじゅん子に比べれば、ぴぃなのほうが人当たりはいいのだが、そんな変態を自分の代理として使うジェスターの気が知れない。
美月はシャツの前を開けようとして、そのときあらためて自分が女の体であることを認識する。が、ここでためらってはかえって不自然だ。何事もなかったようにシャツを脱ぎ捨てる。ミドには裸がなかった。モンスター種以外は、男も女もボックスパンツをはき、女はさらに晒《さらし》にも見えるスポーツブラつけている。ボックスパンツもスポーツブラも脱ぐことはできない。
「ブラも取ったほうがいい？」
バイシャジャに向けたその問いに、ジェスターがピクッとするのが視界の隅に映る。

「いえ、それにはおよびません」

バイシャジャはそう答えて空間から聴診器を取り出し、美月のあばら骨の下にあてる。ミドではとることのできなかったブラジャーを取ることができるのか、その確認はあと送りになってしまった。

聴診器の金属の冷たさと、身体のあちこちを叩いていくバイシャジャの手の感触。それは明らかにミドと違っている。ミドよりもっと繊細だ。むにゅっと腹にめりこむ指など実世界と差異はみとめられない。腹を押さえれたときに、ぐぅと鳴ったのは空腹が関係するのだろうか。

美月が最後にものを食べたのは、ミドでの一人昼食会のあと、美月からよっしーにログインしなおした短い間だ。そこで、買い置きしていた冷凍おにぎりを二つ、解凍して食べたのが最後だった。今のところ支者たちは生きているかがごとく動いている。生きているとしたら、彼らも腹が減るのだろうか。

「ジェスター。今、ギルドに所属しているのって、何名？」

「ダークサイド・オブ・マイ・マインドに属しているやんごとなき御方々の柱数ですかっ。それならば…」

「違う違う。今現在、ギルドに所属していて、活動している数。ＭＯＢを含めて闇面が養うべき個体の数。それって把握している？」

「美月様の情報スキルで判るのでは？」

美月が視界の中にギルドの支者数、ＭＯＢ数を表示させることは可能だ。現に今も名前のリストとともにその数は表示されている。支者が四十九、ＭＯＢが百十二、衛兵が六。聞きたいのはそんな数ではなく、一日にどれだけの食料が必要かということだ。

「私は判るよ。でも、ジェスターが判るか知りたかったの。それに、私とジェスターで差があるかもしれないし」

「そうですかっ。それは失礼しましたっ。一応把握していますっ…」

ジェスターの報告するギルド要員は、戦闘系支者、二十四。工人、十三。他、十二。合わせて四十九。ＭＯＢ数は十二。支者の数は美月とジェスターの間に差異はないのだが、ＭＯＢの差は百。美月は視界の左端をもう一度見直す。確かに美月の情報ウィンドウには十二の前に一がある。そもそも、ＭＯＢが十二ということはない。ジャイアントアントクイーンの部屋だけでも十二を越えているはずだ。

「ＭＯＢの数ってそんな少ない訳ないでしょ。私の数は百十二なんだけど。それに衛兵の数が入ってないよ」

「美月様は『今現在』の数といわれましたっ。ＭＯＢは今現在、迷宮内にギルド外の冒険者がいないため、最小数になっていますっ」

ＭＯＢは斃されると時間をおいてまた湧く。では、斃されないとどうなるか。プレイヤーの間や公式ウィキで話題になっていた。あるプレイヤーはＭＯＢは常に冒険者を待ち続けていると主張し、別のプレイヤーはＭＯＢは近くにＰＣがいるときのみ湧き、誰もいないときはシステムリソース節約のため、存在していないと語っていた。美月はどちらかというと後者を支持していたが、今のジェスターの発言からも、それが正しいことが裏付けられ

た。
「なるほど。十二がうちのＭＯＢの最小数ってことね。じゃあ、衛兵は？」
「謁見室の衛兵はすべて眷属ですのでっ」
「だから？」
答えになっていない答えに、美月は体をねじって、カウンターのジェスターを見る。美月が体を見せると、すかさずジェスターが目をそらす。
「眷属はギルドではなく呼び出した者の所属となりますっ。女騎士《レディーナイト》はブリュンヒルデっ、小鬼《ゴブリン》はイェマラジャっ。狼人は美月様の所属物で管理責任はそれぞれの主人となりますっ」
闇面は謁見室で壁を背にただ立っているだけの衛兵に支者を使っていない。そもそも王座まで敵に侵入されるようでは、そのギルドはもうおしまいだ。闇面はその状況に陥ったことは一度もない。それならば、そんな飾りに課金アイテムを使うのはもったいない。でも、飾りすらないのはみっともない。そういう理由で衛兵には眷属を使っていた。眷属は眷属召喚の魔法を持っている者が魔法を使って呼び出す亜人もしくはモンスターのことだ。術者が召喚できる数と種族は召喚者によって決まっている。数と眷属のレベルは召喚者の召喚魔法レベルに比例し、数は魔法レベルと同じ、レベルは魔法レベルの三倍である。すなわち召喚魔法レベル五の美月ならレベル十五までの狼人を日に五体まで。魔法レベル十のブリュンヒルデとイェマラジャはレベル三十までを十体召喚できた。ブリュンヒルデの眷属は女騎士でイェマラジャは小鬼だ。
召喚魔法を取得できない種属や人間種も、眷属召喚の魔法を込めた護符を使って眷属に相当するモンスターを召喚することができた。召喚護符には呼び出される種属とレベルが記載されている。護符一枚につき呼び出せるモンスターは一体だけで、呼び出し中は重ねて召喚護符を使うことはできない。
眷属は支者とほぼ同じように扱えるが、違いはいくつかある。最も大きな違いは、眷属の寿命は一日だけという点だ。支者は一度作成すれば永久に存在する。眷属は呼び出された時点から丸一日経過すれば、消えていなくなった。
「聞きたいことが二点。で、まず一点め。女騎士はのりのさんじゃなくて、ブリュンヒルデ？」
「以前はのりのっ様が眷属を出されていましたがっ、時間切れで消えてからは代わりにブリュンヒルデがっ」
「じゃ、二点め。ギルド所属の支者やＭＯＢは絶対服従規定に縛られるけど、個人所属の眷属は縛りがないからギルドに反抗したりしない？」
「眷属は主人に逆らえませんっ。ブリュンヒルデもイェマラジャもギルドには反抗いたしませんっ」
バイシャジャが「終わりました」と言って聴診器をどこかにしまう。美月は脱ぎ捨てたシャツをたぐり寄せ、袖を通す。
「じゃあさぁ、狼人の食事は主人である私が自分で用意しなくちゃいけなかったの？　いままで食事なんか与えたことなかったんだけど」

「不眠不食を解除しているのですかっ。何故、わざわざ解除をっ」
「何、解除って」
「それは…」
シャツのボタンを留め終わった美月が、話そうとするジェスターを手で制する。
「で、バイシャジャ。診察結果は？」
「いたって健康でいらっしゃいます。冒険者としても平均はクリアーなさっております」
「平均ねぇ」
ミドは基本無料のゲームだ。無料ということで最初の敷居は低く、ちょっとだけ試してすぐにやめてしまう人が大勢いる。その人たちが作ったアカウントはそのまま放置される。『登録アカウント数、何百万突破』ミドの公式サイトのトップにこの表示が載るたび、美月はいつも思っていた。「で、アクティブなアカウントはいくつなんだよ」
美月の持っている情報スキルでは現在ログイン中の人数は判るが、昨日一日にログインしたアカウント数は判らない。判らないが想像はつく。アクティブアカウントは一パーセント未満。ゲーム終了の正式告知がされた後は一パーミルにも満たないということを。ということは、かなりの数が低レベルで捨てられたアカウントだ。そんな中での『平均』を上回っているといわれても嬉しくはない。
冒険者としてのステータスが低いのは美月自身も自覚している。よっしーは冒険者としてのステータスはかなり高かった。総合レベルも最高の百で、就いている職業も接近戦闘系の職業ばかり、当然戦闘系ステータスは高くなる。全冒険者の中でも上位一割には入っていたと自負している。それに引きかえ美月は、総合レベルは八十を越えているが、就いている職業のほとんどは生産系の職業で戦闘系のステータスは上がっていない。純粋な戦闘系キャラクターと比較するとレベル五十のキャラクターには太刀打ちできないだろう。
「ありがとう。一回精密検査も受けたいんだけど、半日かかるんだよね。いつがいい？」
「それは美月様の都合のよいときで構いません」
医者と患者の関係は対等であるべきだ。医者は医療というサービスを提供し、患者はそれに対して対価を支払う。渡される対価が正当な額であるならば、そこに上下は存在しない。それは、小売店やレストランなどの他のサービスでも同じだ。提供されるサービスと正当な対価のやり取りがあれば、そこに上下関係は生まれるべきではない。ところが、小売店などでは客が尊大にふるまい、病院では患者が卑下する。あまつさえ、医者側が患者に対し、へりくだることを求めたりする。恐ろしいのは、それが世の中で恒常化し、皆がそれを普通だと思ってしまっていることだ。狂った思想が常識として定着してしまっていることだ。バイシャジャにいつがいいか聞いたのも、無意識に優先権は自分ではなく医者側にあるという頭があったからだろう。
「判った。じゃあ、近いうちにこっちの都合で呼びつける。今日はありがと

う、ロデムーのとこに戻って」
「御意にございます」
バイシャジャはお辞儀をするとジャンプアウトで消えた。
「先ほどの続き、よろしいですかっ」
バイシャジャの退室を待ってジェスターが声をかけてくる。美月は「もうちょっと待って」と言いながら、左のこめかみを押さえる。
「ねえ、半日ってどれくらい？」
ジェスターは怪訝な顔で美月を見返す。
「はいっ？　半日は一日の半分で十二時間っ…という答えでよろしいですかっ」
「一日は自転周期。一時間はそれを十二等分したもの。…そう云っちゃうとそうなんだけど…。私が云いたいのは…ええと…、光は一秒間に何キロ進む？」
「２９９７９２キロ４５８メートルっ。約三十万キロですっ」
「一秒は自転周期を二十四かける六十かける六十で割ったもの。その一秒で光は三十万キロ進む。果たしてそう？　ここでも三十万キロ？」
「どういうことですかっ」
「ジェスターはここをどこだと思ってる？」
「ギルド部屋っ。ダークサイド・オブ・マイ・マインドの迷宮ですっ」
「そうじゃなくて、ここの場所じゃなくて、この世界」
「世界ですかっ。ミドガルズオルムですっ」
そうか、ジェスターにとっての世界は地球ではなくミドガルズオルムなのか。
「本当にそう？　私は違うと思ってるんだけど」
「ミドガルズオルムでないとはどういうことですかっ」
今のこの状況から、ここがミドでないことは明らかだ。ではどこか。美月の夢の中なり、他人の夢の中なりの精神世界である可能性が一番高い。次に考えられるのは電子の中のゲーム世界か。妄想族の美月でも想像できる可能性はそれくらいだ。電子の世界ではおそらく、電子のスピード、すなわち光の速さで物事が動くだろう。電子の世界なら、美月が今、一秒と思っている時間は、実際には数万分の一秒のはずだ。電子の世界ではなく、精神世界の場合は…。実世界の時間は動作を基準に考えている。自分の動きや周りの動き、そのスピードが基準となる。思考は肉体のスピードを凌駕する。実世界の一秒は精神世界の十秒ほどか。いずれにしろ、光は一秒で三十万キロは進まない。
「じゃ、さっきの不眠不食のこと教えて」
「わたくしの問いへの回答はいただけないのですかっ」
「それは、あとでみんなの前でするよ。今は確証がないし、みんなの調査結果も聞いたうえで判断したいし。で、教えて。不眠不食のこと」
「判りましたっ…」
ジェスターが美月にした説明によると、支者も眷属も初期設定として、不眠で眠くなることはなく、二十四時間活動可能。さらに食事をしなくても活

動に影響はないらしい。もちろん、不眠であっても寝ることは可能だし、料理を食べてその付加効果を得ることもできるとのことだった。意識して不眠不食のオプションをはずさない限り、睡眠も食事も不要となる。美月はこの設定の存在すら意識していないので、オプションが無効になっていることはない。だが、美月やよっしーが作成に関与していない支者の設定までは判らない。ジェスターの説明後に、不眠不食オプションが無効になっている支者とＭＯＢを検索したところ、そのような支者、ＭＯＢは存在しなかった。

支者が四十九、ＭＯＢが十二以上、衛兵が六。それだけの数の胃袋を満たすにはどれだけの食料が必要になるのか、不安になったのだが、その心配は不要なのかもしれない。まあ、そもそも、ここは美月の精神世界だ。精神世界の住民が物を食べるとは考えにくい。

「ジェスターはさぁ、私のことどう思ってる？」

ジェスターがカウンターの中でハッと身構える。そして、一瞬の間ののち、美月のもとに走り寄り跪く。

「我が君。わたくしの口が悪いのはツカサバル様がそう定められたからっ。そのようなことも判らないのですかっ」

「何、何、何。びっくりしたなぁ。どうしたの、急に。そんなこと知ってるよ。長い付き合いなんだから。まあ、ギルマスになった当初は、そのきつい云い方がつらくて、陰でだいぶ泣いたけどね」

「それは失礼しましたっ。ですが、それもこれも、美月様によりよき主君となっていただきたいためっ」

「だから、それは判ってるって。あなたたち支者と私の関係ってこのままでいいのかなって思っただけ。それで、そもそもあなたたちにとって私って何だろうってね」

ジェスターはじっと美月の足元を見ている。

「そんなにかしこまらないでよ。さっきみたいに気楽にして、そこにでも座ってよ」

美月は向かいのソファーを示す。ジェスターはうなづきながら一人掛けのソファーに座る。

「美月様はわたくしたちを作ったやんごとなきお方っ。ダークサイド・オブ・マイ・マインドにとっての絶対君主ですっ」

「やんごとなきって云うけど、よそのギルドの人や百円さんみたいなギルメンは？」

「百円様はやんごとなき御方々の中の一柱ですっ。がっ、美月様はやんごとなき御方々の中でも一番上に立つお方っ」

「何を出さそうとしてるの。そんなに持ち上げても何も出ないよ」

「それは残念ですっ」真面目な顔でジェスターが答える。でもそれは、ジェスターなりの冗談なのだろう。「で、他のギルドの冒険者ですがっ、彼らはそれぞれのギルドの支者にとってはやんごとなき方かもしれませんがっ、わたくしにとってはただの人っ、もしくはモンスターでしかりませんっ」

「私にはあなたたちがどうして私のことをそこまで崇拝するのか判らない

んだよね。力だってジェスターと変わらないぐらいしかないでしょ」
「わたくしたち支者はやんごとなき御方々によって創造された者っ。自らの創造主をあがめない者がおりますでしょうかっ」
ギルドメンバーは支者にとっての創造主。確かにそうだし、絶対服従規定にもそう書いてある。他のギルドのＰＣは他の支者の創造主。他の宗教の神は崇めないということか。
「ジェスターのその考えってさ、絶対服従規定にそう書いてあるからじゃないの」
「それも要因の一つであることは否定しませんっ。ですがっ、規定があろうとなかろうと創造主は変わりなくっ。…美月様には創造主がおられないのですかっ。その方を崇めないのですかっ」
創造主…。美月は考える。しいていえば両親が創造主になるのだろうか。であれば、美月に両親を敬う気持ちはあまりない。虐げられたとかの経験はないのだが、逆に愛されたという思いもない。端的にいえば、関係が薄いのだ。家族として同じ家に住むことに居心地の悪さを感じ、大学進学とともに親元を出たきり、就職も地元には帰らなかった。実家に戻るのは夏休みと正月ぐらい。それも徐々に回数が減り、今では何年に一度かになっていた。親もそういうものだと思っているのだろう。何もいわない。親と同居している二つ年上の兄が、帰省のたびに「次男坊は気楽でいいな」と嫌味をいうくらいだ。
親元で家賃も食費もなく、高級車を乗りまわす身と、狭いワンルームマンションで一人暮らし、満員電車に長時間揺られる身と、どちらが気楽なんだと思わなくもないが、それをいって下手にヘソを曲げられてはさらに窮屈になってしまう。そんなことにならないよう、嫌味をいわれても、気楽そうにヘラヘラするにとどめている。
親という実際の創造主を崇める気はない。では、信仰としてはどうか。美月の実家は特に信心深い方ではなかった。兄で十何代目になるという先祖代々の墓はある。実家の居間には仏壇があり、帰省すれば線香もあげるし、彼岸に実家にいることがあれば、墓参りもしていた。が、それは宗教として接している訳ではなく、習慣として行っていただけだ。
詭弁的な宗教家なら「無意識のうちに行動してしまうほど仏教が生活にとけこんでいる」というかもしれないが、それは違う。信心を持って動いてこそ宗教で、そこに心がなければ、それはただの日常行動だ。正月には初詣に行く。クリスマスにはパーティをする。どちらも信仰の儀式として行っている訳ではない。季節のイベントとして行っているに過ぎない。その程度の思い入れしかない神や仏相手に絶対服従する気には、美月はなれない。
「ジェスターの云うところの創造主は、私にはないのかもね。それに私は崇められるほどの名君じゃなくて、暴君かもよ」
「暴君であることは存じておりますっ」ジェスターが珍しく笑う。「ですがっ、美月様が和を好まれるかっ、戦を好まれるかっ、それは問題ではありませんっ。支者にとってよりよき主君とはっ、先頭に立ち我々支者を導いてくれるお方ですっ。支者にとって大事なのはやんごとなきお方の希望を実現

するためにお仕えすることっ。お支えすることっ。わたくしたち支者はっ、ただそれだけを喜びとしていますっ」

人のサポートに徹する人は確かにいる。美月、というかよっしーは逆のタイプだ。手まわしや下準備は苦手で、はじめから突進していく。何かするときも、誰かが舞台を用意してくれていて、自分はそこで踊るだけだったらそんなにいいだろうと、いつも思っている。

突進はミドでの戦闘スタイルにも表れている。よっしーの主武器はダガーだ。短剣よりも短いダガーを構え、敵の懐に飛び込む。最前線の前衛職だ。よっしーにはこの戦い方しかできない。美月も戦うときはナックルを使った接近戦というか肉弾戦で戦っている。そんな美月にとってジェスターの発言は願ったり叶ったりだ。

「ありがとう。こんな弱っちい私だけど、これからもよろしくね」

美月は握手のための右手をジェスターに向かって伸ばす。

「この身果てましてもお仕え申し上げますっ。美月様をお守り申し上げますっ」

ジェスターは両手で美月の手を取り、甲に口づける。

「よし、言質取ったからね」

実世界で忠誠のキスなど受けたことのない美月は、返された右手をどう扱っていいか判らない。何気ないふりを装いながら手を引っ込めるが、ジェスターはそれを見て苦笑いしている。

「でも、そんな高貴な主君相手にも劣情は抱くんだ」

「何のことでしょうっ」

「私の裸を見て。何思ったのよ」

「そっ、それはっ。いえっ、そもそもやんごとなきお方ともあろうお方が下々の前で肌を見せるなどっ、何をお考えですかっ。下等な支者であれば自らを押さえきれず美月様に襲いかかることもあるかもしれませんっ」

「そこまでされるほど、私は美人じゃないよ。それに、万が一そんなのがいたとしても、そのときはジェスターがその身にかえて私を守ってくれるんでしょ」

「当然ですっ。ちゃんとお守りしますっ。それにっ。…美月様はお美しいですっ」

世間一般からすると美月は美人に入るだろう。だが、ミドの中では、美月の容姿は十人並みかそれ以下になる。それほどミドには美人やイケメンが多い。キャラクターの容姿は作成時に定義する。健康診断の時にスキャンされた自分のCT三次元データを基にする者もいる。よっしーも自身の三次元データをよっしーのキャラクター作成時に利用した。亜人種のキャラクターは種属の特徴を出すため、人間のデータをそのまま使うことができず、よっしーはよっしーの種属であるレプラコーン変換が入っている。そのため、実世界のよっしーそのままの姿ではないが、実物を知っている人がよっしーのキャラクターを見れば一目でそれがよっしーであることが判る。ギルドのオフ会で、初対面の人に、会った瞬間「よっしーさんですよね」といわれ、なおかつ「そっくり」と大爆笑されたこともある。

個人の三次元データを使わない方法としては、自分で一から三次元データをデザインする方法もある。それが、敷居が高いと思う人には、ミドの運営側が用意している、目や口、鼻、耳、顔輪郭、髪型などの外見パーツの組み合わせでキャラクターを作ってもいい。大抵のプレイヤーは運営が用意した美形のパーツを組み合わせて作る。

自分の三次元データを使う場合も、大抵は美形化変換をかける。その結果、ミドは美形のはびこる世界となる。そんな世界にいると、実世界では美人に分類される美月も大したことがないように見えてしまうのだ。

美月のデザインセンスもあるのだろうが、ギルドの女性キャラクターの中で美月の美人ランキングは高くない。魔法少女たちは美女というよりカワイイといったほうがあっているが、美人という観点でも美月よりは上だ。美月自身も自分のセンスのなさは感じている。美形パーツを組み合わせているはずなのに、実三次元データをそのまま使った、変態のぴぃなやじゅん子より、多少ではあるが、劣って見えてしまうのがいい例だ。

そんな美人だらけの世界。性的なスペシャリストであるサキュバスまでもが存在する世界で、その程度の容姿のやたらと背の高い女をどうにかしようと思う者がそうそういるとも思えない。

「ちゃんとお守りしたあかつきにはっ、先ほどは持ち上げてもでなかったものを褒美としていただきますっ」

美月の長めの沈黙に気を利かせたつもりなのか、ジェスターが『らしくない』冗談をいう。

「このドスケベっ」

そういって、美月が笑う。システムデータがシステムデータとして存在するのと、生きている実体として存在するのと、どちらがいいのかを考えながら、ジェスターの実体度を探る。美月の探りに対して、ジェスターは何かを言い返そうとするが、急に真っ赤になって黙り込んでしまう。システムデータに恥ずかしいという気持ちはあるのだろうか。卑猥な想像はあるのだろうか。会話の中のちょっとした脈絡の飛躍から伝えたいことを想像することはできるのだろうか。想像するというのはその過去の知識の集大成だ。直前のジェスターのセリフと美月のセリフを関連付けて考えられる経験か知識が必要だ。

ジェスターの反応は、完全に美月の望んだ反応だった。この世界が美月の精神世界であることの証明だ。それ一つで完全証明はされないが、その可能性は『完全』に近いものといえる。そして、この世界が美月の精神世界ならば、ジェスターの実体度は美月の望むものにできる。

仮想現実は脳に信号を与え、実世界と同じ感覚を感じさせる。この技術がスタートしたとき、世の中には、期待と不安がごちゃ混ぜになっていたという。脳へ直接信号を伝達させることへの不安。実行動なしに物事を体験できることへの可能性と期待。それらが混沌と存在した。そして、その不安定さから利用には法的な規制も多かったらしい。そこらへんの話は美月が物心つく前か、もしかしたら生まれる前のことでよく知らない。当初は医療と軍

事に利用され、発展発達した仮想現実がゲームに展開されたのは、ここ十数年ぐらいでしかない。

その間、まったく事故がなかった訳ではない。仮想現実の中でショック状態となり心停止したケースもある。現実と仮想の区別がつかなくなり、精神が崩壊したケースもある。だが、それは、たまたま仮想現実の中で起きただけ。美月にはそう思えてしまう。映画のショッキングなシーンで心停止をする。のめり込んでいる漫画と現実の区別がつかなくなる。そういう人たちと同じだ。宇宙人に拉致され、人体改造されたと主張するきっかけが、たまたま仮想現実だったにすぎない。仮想現実がなかったとしても、別の要因で同じ結果になっただろう。

仮想現実が映画や漫画と異なっている点の一つは、その技術がすでに医療や軍事に使われていて、それらの分野では引き返せない地点まで来ていることがあげられる。手術の時に使用する麻酔は十万人に一人の割合で不適合者が存在し、麻酔によって死に至ることがある。だからといって、手術時に麻酔を使うのを禁止することはできない。インフルエンザの治療薬はごくまれに精神に異常をきたす副作用がある。かといって、国は全面的にインフルエンザの治療薬を禁止にしたりしない。役に立つ技術、そして医療関連団体もしくは軍事関連団体という政治に圧力のかけることのできる団体が利権を持つ技術を、危険であるがごとく国が扱うことは政治的にあり得ない。

娯楽分野での使用は法規制が敷かれることとなるが、仮想現実が危険であるという指摘は隠蔽された。事故が起こったとしても、それは交通事故と同じで、単に運が悪かっただけとして扱われることとなっていた。

メディア規制による情報統制は結果として都市伝説を生む。ＶＲＭＭＯ中に死んだ花子さんが、ゲームの中に現れ、呪いをかける。呪われた人は三日以内に呪いを解くクエストをクリアーしないと死亡する。ゲーム中に落雷にあったプレイヤーがゲーム内に取り込まれログアウトできなくなった。学校でいじめられていた男子が、ゲームにログインしてきた同級生をＰＫしたら、実世界でも同級生が死んだ。ゲームは国によるスーパー兵士発掘プロジェクトで、秘密のクエストをクリアーするとエリートスパイとしてスカウトされる。彼氏にふられた花子さんがゲーム内に現実逃避し、その中で彼と一緒に幸せに暮らしている。

さしずめ、美月のパターンは彼氏にふられた花子さんなのだろう。特に実世界に不満を持っていた訳ではないが、実世界よりミドのほうが楽しかったのも事実だ。ミド終了によるショックから精神に異常をきたし、楽しいミドの世界に閉じこもってしまったか。精神異常者が、これほど冷静に自己分析できるのは不思議な気がしないでもないが、狂ってしまった頭の中などは、そんなものなのかもしれない。なんにつけ、ここは美月の精神世界で、だとすれば、この世界はすべて美月の思うとおりだ。自分のやりたいように行動すればいい。

「うん。ありがとう、ジェスター。何だかんだ云って、こんな話やギルドの

話ができるのはジェスターしかいないんだから。これからも相談にのってもらうからね」
「もちろんですっ。それがわたくしの役目ですからっ」
「よし、じゃあ、使用人への聞き取り、よろしく。何かあったら呼びつけるからすぐに来て」
「美月様はこれからどうされますかっ」
「ここか自分の部屋で考え事する。一人で考えたいことあるから」
「それはいけませんっ。誰かをそばに置いてくださいっ。まだ敵がいないと決まったわけではありませんっ」
　誰かをそばに置くのは駄目だ。誰かがそばにいたら、よっしーでなく美月の姿でこの世界に閉じこもった意味や意義の確認ができない。人前で、そんな恥ずかしい確認行為はできない。ただ、ジェスターのいうことも一理ある。敵などいないが、この状況では「いるかもしれない」として行動するのが上に立つ者としては正しい判断だろう。一旦はジェスターの顔を立て、そのあと適当に処理すればいい。
「うーん。じゃあ、さっきの白石さんにここに来るように伝えて」
「白石支津香ですかっ。白石支津香に戦闘力はありませんっ」
「敵はいないんだし、万一いるとしたら、これだけのメンバーがこれだけの時間をかけても見つけられない相手だよ。そんな相手に誰なら勝てる？」
「白石支津香なら勝てるというのですかっ」
「白石さん以外に誰が勝てるって云うのよ」
　美月は威圧の声を出し、ジェスターを睨む。美月に睨まれたジェスターはゆっくりと目をそらす。
「わ、判りませんっ。何故、白石支津香なら勝てるのですかっ」
「どうして白石さんなら勝てるのか、たまには自分で考えてみれば」
　美月は耳の後ろを掻きながら答える。
「判りましたっ、考えますっ。ですがっ、ヒントをいただきたくっ。白石支津香をコールで呼びつけずっ、来るようにわたくしが伝えることとっ、白石支津香のみが勝てることは関係ありますかっ」
「ないよ」
「そうですかっ」
「ヒントにはならないと思うけど、白石さんをコールしない理由は教えてあげる。それはね…。コールしたら、白石さんが『何だろう』と思う間もなくここに来ちゃうでしょ、だけど、ジェスターが呼びに行けば『何だろう』って不安になりながら、ここまで来るんだよ。不安な時間が長ければ長いほどイジメ感が増すじゃない。そっちのが楽しいでしょ」
「嫌がらせのためにコールしないとっ」
「そうだよ。暴君になってイジメたおすために白石さん呼ぶんだから」
「そうですかっ。ですがっ、ほどほどにお願いしますっ」
「考えとくよ。いいから呼んできて。で、その足で聞き取りよろしく」
「かしこまりましたっ」
　あきれ顔のジェスターに向かって美月が早く行くように促す。

「じゃ、二時間…十五分後。十七時に謁見の間で」

実体化

謁見室。ジェスターの報告を王座に座った美月が聞いている。王座にジャンプインしてきた当初は不機嫌だった美月も、左のこめかみを左手の人差し指で叩きながら、話を頭の中にメモしていくうちに、不機嫌さも薄れていった。

謁見室に来る前、メイドをギルド部屋に呼びつけ、パワーハラスメントとセクシャルハラスメントをしまくったところまでは機嫌がよかった。そのあと、メイドをうまく工房に追いやり、一人になったのだが、現状把握と可能性の検討と妄想で深みにはまり、その上、美雪の処遇を考えていたら、美月の体の確認をする時間がなくなってしまった。それは誰のせいでもなく、美月自身がいけないのだが、誰かにやつあたりしたい気分は収まらない。だからといって、そんなことでやつあたりするのは組織のトップとしては最低だ。メイドに対するセクシャルハラスメントは許されて、やつあたりが許されないのは統一性がとれていないと指摘されてしまうかもしれない。そんなことは重々承知だ。だが『やられキャラ』に情けをかける気には何故だかなれなかった。

「…以上ですっ。ご質問があればっ」

「うーん。とりあえず後でまとめてするよ。次、ロデムー、報告して」

一歩前に出ていたジェスターが後ろに下がり、かわってロデムーが前に出る。

「報告するのであーる。ジェスターと重複するのは省略するのであーる」

「駄目。重複も報告して」

重複事項を報告する、しないは人と場合によって判断が変わる。実世界でのよっしーは報告を受ける立場より、報告をする立場の方が断然に多い。調査報告の際、他の人がすでに話した内容と同じ事項については、同じ結果があったとだけ報告し、その詳細は述べないことがほとんだ。みんなと同じことを強調するより、他人が気づかなかったことの報告を目立たたせることがアピールになると考えているからだ。

だが、今回美月は重複報告を要望した。この世界の構造がどういうものなのかはまだ不明な点が多い。同じ結論に達したとしても、それは違う原因からかもしれない。複数の原因が一つの結論に達すれば、その推論はおそらく正しい。原因が一種類しかなければ推論の信用度は落ちるが、複数人からの同一原因の報告は原因の普遍性が増す。たった一人が見つけた重要でない事象より、今は不変事象の確認のほうが有意義だ。もちろん、たった一人が見つけた重要な事象が有用であるのは間違いないが。

「重複も報告すべしとのこと、畏まったのであーる。では、まず…」ロデムーが報告していく。

魔法の名前が変わっている。スキルの名前も変わっている。名前が変わっていても魔法が使える。前の名前でも今の名前でも同じ魔法が発動する。魔

法発動時のＭＰ消費量は前の名前と今の名前で微妙に違っている。前よりも増えているのもあれば、減っているのもあるようだが、ＭＰの値が常にぶれているため確かではない。魔法の効果は前より増えているようだ。魔法詠唱から発動までのタイムラグが長くなっている。体感で一割程度長くなっている。魔法は増えている。そして減っている。スキルは取らなくても持てる。

美月が怪訝な顔でこめかみをダブルクリックする。

アイテム作成には素材が必要。でも、マジッククリスタルからでも作れる。

こめかみダブルクリック。

料理中につまみ食いしたらＭＰがちょっと増えた気がする。

こめかみダブルクリック。

ゲームの中で物を食べても腹はふくれない。にもかかわらず、ミドには料理がある。それは、ミドの料理にはステータス変動効果があるからだ。料理を食べると一部のステータス一時的に上下する。どのステータスが上下するかはその料理ごとに異なる。お茶系は知力が上がり、俊敏性が少し下がる。アルコール飲料は力が上がるが、知力は下がる。肉料理は力とＨＰが上がるのもが多く、野菜料理は器用さが上がるといった具合だ。

ＨＰはヒットポイントの意味で、これがゼロになるとキャラクターは死亡する。ＭＰはマジックポイントの意味で、これがゼロになると魔法が使えなくなるが死にはしない。ＨＰもＭＰも時間経過とともに回復していく。全量回復には六時間かかる。ＨＰとＭＰがすっからかんになったとしても、六時間たてば満杯状態に戻る。ＨＰポーションを飲めばこの時間経過を待たずにＨＰを回復することができる。ＭＰポーションはミドには存在しない。ＭＰ回復は時間経過を待つしかなかった。

「これでおしまいであーる」

「次、美雪」

ロデムーが伸び縮みしながら後ろにさががる。美月は元気ない様子で半歩前に出る。

「魔法やスキルは特に何も気づかなかった…です…。気づかなかったよ。…迷宮の中は…」

「ちょっと待って」

美月は人差し指でこめかみを押さえている。

「うーん。まず魔法とスキルについてまとめたい。ブリュンヒルデ、魔法について何かあった？」

「使用した魔法は索敵とジークルーネの飛翔《フライ》ですが、特に変わったところはありませんでした」

「そう。他に魔法について何か云いたい人は？」

美月が周りを見まわすと、目のあった真嶋まなかが首を横にふる。その視界に美月は魔法リストを表示する。魔法の名前がずらっと表示される。リス

トの中には名前が白で書かれたものと灰色で書かれたものが存在した。白はすでに修得済みの魔法で、灰色は修得条件をクリアーしている未修得の魔法だ。

「魔法、名前変わってないけど」

「はじめは変わっていないのであーる。よく見ると二つの名前があーる」

そこは『あるのであーる』じゃないんだと関係ないことを思いながら、美月は魔法リストのファイアを見た。

美月は火魔法を三位まで持っている。攻撃魔法で持っているのは火魔法が三位までと雷魔法が四位までをそれぞれ一種類ずつの七種類だけだ。これはプレイヤーとしてはかなり少ない。総合魔法使いなら百を超える数の攻撃魔法を持っているだろう。火魔法だけでも四十以上の魔法がある。普通の冒険者なら剣士であっても全属性を数種類ずつ、五十ほどの攻撃魔法を持っている。美月の魔法が少ないのは生産系のキャラクターを目指していたためだ。生産系の魔法を優先するため、戦闘系の魔法はあえてとっていなかった。火魔法を三位までとったのも、鍛冶に必要な金属鉱を排出する迷宮にはジャイアントアントが出没することが多く、ジャイアントアント対策として三位の火魔法である火炎壁《ファイアーウォール》を使いたかったからにすぎない。

一位の火魔法のファイアは冒険者レベル一があれば誰でも修得できる。ファイアに限らず他の属性の攻撃魔法も一位ならば誰でも持てた。二位の攻撃魔法の修得条件は冒険者レベル二、もしくはそれに相当する他の職業レベルと、一位の魔法で規定回数以上、敵を攻撃することである。通常、こうして一歩一歩魔法の位を上げていくが、下位の魔法を取らずに一足飛びに上位の魔法を手に入れる方法もある。それは魔導書で覚えてしまうという方法だ。迷宮攻略褒賞や魔導書クエスト攻略、課金アイテムとして購入、で得た魔導書を『使用』すると、下位の同一系統魔法の有無に関わらず魔法を覚えることができた。

魔導書は攻撃魔法だけでなく、いろんな分野の魔導書が存在する。美月は全属性魔法防御スキルを課金アイテムの魔導書で覚えた。三位全属性魔法防御スキルは、二位までの魔法攻撃を完全無効化し、三位の魔法のダメージを半分に減らすスキルだ。本来なら六属性の魔法防御スキルを一位から三位まで、すなわち十八のスキル枠を必要とする能力だが、それをスキル枠付きのたった一冊の魔導書で一切の鍛錬もなく手に入れることができる。課金の金額は価値に比例する。三位全属性魔法防御スキルの値段はバイト六時間分と高めだったが、美月は手間と金額をはかりにかけ、迷うことなくキャラクター作成とほぼ同時に魔導書を購入していた。

美月は魔法のファイアを凝視する。が、変化はない。攻撃魔法では変化が起きないのかと防御支援系統の魔法の位置までリストをスクロールさせ、その中の防毒を見る。しかし、変化はない。続けて、その下の防麻痺毒を見る。と、防麻痺毒にかぶってうっすらと防毒（二位）の文字が見えてくる。美月はさらに防麻痺毒を凝視する。と、防毒関連一連の魔法が点滅しだす。ん？　と思った瞬間、リストから防毒関連の魔法がすべて消え、防毒（五位

まで）に集約される。
「うわっ。魔法が消えた！」
「消えたのではありませんっ。集約されたのですっ。今まで通り使用できますっ」
「今まで通り？」
美月は自分の腕を見る。
「防麻痺毒《ガードパラライズ》」
美月の体が一瞬緑に輝く。美月はもう一度自分の腕を見る。
「ふーん。…美風。ちょっと」
美雪の列の最後尾にいたエルフの夜美風がまわりをキョロキョロ見まわしながら前に出て美雪の斜め後ろに立つ。背は美雪ほどではないが、それでも女性としては高い。スタイルもすらっとしていて、まるでファッションモデルのようである。特徴的な尖ったエルフの耳をしているが顔はどことなく美月と美雪に似ている。
「なんでしょう。美月お姉さま」
美月はじっと美風を見る。美月の視界に美風のステータスと状態が表示される。
名前：夜美風（イェメイファン）、通称：美風（みかぜ）。防御状態：火魔法（一位）スキル、氷魔法（三位）スキル、雷魔法（一位）スキル、暗黒魔法（二位）装備（服）。
「二位防毒《ガードポイズンセカンド》」
美月が美風を指さし、魔法を唱えると、美風が緑に輝く。美月は美風の輝きを確認したあと美雪に目を移す。
名前：美雪、偽名：夜美雪（イェメイシェ）。防御状態：全属性（三位）スキル、氷属性（十位）スキル。
「防毒《ガードポイズン》」
美雪が緑に輝く。美雪の輝きは美月や美風に比べるといくぶん強い。やがて、美月の視界の防御状態表示に、毒（五位）魔法の文字とその文字の背景に緑の棒グラフが追加されている。
魔法の防御や毒の防御はスキルでも魔法でも有効だ。装備品の効果としての防御もある。魔法とスキルは似ている。効力の観点からすると、魔法での防御もスキルでの防御も違いはない。効力は同じだが発動は異なる。スキルは一度修得すると常に発動状態となる。発動中もＭＰを消費することはない。魔法は発動時にＭＰを消費する。そして、有効時間がある。有効時間は術者の熟練度によって左右される。そこまで聞くと魔法のほうがスキルより劣っているようにきこえるかもしれない。だが、魔法のほうが優れている点が一点ある。それはスキルは術者自身にしか発動しないのに対し、魔法は他の者にもその効果を与えられることだ。
魔法やスキルの他に効果付きの装備でも防御効果は得られる。効果付きの装備はそれを装備したときに身に着けた者に対して発動する。そして、装備を脱げば効果は消える。ＭＰ消費もない。効果付きの品を「魔法が掛かった」と称したりするが、発動のしかたから「スキルが付いた」と称するほう

が正しいのかもしれない。
「MP消費量と効果の大小、名前が違うって云うのは判ったかも。魔法が減ってるって云うのは集約されたからだね。増えてるって云うのは？」
「知らない魔法やスキルがあーる」
「知らない魔法？」
「白石支津香が『大掃除』の魔法を選べるのであーる。『家事』のスキルも自分は知らないのであーる」
「家事？　炊事洗濯ってこと？　どう使うの？」
「そこまでは聞いてないのであーる。白石支津香は工人ではないのであーる」
「白石支津香は使用人っ。わたくしが聞き取りの責任者っ。ですがっ、聞き取りできずっ」
「白石さんは私が使ってたんだから、ジェスターが聞き取りできていないのはしょうがないよ」
「ですがっ、では何故ロデムーが白石支津香のことを知っているとっ。ロデムーが知っていて…」
「ちょっと待った。話がずれてきているよ。白石さんへの聞き取りはあとでやっといて。そうだ、使った感じも、その時ついでに聞いといて」
　支津香はギルド部屋に一旦呼びつけたあと、工房に料理修行に行かせていた。ジェスターは美月に一人にならないようにと言っていたが、それを無視したこととなる。そのことがバレて、みんなの前で非難されるのは嫌だ。ここは話をすり替えなければ。
「支者は新しい魔法やスキルを自分では選べませんっ。どの魔法を覚えるかはっ、やんごとなきお方に決めていただかないとっ」
　プレイヤーキャラクターは魔法枠、スキル枠に余裕があれば、選択可能リストからそれを選んで持つことができる。枠はレベルアップ毎に三つずつ増える。支者も魔法枠、スキル枠に余裕があれば、選択可能リストから持たせることができる。枠はレベルアップ毎に一つしか増えない。増える枠数以外は一見同じに見えるが、主体を支者にしてみると大きく異なっている。PCは自ら選択し、支者は選択してもらうのだ。支者はレベルアップ後に自動的に新しい魔法を持ったりしない。支者を管理するプレイヤーが支者に対し魔法を与えるのだ。
「白石さんはくまちゃんのキャラだよね。くまちゃんに頼む訳にもいかないし」
「人に頼らず美月様が選んでくだされば っ。ギルドマスターの美月様にはそれが可能ですっ」
「そうだね。現実を考えれば、他の人のキャラ設定には手を出さないなんて主義はナンセンスだね。あとで白石さん呼ぶよ。そうだ、白石さんの魔法が増えてるんだったら、他の人も増えてるんじゃない？　各人、新しい魔法があるかないか。とりまとめは情報参謀の涼が音頭とって」
「はい」
　ロデムーの後ろのイケメンが髪をかき上げながら返事をする。イタリア

ンブランドのスーツをピシッと着こなし、靴もきれいに磨かれている。佐久間涼。情報系のスキルや魔法を主に扱う参謀だ。映画スターばりの二枚目で、スパイ映画の主人公をイメージして、よっしーが作ったキャラクターだった。

当初の構想では、美月が涼に対し内心あこがれを持っていて、そのことに気づいているプレイボーイの涼が美月を手玉にとるというものだった。そうなっていないのは、細部を練っているうちに話が発散してしまったためだ。あとでプロットから考え直そうと思っていたのだが、そのまま放置されたままだった。今、こうして美月の目で涼を見ていると、その設定にしなくて正解だったと思う。気障な涼の態度が不快に見えてしまうのだ。

「スキルは取らなくても持てるとは？」

「これも白石支津香であーる。朱大人が云うには白石支津香は料理を取ってないのにお湯を沸かせたのであーる」

料理ができなくても、お湯ぐらいは誰でも沸かせる。やかんに水を入れて火をかければいい。あとは放っておいても、水はお湯になる。ミドではそれができない。料理スキルを持っていないと、やかんに水を入れることができないのだ。水のマジッククリスタルとやかんとコンロを目の前にしても、手が動かないのだ。

逆に、料理スキルを持っていても、お湯は作れない。それはお湯がミドのレシピに存在しないからだ。紅茶はレシピにあるので紅茶を淹れることはできる。やかんと火と、水のマジッククリスタルと紅茶葉のマジッククリスタルがあればいい。それらを前に『紅茶を淹れる』と念じれば、手が勝手に動いて紅茶ができあがる。その流れは一連になっていて、途中で中断することはできない。レシピの中から紅茶葉を除いて『紅茶を淹れる』と念じても、お湯を沸かしたあとにその場にない紅茶葉で紅茶を淹れようとして手がパニックをおこす。そして『パンッ』という音とともに、そこには真っ黒く焦げた丸い物体のみが残る。

料理スキルを持っている者は、お湯を沸かせるが、それをお湯の状態で残すことはできない。料理スキルを持っていない者であれば、お湯を沸かすことさえできなかった。

「涼、さっきの調査、魔法だけじゃなくスキルも範囲に入れといて」

「はぃ」

「料理やアイテム生成は私も専門だし、興味もあるからあとで工房行くよ。そこで詳しく教えて」

「判ったのであーる。ホワイト・スミスと朱大人はあとで美月様に教えるべし」

「ロデムー、ありがとう。じゃ、元に戻って魔法以外の変化の報告。はい、美雪」

「迷宮の中…、迷宮の中での違和感はＭＯＢの湧き方に顕著だった…かな。私たちを敵と認識し、いったん湧いたあと、所属を確認してから消えてくように見えたよ」

「え？　ＭＯＢってギルド所属に関係なく普通に湧くよね。素材採り行く

とき、いつも普通に湧いてるでしょ」
「それは、通常モードで迷宮に入っているからであーる」
「モード？」
「設計モードや迎撃モードで素材が取れたらっ、採り放題になってしまうではないですかっ」
「あ、確かに」
迷宮の設計でＭＯＢ配置や罠設定をするときはＭＯＢは動かない。初期位置にただ存在するだけだ。外からの迷宮侵入に対抗する迎撃時はＭＯＢは動くが、味方を攻撃したりしない。侵入者を排除するために、ギルドメンバーや支者と協力するだけだ。そのような状態で素材採集ができれば、ジェスターのいうように、まさに採り放題だ。
「それと、迷宮の中の草だけど」美雪が報告を続ける。「入り口付近には見たことがない草が数株。薬草エリアは三分の一は知らない草に変わっていたよ」
未知の草、未知の魔法、未知のスキル。未知といいながら『大掃除』は知っているし、『家事』も知っている。ミドには存在しなかっただけで、美月の知識の中には昔から存在している。たぶん未知の草もそうだろう。
「持ってきた？」
「うん。葉の先端だけど。…夜美花《イェメイファ》」
美雪の後ろの美花が何かを包んだ布を持って美月の前に出る。
「注意して、まだ生きてるかもしれないから」
美雪にそうおどかされて美月は伸ばしかけていた手を一瞬びくっとさせる。だが、手を引っ込めることはなく、恐る恐るだが差し出されて布をめくる。そして、その葉をみとめると、おもむろに掴み、指で押しつぶす。それによって、多肉の葉は切断面から汁をしたたらせる。
「これってさぁ、両脇にずっとトゲトゲしたのがついてて、細長くて、クネクネしてなかった？」
「そんなにクネクネじゃなかったけど。トゲトゲはあったよ。長さ的には長い葉で私の肘から先ぐらい。一つの幹から四方八方に無節操に葉が密集して生えた多肉植物で、背の高さは私の腰まで。最初見たとき、植物系のモンスターかと思ったよ」
「そうだね、見た目は肉食っぽいよね。まあ、薬草って云えば薬草なんだろうけど」
「知ってるの？　それ」
「アロエでしょ」
「え？　それって、アロエ？」
未知の草はやはり既知の草だった。それも薬草といわれて納得できる草だ。たしかにミドにはアロエがなかった。ＨＰポーションの素材となる薬草は実世界には存在しないタンポポに似た赤い花の草で、毒草は同じ形で紫色の花の草、毒消草は緑の花の同じ草だった。
ミドに存在しない物でも支者は知っている。おそらく、ウィキペディア的な百科事典をシステム内に持っていて、そこから支者の職業レベルや総合

レベルに見合った内容を支者の知識として引き出しているのだろう。おたくのギルドメンバーが支者とシュレーディンガーの波動方程式について激論を交わしていたこともあるし、学生のギルドメンバーが高位の魔術士に位相空間論の論文を手伝ってもらったこともあった。美雪の「それがアロエ？」の発言は「知識として知ってはいたが実物を見るのははじめて」とのことだろう。

「アロエって歩くんだ」

「はぁ？　歩く？」

「歩くと思ってなかったから、アロエに似てるけどアロエじゃないと思ってたよ」

「歩くって何。アロエが歩く訳ないでしょ」

美雪は怪訝な顔をする。そこで、美月はすれ違いの原因に気がつく。

「これ、歩くの？」

「うん。ものすごくゆっくりだったけど」

「足は三本？」

「三本…そうだったかも」

子供のころにジュブナイル化されたトリフィドに恐怖して以来、美月の中で肉食の植物は三叉に分かれた根で歩く。でも、トリフィドは薬草だっただろうか。野生ではなく飼育されていたのは覚えている。飼育ということは食用だったのだろう。効能として薬の要素があったかどうかは覚えていない。

「歩くのならアロエじゃなくてトリフィドかな。肉食かもしれないから注意しないと」

「人物鑑定には反応しなかったから、モンスターじゃないはずだよ。なんだか判らなかったから、美月に見てもらおうと思って持ってきたんだけど」

「そっか」

美月はアロエ風の葉を凝視する。

「うん。確かにモンスターじゃないね。薬草ってことになってるけど、名前が…。あ、見えてきた。アロエトリフィド？　何そのとってつけたような名前は。…まあいいや、大丈夫そうだけど、一応注意だけはしといて」

美月は周りを見まわし首を振る。全般的な報告を受けるつもりがいつの間にか詳細論になってしまっている。これは美月自身も自覚している美月の悪い癖だ。会議や打ち合わせの最中に気になったことがあると、細部まで確認してしまう。会議の時間は短い方がいいと思っているのだが、美月の不要な発言で無駄な時間が増えることも多い。自分でも注意はしているのだが、性分なのかなかなか治らない。

「あ、ごめん。話がずれたね。報告に戻って。草以外で全般的に気が付いたことは？」

「明確な数値はないんだけど、第二階層の山は風がやや強くて、ちょっと寒かったかも。第一階層の森は、この時間帯にしてはやや暗かったかな。気が付いたのはそれくらい」

「判った。じゃあ、次、ブリュンヒルデ」

美雪が下がりブリュンヒルデが前に出る。
「変化は…。端的に云います。全てです。迷宮の外は今までの場所ではありません。入り口は山の中腹。背後には高い山。入り口周辺を巡回しましたが動いている大型動物はなし。動いていたのは多数の見知らぬ小動物と多数の見知らぬ鳥。無数の虫です」
「サンプルは」
「接触は避けるようにとのことでしたので、お持ちしませんでした」
またしても未知の動物に未知の鳥だ。
ミドにも鳥はいる。エミューのようなフィールド中ボスモンスター。雀や燕のように街の風景の一部として存在するもの。鷹や鷲は厳密にいえばモンスターではないが、プレイヤーが攻撃することもできるし、ビーストテイマーが『目』として使用することもできる。食材用の素材として鶏も存在し、卵や鶏肉のマジッククリスタルを採集できたりする。
小動物は種類が多い。犬は十数種の犬種がある。猫の種類も多い。野鼠や野兎、狐はチュートリアルが終わった直後の冒険者が最初に相手をするフィールドモンスターだ。どこまでの大きさを『小動物』とするかの判断にもよるが初級冒険者向けの森に棲むフィールドモンスターのほとんどは『小動物』といっていい。
それに比べると虫は少ない。町中に蝿や蚊は飛んでいない。いるのはジャイアントアントと巨大な百足、大きな蜘蛛ぐらいだろうか。
「虫の大きさってどれくらい？」
ミドの虫は大きい。モンスターとしてプレイヤーが相手にするにはそれなりの大きさが必要になるからだろう。実世界のように微小の虫を手でつぶしても『戦闘』という気はまったくしない。そんなこともミドには虫が少ない要因だと美月は思っている。
「極小です。小指の先くらいで、ふよふよと空中に浮いていました」
「妖精フローラみたいな翅だった？」
空中に浮いていたのなら、蚊や蜉蝣《かげろう》のようなものだろう。フローラはミドのストーリークエストに出てくる妖精の女王で、蜉蝣のような翅を背につけていた。
「はい。そのような羽根です」
未知の虫は既知の虫。すべては美月の空想の世界。
「ただちがうのは、その枚数で、こちらの虫は三枚の羽根を器用に使い、空を漂うように浮いていました」
「三枚だって！」
「はい。肩から出た左右に動く羽根二枚と首から下に向かって出た上下に動く羽根が一枚。そこが妖精のフローラとちがうところです」
「三枚…」
美月は絶句する。
美月というかよっしーは田舎育ちだ。子供のころは網をもって野原や畑をとびまわっていた。少し大きくなってからは裏山に昆虫トラップを仕掛け、捕まえた甲虫を売り、小遣い稼ぎをしていた。学研の昆虫図鑑がバイブ

ルで、小さいころは昆虫博士になりたいと思っていた。今でも部屋にある数少ない紙媒体の本のうちの二冊が手垢にまみれたポケット版の昆虫図鑑だ。専門は甲虫だったが、昆虫全般に対しての知識もかなり持っていると自負している。

知識は想像を狭める。昆虫の系統樹と基本構造から取りうるべき姿は限定されてしまう。突拍子もない想像は無意識のうちに排除される。よっしーすなわち美月の中に歩く植物の想像はあっても、三枚翅の虫を想像する余地はない。美月の精神世界に三枚翅の昆虫は存在してはいけないのだ。

「続けてかまわないでしょうか」

ブリュンヒルデが美月に尋ねる。

「あ、続けて」

「まずは入り口から飛翔で五分ほどのところ、そして内側の四分と三分のところを入り口を中心に同心円を描くように飛んでみました。一番外周はわたしとヘルムヴィーゲ。わたしは外側を見張り、ヘルムヴィーゲは内側を。四分のところはゲルヒルデとロスヴァイセ。最も内周はジークルーネで」

ブリュンヒルデの後ろの乙女たちは、自分の名前が呼ばれると一様に軽く頭を下げる。その動きはまるでコピーされた動作のように同じだった。

「三分以内の範囲には虫以外はいませんでした。四分の地点には小動物はいましたが、すべてがすべて迷宮の入り口から遠ざかる方向に移動していました。それはわたしが飛んだ五分のところも同じです」

「それって、この迷宮から逃げてるってことだよね」

「はい。そう見えます。何かに怯えるがごとく、何かを怖れるがごとく逃げ出しているように見えました」

「その脱出が一周ぐるっと起こってるんだよね」

「裏の山側はほぼ垂直の崖となっていましたので、そちらは飛んでおりません」

「飛べないほど高い山なんだ。見とかないといけないかな」

「飛べないことはないでしょうが、地を這うものがあの崖を登ることはできないでしょう。降りるのさえままならないはずです」

「そんななんだ。あとで見てみたい。工房行く前に案内して」

「はい」

沈没船からはネズミが逃げ出す。地震の前には動物がさわぐ。生き物は災厄を察知し、そこから遠ざかる行動をとる。この付近の動物がこぞって逃げ出しているということは闇面の迷宮は、ここに棲むものにとって突然現れた災厄なのだろう。

「さっき、大型動物のとき『動いているものはいない』っていう微妙な表現をしたよね。それって何故？」

「大型動物は低レベルの偽死の形態をとっていました」

「偽死？　逃げもせず、死んだふりをしてたってこと？」

「大型動物の発見場所は別の場所です。それはこれからご報告しようと思っていました」

「あ、ごめん。先走りすぎちゃった。じゃ。報告続けて」
「では…」ブリュンヒルデの報告では、主に動物は山の麓に向かって逃げているとのことだった。それが迷宮入り口から飛翔で十分、約五キロ先まで続いている。それより先は逃げてきた闖入者と元から棲むものとの間でのガサガサとした混乱がある程度だという。大型動物を見つけたのは迷宮から六キロほど山をくだった位置で、三、四体ずつの集団が三つ、計十体とのことだった。
「それらの個体らは動かないものの、呼吸をしているのは遠目でも判り、HP表示もゼロにはなっていない低レベルの偽死の形態をとっていました」
「あ、偽死ってそう云うことね。でもさぁ、それって単に寝てたんじゃないの？」
「あれが『寝る』という行為ですか」
「えぇと。ここにいる全員、不眠不食だったよね」
「はいっ」
誰よりも先にジェスターが返事をする。ジェスターの顔には得意げな表情があらわれているが、美月はそれに対して冷たい目で返す。
「不眠不食でも食べることはできるよね」
「はいっ」
先ほどの『はい』はジェスターに遅れて何名かが追随していたが、今回はジェスターだけで、他には誰も返事をしない。皆がジェスターを代表者として認めたがごとくだ。
全体として意識の統一が取れているのは組織として理想的だ。だが、単一の意見しかない組織やただ一人の意見のみが表に出てくる組織は組織として弱くなる。今回のジェスターの代表権獲得はギルドとして正しい方向なのか、間違った方向なのか。そんな思いが一瞬だけ美月の中に湧きあがる。
「不眠でも寝ることはできるよね」
「恐らくっ」
今回も返事はジェスターだけだ。
「この中に寝たことのある人っている？」
今度はジェスターも返事をしない。満足した美月が周りを見まわすと、小首をかしげたブリュンヒルデが小さく右手を上げる。
「はい。前に一度」
「なんだ、寝たことあるんじゃない。なら判ったでしょ」
「前に一度、のりのっ様とともにハイベルクの丘で、草の上に寝たことがあります。そのときのりのっ様は空を見ながらいろいろな話をしてくださいました。それと今回の大型動物の行為はまるで違います」
「それもたしかに『寝る』だけどね。…ったくコップと水の違いを教える羽目になるとは思わなかったよ」
「失礼しました。わたしは目も耳も使えているつもりでいました」
寝っ転がると寝るの違いも判らないくせに、ヘレン・ケラーは知っているなんて、どういう知識の偏りだよとさらなる嫌味をいいたくなるが、それをぐっとこらえて美月は話を打ち切る。

「なんか、とっても疲れた。それこそ、ひと眠りしたくなったよ」
「ではっ、今日はここまでですかっ」
「ブリュンヒルデの報告はそれでおしまい？」
「はい」
「その大型動物だけど、ＨＰ見たってことは鑑定したんだよね。レベルはいくつだった？」
「最大レベルが六。ほとんどがレベル一から三でした」
「ふーん。かなり弱いね。見かけた中で最大が六でいいんだよね」
「はい」
　レベル六は初心者レベルだ。生産系の美月でも余裕で勝てる。総合レベルが一だった白石支津香では勝てないだろうが、ギルドの戦闘系支者なら誰であっても秒殺できるだろう。それが周囲五キロでの最大レベルなら、多少は安心できる。
「人間種とか亜人種は見かけなかった？」
「一体だけ、ゴブリンと思われる死骸を見つけました。かなり古い骸《むくろ》でしたので、ゴブリンの確証はありませんがサイズ的にも、横に落ちていた鉄製の剣からしても亜人種であることは間違いないと思われます」
「判った。ありがとう。…じゃあ」美月が美雪を見る。美雪はハッとして顔を伏せる。「美雪、前に出て」
　美雪は消え入りそうな声で「はい」といい、一歩前にでる。謁見室の全員の視線が美雪に集まる。
「さっき、私が錯乱したときに美雪がとった行為に対して、美雪とジェスターは、罰するように要求してきた。そのことについてみんなはどう思う」
　召集の際に通達が出ていたのだろう。謁見室にいる全員が何が行われるか判っていて、静寂の中で美雪を見ている。
「何も意見はないの」
「どうあっても、やんごとなきお方に手を上げてはいけないのであーる。反抗は規定によって禁止されているのであーる」
　ロデムーが上下への伸び縮みを速くしながら、代表答弁として答える。
「じゃあさ、明らかに私が間違ってても、誰も何も云わないのっ。私をあまやかすのっ」
「わたくしは厳しく間違いを正しますっ」
「そうだね。ジェスターはいつもそうやって私を諭してくれる。これからもちゃんと諭してよ」
「はいっ」
「さらに美雪は云った。罰は『死』程度では済まないって。じゃあ、罰として何が相当？　階層統括から領域統括への降格？　一般支者への降格？　それじゃあ足りない。ＭＯＢへの降格？　降格って何。誰が偉いとか偉くないとか、それって肩書で決まるもの？　確かに私のいた世界ではそうだったよ。あの人は社長さん、偉い人。この人は役が付いていない偉くない人。『何某さん、次の仕事もお願いします』『駄目だよ平の何某さんに云っても、部長さんに云わなきゃ』『でもあそこの部長さん全然仕事できないじゃない

ですか。何某さんに丸投げですよ、実質は何某さんでしょ』『でも偉いのは部長さんだから』…このギルドはそんな形式だけのギルドなの？　『統括』って云う名前が偉いの？　どれだけギルドのことを想っているかってことが大事じゃないの？　ギルドのことをより多く想っているものが敬われるだけってことじゃない？　敬われるけど、それは偉いのとは違う。すごくあこがれるっていうのはあるけど、だからと云って権力を持っていいの？　まあ、使えないクズが権力を持つより、敬われる人が権力を持った方がいいのは決まってるけどね。階層統括は領域統括をまとめて階層全体を管理する役。領域統括は決められた領域を統括し管理する役。どっちが偉いとかって訳じゃなく、そういう役なだけ。階層統括が一般支者になったからって、それは役が変わっただけ。格が下がった訳じゃない。役の名前で偉い、偉くないが決まるんじゃない。階層統括だろうとＭＯＢだろうとみんな同じ。ただギルドへの想いの強さに差があるだけ。それが私でもね。私もみんなと同じ。偉いとか偉くないとかはない」

「それは違いますっ。美月様はやんごとなきお方っ。わたくしたち支者とは異なりますっ」

「どこが違うって云うのよっ」

「虫と人とは違うのであーる。単なる獣と獣人も全く違うのであーる」

「そうっ、虫と人は違うっ。やんごとなき御方々と支者も別物っ。自身が崇める神を自分と同等と思わないのと同様ですっ」

命の重さはみな同じ。すべての生命は尊い。地球より重い。それは倫理上の理想だ。人の間に上下はない。全ての人間は平等。それは倫理上の理想だ。尊くない命もあれば、優先される命もある。現実はそうだ。権力を持っている者、財産を持っている者が明らかに優遇される。財産も権力もない人間は軽んじられ、優先度が下げられ、打ち捨てられる。現実はそうだ。

それが現実だが、それを善しとするのか。美月の世界の現実を、このギルドにまで押し付けるのか。このギルドなら美月の理想の倫理の世界を展開できるのではないか。理想を実現できる可能性があるのならば、それに向かって進むべきだ。

「私は人じゃなくて、神だって云うのっ」

「やんごとなき御方々は我々の創造主であーる。揶揄でなく直接の創造主であーる」

「そう…神よりも上の存在…姉妹というのはありえません」

「何故急にそのような態度に変わられましたかっ。今までの美月様はご自分とわたくしたち支者を同じ存在だとは思っておられなかったはずっ。今まで通り接してくださいっ」

昨日までの美月は支者を単なるシステムデータとしてしか見ていなかった。人間とシステムデータの間には確実に大きな差があった。決して同等の存在だとは思ってもいなかったし、そういう扱いもしていなかった。上下関係を全く意識せず、自分が上位であることが当然と思っていた。ジェスターのいう通りだ。それを支者が自由に動き出した途端、同等だ平等だといって、責任を放棄する。それこそ許されないことかもしれない。

「美雪…、ジェスター…、ロデムー。ありがとう。私は基本的なことを忘れていた。このギルド、ダークサイド・オブ・マイ・マインドを導くのはこの私だってこと。私がその役を担《にな》っているってことを」
「その通りですっ」
まずは自分が頭に立って、今までの恩を返す。非を詫びる。返し終わったあとに自分の持つ権限で、理想の平等を実現する。それが今の美月の存在意義ではないか。
「みんなが私を創造主と崇め、闇面を導けと云うなら、私はその役を引き受ける。絶対君主としてこのギルドを支配する。いいね」
「当然なのであーる」
支配するよりされる方が断然楽だ。支配される方に責任はなくなる。決定が誤りだった場合、その責任はすべて支配者のものになる。特に絶対君主であるときなどは、被支配側は指示通りに動けばいいだけで、そこには一切の責任が発生しない。
美月は周りを厳しい目で見まわす。
「話を戻す。降格は罰にはならない。では美雪が望む『死』以上の妥当な罰は何か。ある者が云った。支者は主を支えるのが生きるすべて、唯一の存在理由。それを拒否されることは…」
「美月様っ」
「それを拒否されることは存在理由を失うこと。自分を失うこと。だからギルドからの追放…」
「美月様っ。その先を云ってはいけませんっ」
ジェスターが美月に駆け寄り、美月の前に跪く。
「だからギルドからの追放が一番重いば…」
「美月様っ。お慈悲をっ」
「黙れ、ジェスター！　まだ話している途中だっ」
「しかしっ、今までの美雪の功績も鑑みっ」
「くどいっ。黙れ！」
ジェスターが口を開けたまま、美月をただ見ている。再び謁見室が静寂に包まれる。やがて、美月を見上げていたジェスターは美雪に目を移す。美雪はうなだれたままである。
「忘れたか。このギルドはダークサイド・オブ・マイ・マインド。わが心の闇の面。私は私のダークサイドをこのギルドを通じて実現する。私の闇面を以ってこの世界をも支配する。それが私がこのギルドにいる理由。本当にありがとう、ジェスター。それを思い出させてくれて」
謁見室の全員が美月を見ている。静寂の中で、みなの目には今までにない怯えと戸惑いの表情が浮かんでいる。
「場がしらけたな。ジェスター、大事なことを思い出させてくれたお礼として、そしてしらけた場の場直しとして、私がさえぎった話を聞いてやる。話せ」
ジェスターはしばらく口を開け閉めしていたが、意を決したように話し出す。

「美雪は今までギルドのために大変よく尽くしてくれましたっ。今回のことも己《おのれ》の利益を想っての行為ではなくっ、美月様を思ってのことっ。その点を考慮いただいたうえでの処罰をっ」
「私はさ、罰なんか不要だって云ったんだよ。それを示しがつかないから処罰しろって云ったのはジェスター、あなただよ。それなのにみんなの前では処罰するなって。何それ。自分だけいい格好するつもりなの」
「いえ、処罰は受けるとしてもっ、追放は重すぎるかとっ」
「なんだ、ジェスターは私が美雪を追放すると思ってたんだ」
「違うのですかっ。失礼しましたっ」
「もしかしてロデムーもそう思ってた？」
「一瞬だけ思ったのであーる」
美月がにこっと笑う。
「私が追放だなんて云う訳ないでしょ」
美月は声を出して笑う。それを見たジェスターから肩の力が抜ける。ロデムーもゆっくりと横に向かって伸びる。
美月は笑い続ける。部屋の全員の緊張が解けていく。美月は笑い続ける。ブリュンヒルデは首をかしげる。美月は笑い続ける。その笑いに狂気が混じってくる。美月は大声で笑う。謁見室が再び緊張に包まれる。美月は笑う。
「ハッハ。…莫迦にするなっ！　私は私の闇面を出すと云ったはず。私の闇面が追放なんて云うあまっちょろいもんで済むと思ってんのっ！　ジェスター、ロデムー、どれだけ私をあまく見ている。莫迦にするなっ！」
美月は美雪を見る。その目には一切の感情はあらわれていない。
「美雪。お姉ちゃん。お姉ちゃんが一番苦しんでるのは何？　私を支えることができなくなること？　違うよね。アハハッ。お姉ちゃんが苦しいのは私と双子の姉妹って云う設定。支者でありながら、私の姉って云う矛盾。そして、そのことに悩んでいるって云う設定。違う？」
美雪は下を向いたまま、何も答えない。
「追放されれば、その苦しみから逃げられると思ったでしょ。お生憎様。私の闇面はそんなに優しくない。お姉ちゃんを追放なんかしてあげない。美雪。ずっと私を支えて。私に仕えて。未来永劫、私のお姉ちゃんでいて。そのことでずっと悩んで。でも、悩んでいる姿は絶対私には見せないで。いい？　それが美雪への罰。判った？」
美雪が小声で「はい」と言う。
「え？　なんて云ったの？　全然聞こえないんだけど！」
「はい、判りました…」
「はぁ？　お姉ちゃんは妹に向かってそんな他人行儀な口をきくの！？」
「う…うん。判った。これからもよろしくね」
「こっちこそよろしくっ。私がさっきみたいに錯乱したら、また叩いてね。あ、ううん。今度はグーで殴って。思いっきり。血がでるくらい思いっきり。一瞬で目が覚めるように」
「そ、そんなことできないよ。可愛い妹に。でもちゃんと助けてあげるから。私が美月のこと、ちゃんと…ちゃんと…」

「どうしたの美雪。具合が悪いの？　ウィル・オーにささえてもらう？」
「だ、大丈夫。大丈夫だから」
「ジェスター、何か意見は」
「えっ、あっ」
「ないねっ。じゃあ処罰はこれで決定。一件落着。美雪は下がっていいよ」
「はい。あ、うん」
　美雪は少し震えながら、列に戻っていく。
「忘れないで。今、ここにいるみんなが美雪に罰を与えたってことを。未来永劫、美雪が悩みをかかえつづけるのは、ここにいるみんなが望んだ結果だと云う事実をね」
　どこかで息をのむ音が聞こえる。美月はゆっくりと表情を変える。挑むような表情から温和な表情に。
「で、話はまたごろっと変わるけど。魔法が増えてるって云ってたよね。誰か『実体化《リアライズ》』とか『異世界転移』の魔法、増えてたりしない？」
　みな、一瞬キョトンとするが、やがて眼をキョロキョロさせたり、どこからかパッドを取り出し魔法の確認をはじめる。
「『実体化』はないけど『素材化《マテリアライズ》』はあるブヒ」
　オークの朱大人が鼻を鳴らしながら答える。
「素材化？」
　美月が自分の魔法リストを検索すると、素材化がヒットする。
『素材化（生産系魔法）：マジッククリスタルを実素材に変換する』
「朱大人って魔法スペース余ってたっけ？」
「たくさん余ってるブヒ。急に余りが増えたブヒ」
　美月が朱大人の魔法枠を視界に表示すると、確かに空きが七十二枠存在している。朱大人の総合レベルは三十一。すでに保持している魔法が二十一。支者の魔法枠は総合レベルと同じ。全部で三十一枠しかないはずだ。それが空きだけで七十二、全部合わせると九十三。ちょうどレベルの三倍。これはプレイヤーキャラクターと同じ魔法枠だ。確認のため、美雪の魔法リストの表示してみる。まだうなだれている美雪の姿にかぶって、保持魔法数と空き魔法枠が表示される。その数、合わせてちょうど総合レベルの三倍。この世界では魔法枠はＰＣも支者も同じということらしい。
　美月は再び朱大人の魔法リストを表示させ、空枠に素材化をセットする。それと同時に朱大人の周りでカチッという音がして、朱大人が一瞬白く輝く。
「朱大人、素材化、使えるようにしといたから。あとで試してみて」
「ブヒッ」
「涼。全員の空き魔法枠、空きスキル枠も調べといて」
「はい」
「私の考えを云うよ。みんなも世界に対していつもと違った感じを持ってると思う」
　美月は部屋を見まわす。何名かは美月の問いかけにうなづいている。
「それは、ギルドがギルドごと別世界に転移したから。ここは地きゅ…ミド

じゃない。別の世界。じゃあなぜ転移したの？　ここはどこなの？　…判らない。情報が少なすぎる。まず、ここがどこか、なぜ転移したのか調査する。それが最優先事項。判った？」

「はい」

これだけミドと相違があるなら、ここがミドである可能性はない。美月の精神世界かとも思ったが違う可能性も出てきた。で、あればここがどこなのか、それが判らないことには前に進めない。

「最終目的は元の世界に戻ること。で、とりあえずの目標に向けて…」

この世界は魔法が有効だ。ミドの魔法が使えるし、新たな魔法もある。新たな魔法はおそらくこの世界に以前から存在する魔法なのだろう。魔法を知ることはこの世界を知ることになるのかもしれない。

「美雪。第二階層の統括全員と戦闘系支者から何名か選んで、戦闘系と支援系魔法の効果を確認して。それと、まなかは…」

この世界にはこの世界で通用する魔法がある。おそらくそれは、その魔法を使える者の存在を意味している。その存在が美月たちのことを知ったら、どう反応するか。無視したり友好的な態度を見せるならいい。問題は好戦的な態度を取られた時だ。相手の戦力は判らないが、現時点で迷宮がどの程度の防衛力を持っているかを調べておくのは無益ではない。

美月は真嶋まなかにその調査をさせようとするが、ふと別の思いに言葉をとめる。防衛力調査は最大級の勢力と通常勢力とで行い判断するつもりでいた。

闇面の支者での最大勢力はまなか率いる魔法少女たちかブリュンヒルデ率いるヴァルハラの乙女たちだ。イェマラジャの地獄軍も強いことは強いが、第二階層の雪山が属性的な弱点となっているため、この迷宮に於いては最大級とはならない。

「まなかたち魔法少女は外に出て、外の様子を調べて。レベル十以上の生き物がいるか確認。範囲は入り口を中心に三キロ。ブリュンヒルデと乙女たちはシムモードで迷宮の攻略」

魔法少女に迷宮の強さを調べさせ、ヴァルハラの乙女に外の調査をさせるか、その逆か。ブリュンヒルデたちはすでに一度外に出ている。二度目は一度目より緊張感が減る。それは仕方がないことだ。初見の風景は刺激が大きいが、二度目となると見慣れた風景になってしまうからだ。ならば、ブリュンヒルデを迷宮に行かせ、外に出ていない魔法少女を外に出した方がいい。

「あ、まなか。三キロって云っちゃったけど無理だったらできるとこまでいいから」

「大丈夫だと思うよ。きっと」まなかはニコッと笑って答える。

ブリュンヒルデは空を飛んで二キロ半を周回した。魔法少女も飛翔の魔法を使えるはずだが、魔法で空を飛ぶのと、種属スキルで空を飛ぶのでは、労力が違うはずだ。

「でも今回はブリュンヒルデがスキップした山側も行ってもらうよ」

「うん。判った。がんばる」

再び目を細めてニコッとする。思春期の少女のこういう姿をカワイイと思うかアザトイと思うか、その違いが魔法少女を受け入れられるか受け入れられないかの差になるのだろう。

「じゃあ、期待しているよ。よろしくね」

美月もまなかに向かって笑顔を見せる。残念ながら美月は後者だ。ただ、その不快感をそのまま表面に出すほど優しくはない。同じようにアザトイ笑顔で返すだけだ。

「ブリュンヒルデ、フル戦力の闇面迷宮攻略、どのくらいかかる？」

「パスコードは知らない前提でしょうか」

「知ってる前提でいいよ」

「であれば、二時間ほどでしょうか」

闇面の迷宮に攻略目的で入るときは、八つのパスコードが必要になる。このパスコードがないと各階層の最後の部屋から先に進むことができず、迷宮の入り口に強制転送されてしまう。パスコードのうち、四つは柱の影や木のウロの中に隠されているだけなので、発見に労力は生じない。残りの四つの発見には強力な魔法の発動が必要になる。そのＭＰ消費分の回復には数時間、要してしまう。今回はどこまで耐えられるかの調査だ。回復のための時間は省略してかまわないだろう。

「二時間で攻略できるんだ」

「おそらく、できません。途中で全滅します」

「こっちの弱点や攻撃パターンを知ってる状態でも？」

「第五階層のパターンは知りません。教えてくださいますか」

「そう云えば、第五階層の二人は来てないね。全統括をコールしたつもりだったんだけど」

「第五階層には統括はいないのであーる」

第五階層は居住区だが、一部だけは迷宮の扱いにしている。第四階層をクリアーすると、そこに転送される。そして、そこには二人の支者だけが配置されている。二人とも総合レベルが八十台の高レベル支者だが、そこでの待機といざというときの戦闘以外、他の行動は一切できない設定となっている。そして、その設定を変更できるのはギルドマスターとサブマスターだけだ。

第五階層の入り口が最終防衛地点であることは、ギルドメンバーはみな知っている。しかし、その防衛法は知らされていない。それを知っているのはくまちゃんとよっしーだけだった。ギルド支者リストから誰が防衛の任に就いているかは類推できるだろう。ただ、判るのはそこまでだ。

最終の防衛方法がギルドメンバーにすら秘密になっているのには理由がある。闇面の迷宮は防衛力的には強くない。単純な戦闘力比較であれば、なかりのギルドが闇面を上回るだろう。迷宮を奪われない防衛力を持つには三倍以上の支者が必要になる。闇面はそれをパスコードで補った。パスコードなしには実質、攻略不可能にしたのだ。逆にいうと、パスコードを知っていれば攻略もたやすいものになってしまう。パスコードは迷宮内に埋め込まれている。謎を解いてそれを得れば先に進める。

迷宮運営は正当な方法で攻略できる迷宮が条件となる。すべての迷宮はミドの運営会社による迷宮審査を受けなければならない。そこで、三回連続不合格となると、迷宮は強制的にオークションにかけられてしまう。『謎解き』は不条理でないか慎重かつ厳しく審査される。闇面の迷宮もこれを受けている。幸いなことに多少の手直し要請はあったが、一回目の審査でその条件はクリアーした。

八つの謎も、すべて『不条理ではなく解ける』と判断されたということだ。それは、誰でも謎解き可能ということに他ならない。であれば、パスコードをすべて入手されてしまった時の対策は必須だ。

その対策の意味だけであれば、ギルドメンバーにも秘密にしておく必要はない。それを秘密にしているのは単に、すべてのメンバーが信用できる訳ではないからだ。

くまちゃんにしても、よっしーにしても、すべてのギルドメンバーと面識がある訳ではない。オフ会で会ったことがあるメンバーは少なくはないが、半数以上は素顔を知らない。その上、ギルド加入希望者の中には悪意を隠してギルドに接触してくる者もいる。現に闇面でも二回ほどギルド倉庫のアイテムを盗まれそうになったことがある。

不条理ではないと認定されたが、パスコードも八つすべてが解読されるとは思っていない。一つ目のパスコードが完全に破られたことは数度あるが、二つ目以降が破られたのはただ一度だけだ。それも、ギルドメンバーに内通者がいたことが後になって判っている。その時は、第五階層より前で敵の排除に成功した。その出来事が、最終防衛手段の必要性とその手法の秘匿性が重要なことがギルド内にしみわたる要因ともなっていった。

「シムモードで進むのは第五階層の前までいいや。初見で攻略できるとは思えないし、シムモードだったとしても、みじめに死ぬのは嫌でしょ」

「わたしはカツヲソーダと工口子《こうこうこ》とは面識がありませんが、その二名はそれほど強いのでしょうか」

「カツヲ…。ああ、第五階層の支者ね。そんなに強くないよ。強さ的には美雪ぐらいかな。ただね、装備してるアイテムが卑怯だから」

「卑怯ですか」

「それ以上は教えないよ。どこに耳があるか判らないからね」

「承知しました」

「で、太狼次狼。あんたたちはブリュンヒルデとは別部隊として迷宮のシム攻略」

右の壁に張り付いていた狼人がうぉーんと鳴き声をあげる。

「ま、あんたたちが完全攻略できるとは思ってないけどね。行けるところまでガンバってみて」

再び狼人がうぉーんと鳴くが、今回の鳴き声はいくぶん淋しげに聞こえる。

「ジェスターとロデムーは迷宮とギルドの弱点補強対策を考えて。工人は治療アイテム、防御系アイテムのストックを心もち増やすこと。それと動作感知センサー作れる人、いるかなぁ。いたら作ってもらいたいんだけど」

「作れる者がいるか、あとで聞いておくのであーる」
「他は通常体制。あ、そうだ。ブリュンヒルデ、迷宮攻略が終わったら寝て…眠ってみて」
「はい」
「私はまず裏山を見に行くから。ブリュンヒルデ、その案内もよろしく。で、次に工房行くから。そのあとは、自室で白石さんでもいじめようかな。ま、私がどこにいても、レベル三以上の侵入者を発見したら、すぐに連絡して」
「はい」
「何か云いたいことある人、いる？　指示のことでも、変化で云い忘れたことでも」
「最終目的ですが…。あの…」
周りを見まわす美月に向かい、ブリュンヒルデが言いにくそうにしながら、口を開く。
「何、ブリュンヒルデ。云いたいことがあるなら、はっきり云って」
ブリュンヒルデは覚悟を決めたようにゆっくりと美月を見る。
「最終目的は『元の世界に戻ること』でなければいけませんか」
「ん？　どういうこと？」
「店番娘からミドガルズオルムが終わると聞きました」
店番娘は商人の職業を持っている。巷話からの情報収集は商売繁盛の大事な要素だ。その意味からも店番娘には情報系のスキルをいくつか与えていた。もしかしたら、そのスキルを使って情報を仕入れていたのかもしれない。
「わたしはダークサイド・オブ・マイ・マインドが好きです。そう設定されているからというのを除いても、このギルドが好きです。このギルドのやんごとなき御方々が好きです。仲間の支者、迷宮のＭＯＢも好きです。ですが、ミドガルズオルムが終わると、このギルドも終わってしまう。わたしの好きな人たちもいなくなってしまう。…わたしはギルド倉庫に『星願《ウィッシュ・アポン・ア・スター》』があるのを知っています。のりのっ様の部屋のアイテム袋にもいくつかあるのを知っています。…わたしはわたしの判断でわたしのインベントリの中のアイテムを使うことができます。…わたしは祈りました。わたしのインベントリに『星願』を入れてくれますようにと。そうなれば、わたしは『星願』を使うことができます。星に『これからもギルドのみんなと一緒にいられますよに』と願うことができます。…でも、のりのっ様はわたしのインベントリに『星願』を入れてくださりませんでした。…わたしは一人ではギルド倉庫に入れません。のりのっ様の部屋には入れます。のりのっ様の部屋でアイテム袋の中に手を入れ、『星願』をつかみました」
謁見室のみんながブリュンヒルデの話を静かに聞いている。
「…でも、その手を袋の中から出すことはできませんでした。どんなに頑張っても、どんなに力を入れても、『星願』をつかんだままでは、手は袋から出ませんでした。…わたしは悲しくなりました。泣きたくなりました。…でも、あの時のわたしは泣くことができませんでした」

ブリュンヒルデの頬を涙が流れ落ちる。
『『誰か星願を持っていない！？　誰か星願を使って！　ミドガルズオルムを終わらせないで』。わたしはギルドのみんなに叫びました。『店番娘、他のギルドの人にも伝えて。誰でもいいから星に願って。まだ…もっと…ずっと。みんなと一緒にいられるようにって』」
ブリュンヒルデは涙を流しながらも凛とする。
「わたしは信じています。ミドガルズオルムが終わるはずだった時間を過ぎた今でも、わたしがみんなとこうしていられるのは、誰かが星に願ってくれたからだと。誰かがわたしの声を聞いてくれたからだと」
ブリュンヒルデが、はにかむように微笑む。
「もし、元の世界がミドガルズオルムのない世界だとしたら、わたしは戻りたくありません。もし、ミドガルズオルムのある世界であっても…。…今のわたしは悲しいときに泣くことができます。嬉しいときにも涙がこぼれるのを知りました。もし、元の世界に今までと同じミドガルズオルムが残っていて、そこに戻れるとしても、わたしはこちらに残りたいです」
穏やかな静寂が謁見室を支配する。美月はブリュンヒルデの前まで歩み寄る。
「ブリュンヒルデ…。ブリュンヒルデ、ほっぺた触っていい？」
「はい」
美月がブリュンヒルデの頬をつまむ。その頬はやわらかく、あたたかい。
「でも、のりのさんはここにいないよ」
「のりのっ様がいらっしゃらないのはさみしいです。ですが、美月様がいてくださいますから」
「あ、涙だけじゃなく、おべっかまで覚えたね」
「処世術という名の新スキルです」
「変なスキル、勝手に覚えるなよー」
美月は笑う。ブリュンヒルデも微笑む。
「よし、さっきの最終目標は撤回。でも、調査優先の方針は変えないよ。ここが本当にミドよりいい世界かは判らないし、それに転移の原因が判れば、のりのさんとかくまちゃんとか、他のギルメンも呼べるかもしれないでしょ」
「はいっ」
ブリュンヒルデは目を輝かせる。
ブリュンヒルデにはそう告げたが、美月はのりのをここに呼びたいとは思っていなかった。この世界と実世界のどちらが幸せか。のりのもくまちゃんも実世界で幸せだろう。待ち望んだ子供がいる世界と、どこだか判らない不確定な世界。どちらが幸せな世界かは聞くまでもないことだ。
ゲームをしているときは、みんな実世界よりゲームのほうがいいというかもしれない。だが、実際にゲームの世界に取り残されたら、何人がゲームのほうがいいというだろうか。それは美月も同じだ。ゲームのほうがいいといっていたが、今、こうなると、元の世界に戻る方法を模索してしまう。生まれた世界ではない世界で、ギルドマスターとしてたった一人でギルドを

取りまとめるのは美月には荷が重過ぎる。
ゲームはある種の現実逃避だ。現実から遠ざかることができるからこそ楽しめる。それが逆に現実となってしまったら、どこに現実逃避すればいいのか。ギルドのリーダーなどという、実世界以上の重責を負うことになってしまったら、どこに逃避の先があるのか。せめて、この世界に来たのが、美月ではなくよっしーであったのなら、戦闘力を武器にして、楽しめたかもしれないが。
「他に何か云いたい人は？」
そう言って、美月は周りを見まわした。

クロス・ピアース

正面に大きな岩の壁。右には高い針葉樹が連なり、そのすぐ先には断崖絶壁。左側は背の低い針葉樹が隙間なく茂る。風は崖を下るように、右から左に吹いていく。動いているのは、訓練用ダミー人形をかついだ夜美風、夜美花とシャイアントアント。そして、それを見守る美雪と一匹の地獄犬のみ。聞こえる音も彼らが動く音と、吹き抜ける冷たい風の音だけだ。
山の中腹の森では、遠くに鳥の鳴く声が聞こえる設定になっているはずなのだが、今は日も暮れているためか、その声も聞こえない。ただ、風の音と人形を引きずる音だけが聞こえる。それにしても、巨大な蟻が等身大の人形をかつぎ、器用に岩壁の前に立てている姿はシュールすぎる。
「美雪姉さま。人形の交換、できたよ」
美風の声に美雪はハッと我に返る。
「あ。っと。じゃあ、さっきみたいに片っぽに火防御かけて、もう片っぽで火攻撃させて。今度は三分間。それで様子見て、氷と同じだったら、私が攻撃受けてみるよ」
美風と美花の「はぁい」という気の抜けた返事を聞くと、美雪は再び物思いに沈んでいく。
美月のいうように、世界はガラッと変わってしまっていた。空の星まで、昨日とは違って見える。昨日まで、否、今日の十四時までは、自分のすべてをあるがままに受け入れることができた。今は自分を受け入れられない訳ではないが受け入れる前に余計な考えが頭をよぎってしまう。
『支者であり、美月の姉である。そのことに矛盾と悩みを持っている』
美雪の設定の一部だが、昨日までの美雪はそれをそのまま受け入れていた。『矛盾』であることも理解できるし、そのことで『悩む』のも判る。だから、そうあるべきとして、その『悩み』を持っていた。悩むべき存在として定義付けられたとおりに悩むことに、何の疑問も持っていなかった。
それが、今は『何故』という単語が頭の中に渦巻いてしまうのだ。何故、私は美月と姉妹なのだろうか。何故、私はそのことに悩んでいるのだろうか。何故、夜美花、夜美風は悩んでいないのか。それは双子の姉妹ではなく、従妹だからか。そもそも、私と美月では種属が違う。それなのに一卵性の双子とはどういうことか。明らかに矛盾があるのに、何故、双子の姉妹でなけ

ればならないのか。『何故』がぐるぐると美雪の頭の中で繰り返す。
はたして、自分はどうしたいのだろう。どうありたいのだろう。美月のいうように、美月から、このギルドから逃げ出したいのだろうか。以前なら、即座にそれは否定できた。今は、即座には否定できない。即座には否定できないが肯定をするつもりもない。堂々巡りの悩みの中でも、どのパターンを取ったとしても、このギルドから出たいとは思わない。ギルドを抜けたときの自分の幸せが想像できない。
ギルドから出て得られるものは何か。美月と姉妹という設定は、ギルド内でのみ有効なのか。そうは思えない。姉妹とは親が同じもの同士だと聞く。ギルドを出ても親が変わる訳ではない。ならば、支者でありながら美月と姉妹であるということは変わらない。その状態で、ギルドから出ていけば、妹を見捨てたという後悔が増えるだけだ。姉である悩みから解放される訳ではなく、さらなる苦しみを背負うだけだ。
「…美雪姉さま」
すぐ横で美風に肩を叩かれて、美雪はまたハッとする。
「火属性も氷属性と同じだったよ」
「あ、ありがとう。じゃあ、シュヤーマ。私に四位の火魔法ぶつけて。人形でデータはとってあるから、確認検証だけ。だから二発だけね」
シュヤーマと呼ばれたケルベロスがうぉーんと吠える。美雪は着ていたコートを脱ぎ、美風に向かって放ると岩壁の前に立つ。
「私は火魔法防御、三位までしかないから、お手柔らかにね」
美雪のその言葉を聞いているのか、いないのか。黒斑犬のシュヤーマがのっそのっそと美雪の正面に移動し、前足で土を掻く。巨大犬のファイティングポーズに美雪は身構える。
「火炎放射《うぉーん》」
シュヤーマの叫びとともにシュヤーマの口から火炎がほとばしる。そして、頭を動かすにつれて、火炎が四方八方に飛び散る。火炎の中で美雪は熱とダメージに耐える。美雪のＨＰが徐々に減っていく。グォーーン。美雪は咆哮する。その咆哮が合図であったがごとく、美雪の周りから火炎が消滅する。ＨＰの減少は三パーセントほど。
「うん。規定量っぽいね。ありがとう、シュヤーマ。範囲魔法にしてくれて。でも範囲魔法だと場所によってダメージの波が大きいから、次は単発のにして」
「うぉっ」
「いいって。これは調査なんだし。今はね、ちょっとやられたい気分なんだ」
「うぉおん」
「大丈夫、大丈夫。火魔法は弱点だけど、四位ぐらいじゃ死にはしないから」
「うぉっ」
範囲魔法は広範囲の複数の敵にダメージを与えることができるが、その分、一体に与えるダメージ量は少なくなる。多くても一位下の三位の単発魔法のダメージ量だ。
「火球爆裂《うぉぉん》」

火球爆裂は火炎放射と同じ四位の火魔法だ。火球がターゲットに向かって飛び、対象に触れた瞬間、爆発する。そしてターゲットを熱風で包み込む。爆発の瞬間に息を吸ったりすると、熱が肺にまで入り込み、クリティカルヒットとなってしまう。美雪は当然、息を止めて魔法を受け止める。

ボンッ。

準備はしているが、それでも爆発によって美雪が吹き飛び、後ろの岩壁に打ち付けられる。

「ぐへぇー。痛いね。HP減少は一割ってとこだね。でも、これも定量かな」

美雪はペッと血を吐き出す。

「ヒール」

美花の呪文とともに美雪が赤く輝く。

「ありがと。夜美花」

「姉さまが直接ダメージ受けなくても、人形とかMOBとかでよくない？」

「うーん。たぶんだけど、美月はそれを望んでないと思うんだよね」

今のところ、訓練用ダミー人形でもMOBでも支者でも、ダメージの量に違いはない。一定の攻撃力なら、人形でも支者でも、攻撃力から装備の防御力とキャラクターの防御力を引いた値がダメージとなる。それを以って、すべて同じと断言してもいいはずだ。だが、美月の報告したとき、美月はきっと言うはずだ。「それって、推論？　それとも実際の計測値？」そして、推論と判ったときは、こう続けるだろう。「じゃあ、実際に確認したいな。美雪、私に氷魔法、撃ち込んでみて」

伝聞だけでは信用しない。自分で試してみて、はじめて納得する。美月はそういうタイプだ。そして、美月と一卵性双生児の美雪も、その考えは理解できる。だから自分自身が被験者となって、魔法攻撃を受けているのだ。

「美月お姉さまだって、そんなに美雪姉さまを傷つけたいなんて、思ってないよ。きっと」

美花の言葉に美雪は首をふる。美花は何も判っていない。もちろん美月が美雪を傷つけたいと思っていないことは、美雪自身が判っている。そもそも、美月は美雪が傷つくとさえ思っていないのだから。傷つくのは心を持っているからだ。物は傷ついたりしない。

美雪はギルド支者だ。ギルド、ダークサイド・オブ・マイ・マインドに属し、ギルドを支える。その意味では、やんごとなき御方々はみな等しくあるべきだ。だが、実際には違う。美雪を生みだしたおよっしー様には、美雪は一段上の感情を持っている。そして、およっしー様に美月の随行支者を命じられてからは、美月にもおよっしー様に次ぐ思い入れを持っている。

ただ、残念なことに、およっしー様は美雪に対して、それほど思い入れがないようだった。コールがかかることは滅多になく、ギルド迷宮の中や居住区の中で姿を見かけたとしても、特に反応はない。それは相手が美雪だからではなく、支者全員に対してそういう態度だったので、そういう設定であることを受け入れていた。だが、のりのっ様とブリュンヒルデの関係を思い出すと、うらやましい感情が湧いてくる。そんな感情を覚えるのも今日からの

変化の一つだ。
美月は、およっしー様ほど冷たくはなかった。随行中の指示は簡潔でそっけないものが多かったが、それでも、ごくたまに指示以外の話をしたこともある。
「苦労して作ったアイテムのできが悪かった」残念だったね。次、がんばって。「ちっ。あの敵、強すぎだよ」私が殲滅するから、心配しないで。「あぁあ、明日の会議。気が重いな」元気出して、美月ならうまくやれるよ。
美月にしたら、独り言の場に美雪がいただけのことかもしれない。会話にしても、対応にしても、美月は美雪を物としてしか思っていないようなところがあった。だから美月は美雪が傷つくとは思っていないだろう。物は傷ついたりしないのだから。
美雪はそんなことも、それはそういうものとして単純にすべて受け入れていた。昨日までは。だが今はそこに『何故』が浮かんでくる。きっとこれは異世界転移の影響なのだろう。
「美雪姉さま、大丈夫？」
物思いに沈んでいる美雪に美風も声をかけてくる。その声で、美雪は今すべきことを思い出す。
「大丈夫だって。ちょっと作戦考えてただけ。シュヤーマ、今度は新しい四位の火魔法を一回投げて。それが終わったら…。三位は人形でも撃てるよね」
「うん」
「人形は古い魔法も新しい魔法も撃てるんだっけ」
「うん。撃てるよ」
「じゃあ、三位以下はシュヤーマのＭＰ減らすことはないね。人形で私に向かって古い三位と新しい三位を一発ずつ。それが終わったら防御を調べたいから、人形で二位と一位をそれぞれ新旧で十発ずつ私に投げて。シュヤーマは、四位を一発撃ったら一旦イェマラジャのとこ戻っていいや。頼みたいことができたら、また呼ぶかもしれないけど」
「攻撃受けるの、美雪姉さまばっかりじゃない。私もかわるよ」
「ありがとう、夜美風。でも、ダメージ量は装備でも変わっちゃうから、私のが判りやすいでしょ。それに二位以下は私のスキルで完全防御できるし」
「でも…」
「じゃあ、ＨＰの減少量の測量は二人に任せるよ。私は立ってるだけにするから。それと、防御魔法かけての四位以上の完全防御調査も夜美風と夜美花にお願いするよ」
四位以上と聞いて、美花の顔が引きつる。それを見て、美雪は意地悪そうに笑いかける。
「四位の魔法。怖いの？」
一位の魔法など子供だましに過ぎない。高位の冒険者なら、たいてい完全防御のスキルを持っている。魔法が当たるとチクッとするものの、そんなことは蚊に刺されたぐらいでしかない。

「姉さま！　後ろ！」

美花の叫び声と背後からの殺気に、一位の火魔法を受けながらも、また物思いに沈んでいた美雪は、パッと前に飛びのいて身を半転させる。その美雪の目には槍を水平に構えて飛びかかってくる二匹の狼人の姿が映る。

「あ、太狼、次狼。シム調査に…」

「「二本槍交差刺《うわんっ》」」

狼人が太狼次狼と判り、気を抜く美雪に向かって、二匹は殺気を弱めず、二本槍交差刺《クロス・ピアース》を仕掛けてくる。と、美雪の周りがスローモーションに変わる。美雪がレベル九十一になったとき修得した達人スキルが発動したのだ。

狼人がゆっくりと空を駆けるように美雪に飛びかかり、それと同時に握っている槍を突き出す。

「がんばってるなぁ。でも、シムモードなんだから、そんなに真剣になんないでよ」

美雪は笑いながらつぶやくが、時間軸がずれている太狼次狼にその言葉は届かない。達人スキルの熟練度が上がると、こちらの言葉も、向うの言葉も『聞こえる』ようになるのだが、美雪の達人スキルはその熟練度に達していない。

達人スキルが発動した美雪は左足で背後に跳び、右足を後ろに伸ばして着地に備える。それと同時に向かって右側から美雪の左腹に向かって伸びてくる次狼の槍を右手でがっちりとつかむ。そして、同じように美雪の右腹を狙う太狼の槍を左手でつかもうとしたとき。検証調査のためにセットしていた訓練用ダミー人形の放った一位火魔法が、さっきまで美雪のいた場所、まさに今、美雪が左手でつかもうとした太狼の槍のあたりを通過する。

美雪は一位の火魔法に対して完全防御できるスキルを持っている。たとえ、あたったとしても、一切のダメージは受けない。もし防御できないとしても、美雪ほどの総合レベルであれば、受けるダメージは全ＨＰの一パーセント未満だ。まったく怖れる必要はない。

それでも、戦闘モードの美雪の左手は火魔法をよけてしまう。それは防衛本能として正しい動きだ。

だが。

火魔法をよけたことによって美雪の左手が槍をつかむのが一瞬遅れる。スルーされた火魔法はそのまま進み、次狼の腕にあたる。太狼の槍は美雪の右腹にぶつかる。腕に火魔法を受けた次狼は槍から手を離す。右腹の槍は美雪のシャツを切り裂いていく。次狼の手から離れた左腹の槍は、美雪の右手が支点となり、次狼の手の側が力点となる。その結果、槍先は美雪の腹に向かって円弧を描いていく。右腹の槍は服を突き抜け、美雪の腹をえぐる。左腹の槍は美雪のシャツを切り、美雪の腹に軽い切り傷を付けた後、放り投げられる。それらすべてがスローモーションで展開される。

シミュレーションモードは所有する迷宮の耐久度を検証するときに使用する戦闘モードだ。シミュレーションモードでの戦闘は実ダメージを受けない。すべては数値としてシミュレートされる。ダメージを受けたと判断さ

れれば数値上のＨＰが減る。そして、数値上のＨＰがゼロになると、死亡したものとみなされる。攻略途中で使用するアイテムも実際には消費されず、数値上なくなったことになるだけだ。もちろん、ダメージやアイテム使用数だけが数値になっているだけではない。得た経験値もドロップ入手品も、数値上の取得でしかない。すべてはシミュレーションが終わったときになかったことにされる。

だから、太狼次狼の攻撃もダメージを受けることがないはずだ。すべては数値でやり取りされ、痛みなど感じないはずだ。だから、この右腹からふき出している血しぶきも、ねじれるような痛みも、現実ではなく、美雪の妄想でしかないはずだ。太狼次狼がシミュレーションモードで戦闘を仕掛けてきているのならば。実戦モードではないならば。

「氷結《フリーズ》」

美雪は呪文を叫ぶ。背後で美花も何かを叫んでいるようだが、美雪の耳には間のびして聞こえ、何を言っているのか判らない。

右腹の槍は徐々に氷に覆われていく。ふき出していた血も突き刺さった槍先が腹の中で氷結していくにつれ止まっていく。

この傷は幻だ。太狼次狼が実戦モードを使ったのではない限り。美月ははっきりとシミュレーションモードで戦うことを指示していた。狼人は美月の眷族であるから、美月に逆らうことはできない。だから、この痛みは幻だ。

バボッという音がして美雪の横を空気の塊が通り過ぎる。美雪は腹から槍を引き抜く。次狼が突風によって岩壁に叩きつけられる。美雪が左手でつかんでいる槍は先から根元まで凍りつき、その槍を握っている太狼の腕までも凍らせようとしている。ピシュッ、ピシュという音がして、次狼の左肩と左腕が矢によって岩壁に縫いつけられる。それらがすべてスローモーションで展開される。

すべては幻だ。幻でなければならない。美月の眷族は美月以外の者が指示を与えることはできない。主人の命《めい》に反する命令を誰かから与えられても、眷属はそれを無視する。

美雪はつかんでた槍を力まかせにへし折る。その反動で、太狼は横倒しに倒れる。

太狼次狼は実戦モードにできない。実戦モードでなければ、美雪が傷を負うことはない。

「氷結」

美雪が再び氷魔法を唱える。横倒しになった太狼が地面に凍りついていく。

太狼次狼に実戦モードで戦うことを指示できるのは彼らの主人の美月だけだ。美月が望まない限り美雪が痛みを負うことはない。だから、この痛みは幻だ。幻でなければならない。

「ぐおー」

美雪が痛みに耐えるように咆哮する。そして地面に凍りついた太狼に馬乗りになり、ボディに拳を打ち込んでいく。一発、二発、三発。太狼は身動きできずにただ殴られている。一方、岩壁に縫いつけられた次狼は自由にな

ろうとして、動く右手で左腕に刺さった矢をひきぬく。ひきぬくとき、やじりのかえしによって、広範囲に肉がそがれ、それと同時にまるで岩に赤の扇を描くように血が飛び散る。

美雪は再び咆哮する。いつの間にか美雪の両手には白く輝くナイフが握られている。美雪が両手同時にナイフを振りかざす。次狼がひきぬいた矢を美雪に向かって投げつける。すべてはスローモーションだ。

美雪のナイフが太狼の左右の腹に刺さったとき、美雪の横を黒い影が通り過ぎた。美雪のスローモーションをもってしても、正体が判明しないほど速く動くそれは、美雪めざして飛ぶ矢を叩き落すと、そのまま次狼に向かって突進する。

美雪はそれに気づいていないのか、気づいていても気を配る余裕がないのか、そちらには目もくれない。太狼の腹にナイフを突き立てたまま、両腕を大きく広げ、ナイフで腹を引き裂いていく。そしてもう一度、両手を振り上げ、太狼の腹を、胸を、肩を、腕をめった刺しにする。

血をまき散らし、内臓がとびだした太狼が「きゃぃーん」と叫ぶと、それの叫びと同時に姿が消える。美雪は太狼が消えた後も太狼のいた位置にナイフをつきたて続ける。

「美雪姉さま!」美花の叫ぶ声と、「美月お姉さま!」弓を構えた美風の叫ぶ声が交差する。美花は美雪に駆け寄るが、狂ったように地面を斬りつける美雪を前に何もできない。

ポキーン。

大きな音が響き渡る。その音で我に返った美雪は、その時になって、すでに太狼がいないことと、スローモーションが終わっていることに気がついた。

音がした方向を美雪と美花が見ると、そこには岩壁に張りついたまま泡を吹いている次狼が見える。そして、その次狼の右腕に、逆さになってしがみつき、腕十字を極めている美月がいた。次狼の全身から力が抜けると、美月は頭からズルッと地面に落ちていく。美月がしがみついていた次狼の右腕はありえない方向に曲がっていて。肘の途中から白い骨が飛び出している。

美月は落ちた時にぶつけた頭をなでながら立ち上がると、美雪に近づいてくる。

「美風、何があったの。説明して」

美風は美月は発した言葉が聞こえないかのように、放心した表情で美月と美雪を見ている。

「美風、説明して。美花は美雪にヒール」

ハッとして弓をおろす美風を横目に見ながら、美雪は立ち上がり、美月の正面に立つ。

「何故？　なんで？」

美月は不思議そうな目で美雪を見る。それが、美雪の目には、美月がとぼけているように見えてしまう。

「なんで？　なんで、実戦モードに変えさせたの？　そんなにも。美月はそ

んなにも私を傷つけたいの」
美月は急に足を止める。そして、美雪から目をそらす。
「夜美花。美雪にヒール」
そういうと、くるっと後ろを向き、次狼の方へ戻っていく。
「急に太狼次狼が現れて、美雪姉さまを攻撃したんです」
美風が美月の背中に向かって声をかける。
「いい。次狼から直接聞く」
美月は振り返りもせずに、美風の説明を拒否した。

強制離脱

自己嫌悪だ。いい気になっていたのを見透かされた気分だ。
裏山の確認中、両脇を真嶋まなかと赤木亜莉朱にかかえられ、空を飛んでいたときに、夜美風からパニック気味のメッセージを受けた。
美風は「美雪が、美雪姉さまが」というだけで、要領を得ない。空の上では何もできないし、状況も判らない。とりあえず、目の前に見えた崖の途中にある少し開けた森のような場所に降りるよう、まなかに指示を出した。
半ば飛び降りるように地面に足をつけると、すぐさま美雪をコールするが、戦闘中と表示されコールできない。さらに、美風にメッセージを送るもののこちらも戦闘中でスプールされてしまう。美雪たちがいるのは第二階層だろうから、魔法少女たちを引き連れて、第二階層の入り口にジャンプしようとするが、その時、何かが美月の中ではじけ、そして美月は森の中を走りだした。

トータルで考えると、よっしーは運のいい人生を歩んでいる。小さい日常の運は、ほぼなく、宝くじも会社の忘年会のビンゴ大会も大したものは当たったことがない。だが、ここぞという時は、運が味方してくれている。
自転車に乗っていて車にひかれそうになったときも、直前の猫の飛び出しで、自転車と車の双方が急ブレーキをかけ、結果タイヤとタイヤがぶつかる程度で済んだ。
大学入試の朝も、ほぼ同時に入ってきた山手線と京浜東北線で、人の込み具合から、やや遅れて入ってきた山手線を選んだのだが、乗換駅直前で京浜東北線は急停車。乗っていた山手線はかろうじて入線。後で話を聞くと、京浜東北線はそのまま四十五分間、動かなかったそうだ。
大学二年のころ合コンで知り合った子との初デートの日、朝からの急な発熱でドタキャン。しきり直しで予定を立て直した日は、彼女の側の親類に不幸があり、キャンセル。その後は自然消滅となったのだが、大学卒業後、風の噂にその彼女が今の彼氏にストーカーまがいのことをしていると聞いた。
小さなところでは運が悪いことが多くある。しかし、重要なポイントではよい結果をもたらしてくれる。よっしー自身はそう信じている。

今回、迷宮の入り口に戻らず、崖の中腹に降りたことも。何かの呼び掛ける声に従い森の中を走り抜けたことも。そして、その先で狼人と戦闘している美雪を見つけたときも、いい運に守られたと信じていた。ここでさっそうと現れ、美雪を助ければ、美雪は美月に感謝してくれるに違いない。

岩を背にした狼人が美雪に向かって矢を投げる。ここで、美雪を守るんだ。矢よりも速く走れ。美月は獣のように四つ足で走り出す。美雪の横を走り抜け、矢を叩き落す。「ありがとう、美月」そういって微笑む美雪の顔が頭の中に浮かぶ。実際のところ、こんなへなちょこの矢が当たったとしても、美雪はびくともしないだろう。やぶ蚊に刺されたぐらいにしか思わないはずだ。それでも、美雪は微笑んでくれるはずだ。

美月は、もう一本の矢にも手をかけようとしている狼人にとりつく。飛びついた先がちょうど右腕だった。ふと、子供のころに遊んだプロレス技を思い出した美月が、そのまま狼人の腕をとり、頭を下にぶらさがる。きれいに腕十字固めが極まる。それは美月の長身のおかげか、鍛えられた身体能力のおかげだろうか。逆さまになり頭に血がのぼってくるにつれ、高揚感も増してくる。『俺ってスゲェ』状態である。

技をかけている最中に、相手にしている狼人が野生のモンスターではなく、次狼であることに気がつくが、ハイになっている美月は、攻撃をやめない。タップされないのをいいことに、さらに力を入れていく。

ポキーン。

狼人の力が抜け、それにつられて地面に滑り落ちるが、格好をつけて立ち上がり、美雪に近寄る。美雪のＨＰを確認し、二割弱も減っていることを茶化そうとしたとき。

「美月はそんなに私のことを傷つけたいのっ」

美月にはその流れが判らない。喜んでくれると思っていたところで、何故非難されてしまうのか。美花や美風に説明を求めるように顔を向けるが、二人も美月から顔をそらしてしまう。それは、美花も美風も美月が非難されてしかるべきと考えている証拠だ。

美月は後ろを振り返る。そこには泡を吹いている次狼がいる。ということは、さっきまで美雪が戦っていた相手は太狼だろう。そして、美雪が血だらけで傷を負っているということは、太狼次狼が実戦モードで美雪に戦いを挑んだということだ。美月の眷族が美雪に実戦をしかける。それは美月が美雪を傷つけたととらえられてもしかたがない。

それなのに美月はヒーロー気取りでへらへらと美雪に接しようとした。

「何、ザコにやられてんのよ。それでも階層統括？」そんな感じで美雪に近寄った。

もちろん美月はそんなことは思っていない。けれども、そう見えてしまうのは事実だ。それに気がつかなかったのは美月の落ち度だ。特に、今の美雪の心情では、美月がわざと美雪を傷つけたと考えるほうが自然だ。

美月は次狼に真意をただそうと、次狼の元へ戻る。

ぐっ。

振り上げられた美月の足をのどを押し付けられ、次狼がうめき声をあげる。
「コール、夜美花」
やつあたりに似た近距離コールに美花は素直に応じ、三メートルをジャンプして美月の横に立つ。
「はい」
「こいつ、誰かに精神支配されてないか調べて」
美花がぶつぶつと何かを唱える。そして、のぞき込むように次狼の目を見る。
「私の調べでも、精神に異常はないようです」
私の調べで『も』。うまい物の言いようだ。最高ランクの情報系スキルを持った美月が調べていない訳がないだろうとの判断、もしくは嫌味だ。
「次狼。答えて。何故、シムモードにしなかった。何故、攻略モードで美雪を襲った」
次狼はもごもごと何か言おうとするが、美月の足にのどを押さえられたままで、言葉にならない。
「美月お姉さま。これでは次狼は話せないよ」
「メッセージを使え。私と美花にメッセージで答えろ」
美月は足に力をこめる。次狼の顔は苦痛でさらに歪む。しばらくの間ののち、美月の左手が左のこめかみに添えられる。そして、美月と美花が顔を見合い、首をかしげる。
「美花、次狼を魅了して、同じ質問で自白させて」
「あ、うん。魅了《チャーム》」
一瞬、次狼が桃色に輝く。そして、その目がトロンとしてくる。
「自白強要《フォースド・コンフェッション》」
美花のさらなる呪文で、次狼の目が桃色に濁る。
「次狼。私の質問に答えなさい」
次狼は『うっ』と唸る。美花がちらっと美月を見、美月はそれにこたえて、次狼ののどをつぶしていた足をおろす。
「何故、シムモードにしなかった」
次狼はつぶれた声で、わんうぉわんと答える。
モンスター種や獣種の中には、人語を話さない者も多い。ロデムーのように人語を話すか、太狼次狼のように人語を話さないかは設定しだいだ。たとえ人語を話さなくても、翻訳フィルターのおかげで意味は理解できる。
美花の質問への答えの「わんうぉわん」は「シムモードにした」だ。
「シムモードでは傷は負わない。美雪姉さまは傷を負った。何故、シムモードにしなかった」
「わんうぉわん。うわん、わんうぉわん…ちゃんとシムモードにしたけど、第一階層のＭＯＢも美雪も怪我をした。ＭＯＢは普通に死んでった。僕は悪くない。ちゃんとシムモードにした。シムモードだったけど、僕もＭＯＢにやられて怪我をした。美風に弓で射られて痛かった。美月様に腕を折られて死にそうだ。僕は悪くない。ちゃんとシムモードにした。僕は絶対悪くない。

…わんうぉわん」
「シムモードにしろって云ったのは、仲間を傷つけないためだろうが。そんなことも判らないのか。判っていて美雪を、ＭＯＢを攻撃したのかっ。どっちだ！」
目をトロンとさせた次狼は答えない。
「仲間が傷つくと判っていて、何故攻撃をつづけた」
美花が美月の質問をくりかえす。
「僕は悪くない。わんうぉわん」
「お前も悪いんだよ！」
美月が次狼にアッパーカットをくらわす。次狼はキャイーンと叫ぶと、ＨＰが一割を下回ったため、強制離脱アイテムが作動し、その場から消え失せた。
「本当のことを話してた？」
「うん。次狼の持ってるスキルだと、私への自白でウソはつけないよ」
「そっか。ありがとう」
次狼が悪くないとは言わない。だが今回の場合、一番悪いのは美月だ。次狼の自白が真実なら、次狼は美月の命令に従っただけだ。優秀な部下なら、上司の指示の真意をくみ取り、指示が真意と合わないときは、臨機応変に対応するか、その場で問題点を上司に報告するだろう。真意をくみ取れない部下やくみ取っても問題を無視し指示通りにしか物事を進めない部下はレベルの低い部下だが、それを以って部下の側だけに責任を押し付けるのは間違っている。
上からの命令指示は明確に出すべきだ。そして、その明確さは指示を受ける側に合わせるべきなのだ。部下の能力がどの程度かの把握は、上に立つ者は必ずしておかなければならない。能力を把握した上で、それに見合った作業や指示を与えなければならない。それがマネージメントだ。指示を与えられた部下が、期待値を得ることができなかったのなら、それは指示を出した側の失敗だ。部下の能力を超えた作業を指示してしまったか、指示が明確に伝わっていなかったかだ。どちらも部下のミスではない。上司のミスだ。期待値を得られなかった部下の責任範囲は、能力が足りないことと、それを上司に指摘できなかったことだけだ。
（ブリュンヒルデ、今どこ）
（美月様、申し訳ありません）
美月からブリュンヒルデへのメッセージと、ブリュンヒルデから美月へのメッセージが交差する。
（こちら、第一階層の一部屋めです。申し訳ありません。ＭＯＢを斃してしまいました）
一安心だ。ブリュンヒルデは連絡してきた。
（もしかして、シムモードが効かない？）
（はい。先程も美月様にそのことでメッセージを送ったのですが、戦闘中とのことで、はじかれてしまいました。美月様の戦闘もそれに関わりのあることだったのでしょうか）

（うん。まあそんなところ）
（お怪我はありませんか）
（私はね）
よくできた支者だ。美月を気遣うことも忘れない。のりのさんの教育がよかったのかな、と美月は自分の眷族との差に、さらに自己嫌悪をつのらせる。
（で、シムモードが効かないって、どういうこと？　こっちは要領が得なくって、意味判んない）
（シミュレーションモードで迷宮に入ったのですが、ＭＯＢと戦ったところ、通常の戦闘となってしまいました。ＭＯＢを一撃で斃してしまいましたので、回復させることもできず。誠に申し訳ありません）
たしかに乙女たちなら一部屋めのＭＯＢなど瞬殺だろう。
（斃したＭＯＢ、どうなった？）
（つい先程、消えました。生き返りのアイテムを使ったほうがよろしかったでしょうか）
ＭＯＢ相手に復活アイテムを使うのはありえない。ＭＯＢは所詮使い捨てのキャラクターだ。そもそもの話、ＭＯＢに復活アイテムの効果があるのか判らない。
（ブリュンヒルデは復活アイテム持ってるんだ）
（はい。緊急用に二つほど）
（ま、消えちゃったんならいまさらどうもできないし。私でも復活しなかったと思うよ。で、何匹死んだの）
（二体です。残りの二体はかろうじてＨＰが残っていましたので、ヒールをかけました）
（ブリュンヒルデはＭＯＢと話せる？）
（はい。当然話せます）
（いったん外に出ると、ＭＯＢって数量回復するよね）
（はい、当然そうなります）
ギルド所属のキャラクター間では意思疎通が可能なのも、ＭＯＢが侵入パーティごとに復活するのも当然の話だ。慎重になりすぎているのか。指示の明確化にこだわるため、不要な確認が増えている。
「私は莫迦だ」
頭の中だけでつぶやいたつもりが、声に漏れていたようで、隣に立っていた美花が不思議そうに美月を見る。ふと周りを見ると、いつの間にかまなかも亜莉朱もやってきて、美雪と並んでいる。
「メッセージ。ブリュンヒルデ」
美月はわざと声に出し、ブリュンヒルデとメッセージをやり取りしていることをアピールする。
（いったん外に出て。もう一度やり直し。次は誰も傷つけないで。その方法はブリュンヒルデにまかせる。『絶対』の自信がないときは調査中止でかまわない。ついでに一部屋めでちゃんと規定数のＭＯＢが出るか確認しといて。判った？）

（調査とは、わたしたちでどこまで迷宮を攻略できるかの調査でよろしいですね）
（もちろん）
（ＭＯＢの数の確認と、何者も傷つけないのが絶対条件であること、承知しました。手法は検討します。調査終了時、もしくは中止決定時に連絡いたしましょうか）
（そうだね。じゃ、よろしく）
（はい）
ブリュンヒルデは太狼次狼と違って優秀だ。それは総合レベル百と総合レベル十五の差なのか、主人の教育の差なのかは判らないが。ブリュンヒルデには重要なポイントさえ伝えておけば、うまくやってくれるだろう。逆にうまくやってくれなければ困る。この異世界への転移という状況がいつまで続くのか判らないが、すべてを美月が一つ一つ手取り足取りではやってられない。
美月は後ろをふりむく。
「美風、空に向かって矢を射ったら刺さる？」
「うーん。刺さるか、ぶつかって落ちるかは判らないよ」
「まなか。あなたの意見は？」
「わたしには、美月様と夜美風が、何のこと話しているのか、わかんない」
美風とまなかは共に不思議そうに互いを見ている。
「美風、射ってみて」
美風は弓を構え、空に向かって矢を射る。矢は暮れかかった空に消えていく。
「え？」
美風と美雪は矢の消えていった先を見続けている。おそらく、美月の横の美花も同じだろう。まなかと亜莉朱はさらに不思議そうな顔をする。
「まなか。ここどこ？」
「裏山だけど」
「美風、まなかはそう云ってるけど、違うよね。答えを教えてあげて」
「うん。…まなかちゃん、ここは第二階層の薬草エリアだよ」
闇面の迷宮は入り口だけが地上にあり、他はすべて地下にある。それはシステムのスペース的な関係なのだろう。迷宮内では空があるように見える場所も多いが、それらはすべて偽物だ。天井に外の風景を投影しているにすぎない。見た目は地上だが、天井と壁がある。天井もさほど高くはない。矢を射れば軽々と届くはずだ。
「まなかと美風の間には意見の相違があるようだね。みんなで話し合って統一見解を出して。結論は判っているから連絡の必要はないよ。で、結論が出たら、まなかたちはまず周辺調査に戻って。美雪たちは、…矢は落ちてこなかったよね。それは天井がやたらと高いか、天井がないってこと。迷宮内のどこがそうなっているか調べて。魔法の効力調査はそれが終わってから。それとも、魔法調査はもう終わってる？」
美月が美雪を見る。美雪も美月を見る。二人は目を離さない。

「まだ、もう少し」
「調査はまずはここ第二階層…。あー、もういいや」
支者のできることは支者の自主性に任せることに決めたのを、美月は思い出す。
「調査は第五階層を除く全階層。誰がどこを調べるかは階層統括で話し合って決めて。第五階層の居住区の調査はジェスターとロデムーにあなたたちから説明して、誰かにやらせて」
「はい」「うん」
美雪とまなかが返事をする。その間も美月と美雪の視線は離れない。
「私はしばらく自室にいるから。そのあとは工房かな。私に連絡が必要だと思ったら、そのときはメッセージを送って。自分たちでどうにかなると思ったら、どうにかして」
「はい」「うん」
ここで美月は一瞬目をそらす。そして、すぐにまた美雪に目を戻す。
「美雪。今、私が何を云っても、それは言い訳になっちゃうから、何も云わない。だけど、美雪とは話したい。私の気持ちが落ちついたら時間をちょうだい」
「え？」
「じゃ」
美月は何か言いたげな美雪を残し、ジャンプアウトした。

おっぱい星人

自室に戻り自らを慰める行為をする。変態メイドたちと変態トリオを結成する。白石支津香に対し本日二回目の強制わいせつ行為を行う。一時的な快楽は瞬発性を以って発動されるが、長続きはしない。
工房で新しい魔法の調査をする。新しいアイテムのレシピを発見する。生産的な活動での成功がもたらす快楽には持続性があるが、いつも快楽をもたらす成功が保証されている訳ではない。先ほど工房で起きたような新アイテム、ＭＰポーションの作成など、そうそう期待できるものではないのだ。
新アイテム、新魔法、新スキル。ミドとは異なるこの世界が少しずつ判ってくる。新魔法の「素材化」や素材化の鍛錬中に美月のリストに加わった「結晶化」などはこの世界の魔法ではなく互換のための魔法にもみえるが。魔法がミドの魔法と統合された新しい魔法のどちらでも使用できるのも互換性のためだろう。基本はこの世界の法則に従うことになるが、既得のものはミドの性能や能力を引き継ぐといった感じだ。
とすれば、ＮＰＣだった支者がＰＣと同等の動きをしているのは、この世界にＮＰＣは存在せず、上位互換としてＰＣと同じ能力を持ったということなのだろうか。そもそもＮＰＣが存在する実世界はないだろう。もしかするとアンドロイドは支者の代わりたり得るかもしれない。が、アンドロイドと魔法が同居する世界は考えにくい。魔法世界ではオートマタやホルムン

クスが似合うだろう。オートマタやホルムンクスは自らの意志を持っているのだろうか。ファンタシー系の小説やアニメには、さほど詳しくない美月には判らない。それとも、単にこの世界にはアンドロイドもオートマタもホルムンクスも存在しないだけなのか。こうしてギルド迷宮の中にとどまっている限りは答えはやってこないだろう。

支者はＰＣと同じだ。ＭＯＢもＰＣと同じなのだろうか。美月はこめかみをクリックする。あとでブリュンヒルデの報告で確認してみよう。

アイテム生成は無心になれる。素材を吟味し、作成中は作成に集中する。これが高品質のアイテムを作成する秘訣だ。完成品の品質はランダム要素に左右される部分も多いが。集中して素材成分を調べたり、集中してアイテム作成中の手ブレをなくしたりしていると、他の余計なことを考えなくなる。

一度考えるのをやめてしまうと頭の中がリセットされ、再び考え出したとき冷静に考えることができるようになったりする。この世界のことや支者の変化を分析できるようになったのも、工房に来てアイテム作成に没頭したことがいい影響を与えている。

今までに判明している点ではこの世界でＮＰＣとＰＣに違いはない。支者に絶対服従規定や「設定」は残っているが、これは互換性のためか、それとも形骸化して存在しているだけか判らない。先の美雪の言動からも絶対服従規定は危ういようにも見える。支者がこれだけ「人間的」に動くのであれば、美月も支者をシステムデータとしてではなく、人間として扱うべきなのかもしれない。いや、支者の全てが全て人間種ではないから「人間として」という表現は当てはまらないが、意味合いとしてはそういうことだ。

朱大人、バイシャジャ、オッチャの三名と素材化、結晶化の繰り返しを行っていた美月が「グルウゥ」と吠える。いきなりの咆哮に朱大人とオッチャがびっくりしている。朱大人はオークだ。見た目もそうだし、情報ステータスにもそう出ている。オッチャは見た目もステータスもノームだ。バイシャジャの見た目はオーガっぽくないが、それは前からで、ステータスにはちゃんとオーガと表示されている。そのバイシャジャの「いかがされましたか」の問いに、美月は「ちょっと吠えたくなっただけ」と苦笑いを返す。

この世界に亜人は存在する。ワールド統計情報も人間種、亜人種、モンスター種に分かれて個体数が表示されている。それを信じるなら、人間もモンスターもいるのだろう。そして、魔法もある。ＨＰポーションは単なる傷薬に相当するのかもしれないが、ＭＰポーションは傷薬では説明できない。それが存在することは魔法の素となるＭＰの概念が存在することの証明ではないか。おそらく、ミドとは微妙に異なるＭＰがこの世界には存在するのだろう。

何気に使ってしまったが、ＨＰポーションは期待値通りの効果が得られた。復活アイテムも期待値通りの効果があるのだろうか。こちらはおいそれとは使う訳にはいかない。実験のために誰かを殺し、もし効果がなかったら、その損失は大きすぎる。

支者を完全個体として扱う。生死にかかわるような事態は避ける。その二つは決定事項だ。その上で今後どうするか。優先すべきはみんなの前で宣言した通り「調査」でいいだろう。最終目的は、ブリュンヒルデには悪いが、やはり元の世界への帰還になるだろう。

かすかな期待を抱いているのは「寝て起きたら、自分の部屋でした」のパターンだ。もし、帰還までの期間が「ある程度」の時間になるなら、まずは美雪に謝ったほうがいい。美雪の不満をひきがねに支者たちに反乱を起こされてしまったら、美月に勝ち目はない。

続いてすべきは、組織の再編成だ。この世界で暮らすなら、全員がずっとこのまま迷宮内にとどまる訳にはいかない。外へ出る必要が出てくるだろう。であれば、美月一人でこの世界に出ていくより、支者たちを引き連れ、この世界と付き合ったほうが、断然有利だ。ただ、美月に数十名をまとめ上げる能力はない。

実世界でよっしーは、すでに中堅と呼ばれる年齢層に入りかけているが、仕事上は下のポジションだった。リーダーをした一回も、それは総員二人の小さな仕事で、そのときもそれだけの人数にもかかわらず、うまくまとめられたとは言えない結果だった。サブリーダーの経験は数回ある。そのときも同じような結果か、サブリーダーとは名ばかりで、チームのまとめはリーダー任せだった。

頑張っても美月がリーダーをとれるのは数名程度のグループだ。であれば、その数名にのみ指示を出し、それより下は、その数名が頭になってグループ管理する形式にしなければならない。今の組織編成でも、それなりの形になっているが、今はすべての判断を美月が下さなければいけないようになってしまっている。

組織を事業部単位に分け、それぞれの長がその事業部の行動決定権を持つ。美月は事業部長に対して全体方針を告げるだけとする。下に丸投げだが上位の支者たちの管理能力は美月より数段高い。

「そうだよ。だって私は君主レベル五だけど、ブリュンヒルデもイェマラジャも君主レベルは十じゃない」

言うつもりのない言葉が独り言となって声に出てしまったようで、バイシャジャが心配そうに美月の顔を覗きこんでいる。

「何か心配事でもございますか。拙者でよろしければお話をお聞かせください」

気障でもなく、自然体でそのセリフを言う。こういうのを大人の魅力というのだろう。美月ははにかんでみせる。

「うん。もうちょっと自分の中で整理がついたらね。そしたら相談にのってもらうね」

大人の魅力のバイシャジャに対抗して、可愛い系の少女を装ってみたのだが、美月の容姿では多少無理があったかもしれない。

「予定にない料理、作っていいブヒか。クリスタル使っていいブヒか」

朱大人が前後の脈絡なく、関係のない話をしてくる。きっと、先ほどの新アイテム作成というバイシャジャの手柄に対抗して、自分も新料理でも発

見したくなったのだろう。
「いいよ。数少ない種類のクリスタルはそんなに使わないでね。この世界でどんなクリスタルが採れるのかまだ判んないから」
「大丈夫ブヒ。ちょっとしか使わないブヒ」
自慢げに胸をたたく朱大人の仕草を見て、美月はまた苦笑いをしてしまう。そんな簡単に新しいレシピは発見できないだろう。

丸投げが悪いとは思わない。美月はまた組織について考えだす。能力がないものが出しゃばって失敗するより、丸投げして成功した方がよっぽどいい。

企業の組織形態がピラミッド型の命令系統を作り、段階的にトップの意思を通達していく形が多いのは、何百人もの人間を一人で管理できる者などいないからに違いない。ただ、そのように完全縦割りの組織だと横からの圧力に弱くなってしまうことがある。縦割りを主としながらも横の連携を作る。それが理想だが、どうすればいいか。美月には想像もつかない。いざとなれば、組織図の作成もジェスターあたりに丸投げしてしまえばいいだろう。なにしろ、ジェスターは執事なのだから。

…執事。執事の仕事って何だろう。ふと、美月は考える。小説やドラマの中で「執事」を見たことはある。だが実際に執事に会ったことはない。イメージとして、常に主人に付き添い、雑務をこなすのが仕事と思ってるのだが、それであっているのだろうか。であれば、秘書とどう違うのか。秘書は組織図を作ったりするのか。全く判らない。後でジェスターに聞いてみよう。と、美月は左こめかみをクリックしながら頭の中にメモを取る。
「美月様、飲むといいブヒ」
物思いに沈んでいる美月に朱大人が小さなガラスの盃をさし出す。中にはドロッとした赤茶のいかにも怪しげな液体が入っている。
「何？　これも新しいポーション？」
「ブヒはポーションは作れないブヒ。これはゲンキデルンYブヒ。これ飲んで元気を出すブヒ」
そう言って、朱大人が美月に盃を押しつけてくる。ゲンキデルンはミドの中の栄養ドリンクだ。末尾の英字はCとDとVとYの四種類があり、Yがシリーズの中で最上位の効能がある八位の飲み物になっている。ゲンキデルンの食効は一時的なHP最大値の増加とスタミナステータスの増加だ。
今まで美月は「Y」は飲んだことがない。HPやスタミナとはあまり関係ない生産系のキャラクターということもある。だが、戦闘系のよっしーも飲んでいなかった。理由はその素材にある。CやDはジュースと同じような素材しか使用しないが、Yは違う。茶葉や薬草の他に、鶏の生き血、ケンタウロスの睾丸、エルフの生肝などが含まれている。ミドの料理品は、しょせんはデータクリスタルから作られるデータでしかないのだが、素材の名前を知っていると、どうしても口にしたくはなくなってしまう。
「それを飲むと元気になるブヒ」
盃を手に取ったまま、飲むのをためらっている美月に朱大人が追い打ち

をかける。美月の独り言を案じた朱大人が元気づけようとしてくれている気持ちはよく判るし、涙が出るほどありがたい。美月は右目も閉じると、ゲンキデルンYを一気にぐっと飲みほした。

ドロッとした熱い液体が喉をつたわって、胃に落ちていく。それと同時に体も火照ってくる。閉じた目から涙がこぼれ落ちたのは、強烈な味と臭いのせいなのか、朱大人の優しさのせいなのか。

「ありがとう。元気でてきたよ。すごいね『Y』。はじめて飲んだけど、即効だね。なんか体があつくなってきて、またエッチな気分になっちゃうよ」

「また？　エッチ？」

朱大人が驚いた顔で美月を見る。声が聞こえる範囲には男しかいない状況だったので、軽いスケベ話のつもりだったのだが、支者にとっては、この程度も驚きの発言なのだろうか。「エッチな気分」程度なら不適切フィルターも目こぼししそうだが。

「お求めでございましたら、拙者がお相手つかまつりましょうか」

バイシャジャが穏やかな優しい笑顔で美月を口説く。バイシャジャの言葉にさらにびっくりした朱大人があわてて「相手ならブヒがするブヒ」と息まく。

「何、気持ち悪いこと云ってんのよ。男の人となんて、する訳ないでしょ」

「おや？　美月様は同性愛者でございましたか」

「だから、同性愛者じゃないって…」

今はよっしーではなく美月だ。中身は男でも見た目は女だ。設定上も「女性」になっている。性愛対象が男性ではなく女性ならば、それは同性愛だ。先の朱大人の驚きにしても、女性がいきなり「エッチしたい」と言い出したことに対する反応なら、そんなにおかしい反応ではない。

この世界に転移した直後はすべてが受け入れられなかった。それでパニックを起こした。正気に返ったあとも、おっかなびっくり支者たちと接した。それが、多少の違和感はまだあるが、それでも支者を人間と同じように扱いはじめている。そして、異世界への転移という異常な事態も受け入れている。転移からまだ半日もたっていない。それなのに、もうこれである。きっとすぐに支者に対する違和感はなくなるだろう。そして、よっしーの意識もなくなり、美月としての自我に変わってしまうのだろうか。そうなったとき、美月の恋愛対象は女性のままなのだろうか。男性へと変わるのだろうか。

確かにバイシャジャは美月から見ても魅力的だ。ナイスミドルの女たらしだ。強引に誘われれば「はい」と言ってしまうかもしれない。そんな風に感じるのも、もう精神の美月化がはじまってるからかもしれない。朱大人に対しては、今はまったくその気にはなれないが、未来のことは判らない。

「うーん。何て云うか、私、今まで男性とそう云う関係になったことがないから。女性とだったらあるんだけど。うーん。そうだなぁ。将来のことは判んないけど、今は男性とそういう関係になる気はないかな。男性との行為もちょっと怖いし」

「優しくするブヒ」
「朱大人、そのくらいにしておきなさい。美月様に嫌われますよ」
「それは困るブヒ。嫌いにならないで欲しいブヒ」
「何、莫迦なこと云ってるの。そのくらいで嫌う訳ないじゃない。と云うか、今までみたいなどこか醒めた関係より、こう云う莫迦話を云い合える関係のが嬉しいよ。そうじゃない？」
「さようでございます」
「だから、これからはこの程度のエロ話で驚かないでよ」
朱大人は息を荒くしてブヒブヒと照れている。美月はじっとバイシャジャを見つめる。
「私は同性愛者なのかな。自分でも判らない。でもね、女性も男性も関係なく、闇面のみんなはみんな好きだよ。もし、強く云われたらそれが男性でもクラッときちゃうかもって思っちゃうし。今は…よく判んないや。判んないことがいっぱいで困っちゃうよ」
バイシャジャは穏やかな目で美月を見つめる。美月は照れた表情でバイシャジャの目を見続ける。バイシャジャがニコッと笑顔を返す。
「それで、美月様の悩みはどのようなものでございましょうか」
プロのプレイボーイだ。自我を強くもっていないと落ちてしまうだろう。美月は空を見上げた。
工房には空がある。実際に第五階層に位置しているため本物の空ではなく、外の空を投影しているにすぎないが。炉や井戸、かまど、調理台、調合台、護摩壇。それらの上には屋根がある。そこ以外のほとんどは露天で今は星空が広がっている。
「火矢《ファイアーアロー》！」
美月が魔法を唱えると美月の右手から、火の矢が空に向かって発射され、三メートルほどの高さで砕け散る。
「びっ、びっくりしたブヒ」
朱大人が目を丸くしている。さすがのバイシャジャも今回の奇行には驚いたようで、美月の顔と空に何回も視線を往復させている。
「朱大人。ポテチ作ってよ。それとコーラ。工房にいる人数分作って。できたら、みんなでいったん休憩にしよ」
「判ったブヒ」
朱大人はクリスタル袋を覗きこみ、いくつかのマジッククリスタルを取り出すと、調理台に向かった。
「あぶない、あぶない。本気でバイシャジャに惚れちゃうところだったよ。雰囲気のいいバーで今のセリフ云われたら、完全に落ちちゃってたね」
「それではこれからギルド部屋にまいりましょうか」
「この女ったらし」
美月が使える三位の火魔法は火炎壁《ファイアーウォール》だけだが、同じ三位の火矢の発動も確認できた。また、工房には天井があることも確認できた。

「ここには天井があるね」
「はい。地下でございますから」
「本当に地下？」
「美月様は迷宮の地図をご覧になったことはございませんか」
「…地図…。そうか地図か！　バイシャジャ、ありがとう。その手があることに気づかなかったよ」
「は？　はあ」
　美月は、首をかしげるバイシャジャを放置し、地形情報調査のスキルと地域情報を使って頭の中に迷宮の地図を作成する。美月の視界にかぶって表示された迷宮の三次元マップはほとんどが山の内部にあり、外に露出しているのは第二階層の薬草エリアの一部と、第二階層の山頂エリアの一部だけだった。
「なるほどね」
「悩みは解決いたしましたか」
　美月はちらっと朱大人を見る。朱大人は素材化の魔法でマジッククリスタルをジャガイモに変えている。美月は再び空を見る。
「やっぱ、想いなんてもんは通じないのかな」
　美月のつぶやきに似た声にバイシャジャは小首をかしげるが、何も言わず、ただ空を見上げる美月の横顔を見ている。
「昔の話なんだけどさ。そのとき私は五人グループのサブリーダーだったんだよ」
　美月は空を見続けている。
「ひどいプロジェクトでさ、休日出勤あたりまえ、深夜残業あたりまえって。みんな殺気だってて、ものすごく殺伐としてて。そんなんで、新人の一人が限界越えちゃったんだろうね。仕事中にブルブル震えだしちゃって。オーバーワークなのは判ってるから『休みな』って云ったんだけど『仕事が終わらないから』って。でもね、仕事中ずっと震えてるんだよ。課長に『休ませろ』って云っても、課長…リーダーは自分の保身から何もしないし。部長に『どうにかしないと危ない』って話してものらりくらりだし。でも、ほっとく訳にはいかないでしょ。だから私、新人に云ったんだよ。『仕事なんか終わんなくていいから、休め』って。それでもまだぐずぐず云ってたから『私も休むから、竹田も休め』って」
　美月はバイシャジャを見ると、淋しそうに笑う。バイシャジャは神妙な顔で美月を見ている。
「休日出勤の代休もたまってたから、代休の休暇届を課長に叩きつけて『明日からしばらく代休消化です。竹田も休ませますから』って。で、次の日、休んだんだよね。まあ、私も全然ミドにインできてなかったし、桜イベントやりたかったし、竹田のためだけじゃなくて、自分が休みたいって云うのもあったんだけど」
「もしかして、三年前の桜イベントでございますか。確かにそのころ、美月様はあまりお顔を見せてくださいませんでしたね」
「桜茶はイベントの時しか作れないのにさ」

「さようでございましたか」
「で、次の日、会社に行かなかったら、部長から直電きたんだよ。『何、会社休んでるんだ。会社来い』って。その云い方に頭きたから、無視してたら、今度はメール入って。『竹田も呼んだから、お前も来い。ちゃんと説明しろ』って。代休の日に会社に呼び出すなんて、どれだけブラックなんだよ。…って、そんなことはどうでもいいんだけどね。私が…なんて云うかな…。うん。『やるせなく』なったのはね。…後で聞いたんだけど、竹田…新人の竹田は会社行ったんだって。で、自分は休みたくなかったんだけど、私に云われてしかたなく休んだって云ったんだってさ」
　美月は目を伏せる。
「想いなんてね。伝わらないんだよ」
　美月の眼帯の下がかすかににじむ。
「美雪は美月様と一卵性双生児ではございますが、美月様ではございません。美月様のすべてを察しないからと責めるのは、いささか酷かと」
「責めてる訳じゃないよ。想いなんか伝わらないんだから。単にやるせないだけ」
「想いを伝えたければ、言葉にする必要がございます」
「言葉にしなくても、バイシャジャは私が美雪のことを云ってるって判ってくれたじゃない」
「それは年の功でございます。経験の差でございます。その年の功を以っても、拙者に判り申すは、美月様の悩みが美雪に関係しているということまで。それより先は判り申せません」
「そっか」
　美月はバイシャジャを見つめている。
「何の話をしているブヒか」
　朱大人が大量のポテトチップスをカゴに入れて持ってくる。
「どんな子がタイプって話。コーラもできた？」
「もちろんブヒ」
「じゃあ。…みんな！　休憩しよ。ホワイトもブラックも、コーラ持って来てよ」
　座って刀の修理をしていたブラック・スミスと鎧の修理をしていたホワイト・スミスが立ち上がり、調理台に並べられた瓶を両手でかかえる。
「で、朱大人は、ギルド内だと誰が一番？」
「ギルドで一番は姫っらラ様ブヒ」
「姫っらラ？　へぇ。キララちゃんがタイプなんだ。キララちゃんと朱大人ねぇ。うん。似合ってるかも」
「でも、本当はもっとおっぱいがあるのがタイプブヒ」
「あれ以上の巨乳って、どれだけおっぱい星人なんだよ」
「違うブヒ。大きさじゃなくて、おっぱいの数ブヒ。少なくても六個は欲しいブヒ」
　そうきたか。と、美月は自分のおでこを叩く。オークの美的センスは人間の感覚とはそこまで異なるのか。

「いや、数ではない。大きさがすべてだ」
集まってきた工人たちにコーラ瓶を渡しながらブラックが参戦してくる。その意見に賛成できない美月がすかさず反論する。
「そんなことないよ。おっぱいは形が最重要要素だよ。いくら大きくても形が悪ければ興醒めだし、どんなに胸が薄くても、形がよければオッケー！」
「いや、それは美月様が巨乳ではないから、そう言うのだ。巨乳こそ男のロマンだ」
ブラックが傷つくことを平気で言う。美月は「私だって男だ」と言いたくなるが、自分の胸を見て、その言葉をぐっとこらえる。ただ、やられっぱなしは悔しい。
「そんなことないよね、バイシャジャ。やっぱり形が一番だよね」
一番味方になってくれそうなバイシャジャを強制的にまき込む。バイシャジャは苦笑いで小首をかしげる。
「大きい、小さいや形は関係ございません。拙者は如来でございます。如来とはすべての女、すべての男を平等に愛するものでございます」
「あ、逃げたなぁ」
「バイシャジャ、遠慮なく言うのだ。巨乳こそすべてだと」
「違うブヒ。大きさも大事ブヒが、数も大事ブヒ」
朱大人以外は本気で論争をしようと思っている訳ではない。レクリエーションとしてふざけているだけだ。朱大人を除く全員がそれを判っていて、ホワイトもオッチャも、下着を作りに来ていた変態メイドのじゅん子とぴぃなも、好き勝手なことを言って場をさらに混乱させる。まるで学生のノリだが、美月はこういう雰囲気は嫌いではない。
「そう云う話は、胸のない者の前でするなっ。ナメテんのかっ」
収拾がつかなくなりかけてきたところで、よくとおる声が響き渡る。
「だから、大きさじゃなくて形なんだってば」
そう続ける美月に向かってスケルトンウィザードが冷たく言い放つ。
「そもそも、オレにはおっぱいがネェんだから。当然、形もネェんだよ。ナメテんのかっ」
スケルトンウィザードの安倍夜露死苦《あべのよろしく》はスケ番で口のききかたが乱暴だ。ただ、荒いのは口だけで、心根の優しい仲間想いの骸骨だ。今回も「ごめーん」と謝る美月に「謝るな。よけい傷つくだろ。ナメテんのかっ」と言いながらも、顔は笑っている。顔は頭蓋骨しかないはずのスケルトンが、何故、顔の表情を変えられるのかは不明だ。
空気を読まない朱大人が真剣な顔で「八個の巨乳ブヒ」と叫び続ける。夜露死苦は「うるせー。黙れ。オレにもポテチよこせ。ナメテんのかっ」と朱大人の手からポテトチップスのカゴを奪い取り、ポリポリと食べる。だが、スケルトンなのでかみ砕かれたポテトチップスはそのまま地面に落ちてしまう。
「食べ物を粗末にするなブヒ」
ポテトチップスをこぼし続ける夜露死苦に朱大人が主張の方向を変える。
「オレは食べているだけだ。落ちてくのはウンコだ。ナメテんのかっ」

夜露死苦はポテトチップスをかみくだきながら、つかみかかろうとする朱大人から逃げていく。スカトロ変態メイドのぴぃなが「ウンコ」に反応し、「ウンチ！　ウンチ！」と叫びながら、地面に落ちたポテトチップスを拾い集める。

はたから見れば、ただの莫迦騒ぎだが、美月は嫌いではない。思わず顔がニヤけてくる。そして、右目が潤んできた。

完全結界

工人たちの通常作業は消費した分のアイテムの補充だ。ギルドが活発だったころは工人たちの働きでは消費分をリカバリーできず、美月やアイテムが作れる他のギルドメンバーが手伝ったりしていた。それでも足りずに、不足した分は各自露店で購入していたのだが、ここ一年はログインするギルドメンバーもかなり少なくなっていたため、補充作業はすぐに終了してしまう。空いた時間は工房に隣接する畑の世話をしたり、放し飼いの鶏の面倒を見たり、道具の手入れで暇をつぶしていた。また、ホワイト、ブラック両スミスやその配下は空いている戦闘系支者とつれだって迷宮内の坑道で鉱石を採取することもある。裁縫のスキルを持っている者は羊から羊毛を刈ったり、蚕の繭から絹糸を取ったりもしている。

アクティブなギルドメンバーが減ると、消費も減り、素材の採集時間が増える。高位の素材を採れるところは出現する敵も強い。生産系支者の戦闘能力から高位の素材は集まらないが、低位のマジッククリスタルは倉庫からあふれるのではないかと思われるほどの在庫があった。

莫迦騒ぎのあと、ほとんどの工人は通常作業に戻っている。戻っていないのは、ぴぃなと安倍夜露死苦だけだ。ふたりは工房の隅で、コーラを飲みながら、まだふざけあっている。その様子を見ていると半ば飽きている夜露死苦がまだ遊び足りないぴぃなにしかたなく付き合っているようである。

工房はかなり広い。そこに生産に必要な機材がいくつも設置されている。金属製の武器や防具の作成に必要な金属炉と金床が二組ずつ。料理に必要なかまどは金属炉と並んで一つ。少し離れた井戸の横に二つ。それぞれのかまどは調理台とセットになっている。井戸の近くには薬を作る調合台もある。その他の設備としては護摩壇と裁縫台があった。

ひゅっと小さく風が動いて、工房の端に美雪がジャンプインしてくる。工房にジャンプするときは、工房の端、診療所の横にジャンプインするのが通例となっていた。

品質を求めないアイテム生成は気楽に行えるが、品質を求めるアイテム生成には精神集中が必要になる。一瞬の気のゆるみで品質が一段下がったりするからだ。

アイテム生成のスキル発動中に背後にジャンプインなどされれば気が散ってしまう。その程度で気が散るのは集中力が足りていないだけなのだが、アイテムを作っている側からすれば、やつあたりと判っていても文句を言

いたくなってしまう。さらにいうと、品質はランダム要素も大きいので、その程度のことで文句を言われるのは、言われた側からすれば理不尽極まりない。

しかし、美月もうまくアイテム作成できなかったイライラから、何回か背後にジャンプしてきた支者を怒鳴りとばしたことがある。もしかしたら、「工房へのジャンプは診療所横」という不文律ができたのも、美月の怒りが発端になっているかもしれない。

素材化の鍛錬兼調査を再開していた美月が視線を感じ顔をあげる。その美月の目に映ったのは顔をゆがめた美雪だった。美雪は美月を見とめると、さらに顔をゆがめる。そして美月に向かって進みだす。

時間的には戦闘系支者たちに頼んだ調査が終了してもおかしくない時間だ。美雪はその報告に来たのだろうか。それにしては表情が険しすぎる。まだ、美月に不信感を持っているのかもしれない。

美月は立ち上がり、二三歩、美雪に向かって進む。美雪はぶつぶつと何かをつぶやきながら美月に向かってくる。それはよくない事象だ。戦闘系キャラクターがぶつぶつと何かを唱えているときは魔法の使用を疑ったほうがいい。

「バイシャジャ、朱大人、ちょっと私から離れて」

美月はさらに一歩美雪に近付く。バイシャジャは小首をかしげながらも朱大人を促して、美月から遠ざかる。

魔法の使用に呪文は不要だ。呪文を唱えなくても魔法は使用できる。それでもほとんどのキャラクターが魔法使用時に呪文を唱えるのは、そのほうがうまく発動できるからだ。バーチャルリアリティー用のインターフェースユニットを装着すると思考がユニットによって読み込まれる。読み取り精度は技術の向上でかなり上がっているが、それでもたまに誤認識されることがある。その誤認識を補正するため、わざわざ呪文を口にするのだ。

補正のためなので唱える言葉は何でもいい。火炎壁《ファイアーウォール》のことを「かえんかべ」と音声認識させれば「かえんかべ」で発動する。「ファイアーウォール」「かえんかべ」「あついの大好き」「蟻殺し」の四つを登録すれば、そのうちのどの呪文でも火炎壁が展開されるのだ。

もちろんＰＫなどの対人戦で使用魔法を悟られたくないときなどは呪文を唱えないこともある。ただそれは誤認識の危険度込みになる。

美雪の戦闘スタイルは氷魔法が六割。ナイフを使った接近戦が三割。残りの一割が臨機応変だ。それは戦闘ＡＩでそう設定してあるからだ。その美雪がぶつぶつ言いながら速足で近寄ってくる。

美月は美雪の手を見た。素手だ。ナイフは持っていない。状況から判断すれば、美雪の行動は美月を魔法攻撃するパターンだ。おそらく、時間経過の中で美月への不信が恨みにかわり、それが美月への攻撃という思考へとなったのだろう。

美月は今、何をすべきかを考える。与えられた時間は一瞬だ。その中で答えを出さなければならない。

美雪の総合レベルは九十三。十位の戦闘支者。一方、美月は総合レベルは

八十七。九位の冒険者だが生産系のため、戦闘力にはレベル差以上のひらきがある。本気の美雪にとって美月は秒殺できる相手だ。

もし、着ている服がジャージではなく、最強の鎧だったとしても、美月の能力では一分も持たないだろう。そして、美月の攻撃は当たらない。達人スキルを持った美雪に対して、低レベルの攻撃はすべてよけられる。雷魔法は光の速さで進むため、ヒットするかもしれないが、ダメージを蓄積させる前に、美月のMPが果ててしまう。戦えば美月が負けるのは必至だ。逃げたとしても、それは痛みの時間が長引くだけだ。であれば、運命を受け入れ、そのうえで将来的に何が一番いいかを考えるべきだ。

場所は工房、そして周りには工人。彼らに助けを求めても状況は変わらない。工人たちが束になっても美雪にはかなわない。それほど、戦闘系と生産系の差は大きい。たった数秒の自分の延命のために、他者を犠牲にすることは美月にはできない。それに、少しだけ期待しているのだ。ここでの死と同時に、元の世界に戻れることを。

美月は夜露死苦にメッセージを送る。

（夜露死苦。美雪が私に近付いたら、私たち二人を双方向不可侵の完全結界でつつんで。できる？）

夜露死苦は美雪に気づいていなかったようで、急にキョロキョロし、まだふざけているぴぃなを突き放す。

「できるに決まってんだろ。ナメテんのかっ」

メッセージで返さず、怒鳴り声で返したのは、ぴぃなに対してお遊び終了の合図も兼ねているのだろう。

夜露死苦は工人だが、護摩を作る祈祷士で、装備に魔法効果を与える付与士でもある。少ないながらも戦闘支援系の魔法も使える。結界の護符が作れるのなら、結界魔法も使えていいはずだ。

支者はミドのころより生き生きとしている。ブリュンヒルデの言葉ではないが、ミドよりここのほうが幸せだろう。せっかく幸せでいるなら、それをもっと続けさせてあげたい。美雪の出現で美月自身の将来は期待できないものとなった。では、美月を除いたメンバー全員が幸せに暮らすには、支者間に遺恨を残してはいけない。それに、工房に被害があってもいけない。

戦闘だけで生計を立てるのは難しい。独り身なら傭兵で食べていけるかもしれないが、ギルド全体が生計を立てるには、工房も工人も必要だ。その辺の感覚は戦闘系にはなかなか理解してもらえないのだが。

工房と工人を守るための一つの手段が結界だ。美雪が低位の魔法を使うなら、ダメージを受けるのは美月だけだが、高位の魔法を使用したら、工房も影響を受けてしまう。十位の氷魔法、絶対零度《アブソリュート・ゼロ》であれば、工房は半壊滅状態に陥るだろう。夜露死苦の結界でどれだけ防げるかは判らないが、何もしないよりはましだ。

美雪は速度をあげて、美月に近付く。いまや飛びかからんとするほどの勢いだ。近付くにつれ、美雪のつぶやいている言葉は美月の名前の連呼であることが判ってくる。

美月と美雪の距離が三メートルほどになったとき、二人を取り込むように半球状の透明膜が展開される。美月はもう一度美雪の手を見る。ナイフはない。近寄る体勢からみて、攻撃のパターンは抱きついて背後からの氷刃か氷結か。

美雪が美月に飛びかかる。美月は情報スキルの遮蔽を発動し、身のまわりを見えなくする。それは工人たちに美雪の行動を見せないためだ。美雪が事を成し遂げたあと、どうみんなを言いくるめるつもりかは判らない。それとも、美雪の行動は心中で、あとのことは考えていないのか。どちらにしても衝撃的な場面を工人に見せる必要はない。

美雪が美月に抱きつく。美月はよけない。

（みんな、ありがとう）

美月はギルド内の全員に向かって最期のメッセージを送る。が、「隔壁障害によりメッセージ送信は失敗しました」のエラーとなってしまう。夜露死苦の完全結界はメッセージも通さないらしい。美月は右目を閉じた。

襲ってくるはずの痛みはなかなかこない。すでに美雪は美月に抱きついている。もうそろそろ魔法が発動してもいいはずだ。美月はゆっくり右目をあける。

視界はすべて白で覆われている。左半分は遮蔽スキルによって出現した白いもや。右半分は美月の肩に顔をうずめている美雪の白い髪だった。

「美月。美月。ありがとう。ありがとう、美月」

美月の肩に向かって、美雪は鼻をすすりあげながら呪詛のように美月の名前とありがとうを繰り返す。美月はゆっくりと美雪の背中に手をまわし、ぎゅっと抱きしめる。

抱きつきながら、ありがとうと言っているのであれば、美雪に攻撃の意思はないのかもしれない。逆に感謝で感激しているととるのが正解だ。では、先ほどの殺意によって歪んだ美雪の顔はいったい何なのだ。美月はゆっくり身を離し、美雪の顔をのぞきこむ。美雪は顔をしかめ、涙をこらえようとしている。それでも、両目からは幾筋もの涙がこぼれ、頬を濡らしている。

「何だよ。何、私に抱きついて泣いてんのよ。まるで私が泣かしてるみたいじゃない」

「ありがとう、美月。ごめんなさい」

「何、何？　いったいどうしたのよ」

美雪は大きく息を吐き、そしてニコッと笑った。

「ロデムーが教えてくれたの。美月は恐ろしいって」

想いは伝わらない。だが『想い』を『策』ととれば、策は相手方の策士によって暴かれる。

いいつかった用を済ませたあと、美雪は太狼次狼の実攻撃の真意を相談するため、ロデムーを訪ねた。小会議室でジェスターと話しをしていたロデムーは美雪の質問にこう答えたという。

「美月様は恐ろしいお方であーる」

それに同意し、「美雪にあれほどひどい罰を課すとは思わなかったっ」というジェスターに、ロデムーは体を左右に大きく振る。

「それは違うのであーる。美月様は何の罰も与えていないのであーる。推して知るべし」

ロデムーは続ける。美月の美雪への罰は、自分の姉であり続けること。そして、そのことに悩みを持つこと。その二つだ。では、罰を言い渡す前はどうだったか。美雪は美月の一卵性の姉であり、そのことに悩んでいた。すなわち、罰の前と後では何も変わっていないのだ。

冷静に前後を比較すれば、罰が存在しないのが判る。美月は「一切不問、今後も今まで通り」といったにすぎないのだ。だが、「不問」と言えば納得しない者があの場にいた。そこで美月は口調と態度を変え、同じ内容を別の言葉に置き換えた。そして威圧感だけで、あの場にいた全員に罰は与えられたと勘違いさせたのだ。あまつさえ、全員で罰を与えたと宣言することにより、美雪に対し、同情と罪悪感を抱かせることまで成功している。

支者もいろいろで、闇面の支者が一枚岩であるとは限らない。規定により、ギルド内の者を嫌うことはないが、得手不得手は存在する。支者の中には美雪の立場に納得していない者もいたはずだ。美雪は美月に「様」をつけない。いくら設定とはいえ、そういう馴れ合いに不快感を覚えるギルドメンバーもいた。そのギルドメンバーが作った支者は、同じような思考をしていることが多い。

闇面内でも自らの創造主に「様」をつけない支者は何名かいる。だが、美雪の創造主はよっしーであって美月ではない。自らの創造主以外のやんごとなきお方に「様」をつけないのは美雪だけだった。

馴れ合いに不快感を持っていた者も、美雪の苦しみと罰を知ると、今までの考えは多少変わるだろう。

「おそらく、美月様はそこまで考えて、あのような態度をとったのであーる。美雪はそれを一番に察するべし。罰を与えないどころか、さらにその上をいく美月様の策略なのであーる。瞬時にそこまでの戦略を思いつく美月様は恐るべし」

ロデムーの解説を聞いてジェスターは固まる。そこまで読めなかった自分と、自分も美雪に対して多少なりとも不快感を持っていたことを恥じて。そして、美雪は「ああ」と声をあげ、工房へジャンプしたのだった。

「ありがとう美月。そしてごめん。私は美月の気持ちが判らなかった。ごめん。ごめんなさい」

「私こそ、ごめん。ちゃんと口で云わないとそんなこと伝わらないよね。それに、正直云うと、そこまで深く考えてた訳でもないし。だけど、美雪を罰したくなんかないってことと、ずっと私のお姉ちゃんでいて欲しいって云うのは、その通りだよ。これからも迷惑かけるけどよろしくね」

美月は美雪に向かって右手を差し出す。美雪はその右手を受ける。

「うん。ま、美月のミスはカバーするよ。でも時々は今回みたいに私の迷惑の尻拭いもしてね」

「え？　今回は私、何もしてないよ。ロデムーやジェスターにも云っとかなきゃ。いい加減なこと、みんなに云いふらさないでって」
「あっそ。じゃあ、そう云うことにしておくね。ありがと。…って何で、ここもやがかかってるの？」
　美雪が初めて気づいたように白い周りを見まわす。
「美雪は泣き顔をみんなにみられたくないんじゃないかって思ったから」
「遮蔽魔法？」
「私のはスキルだけどね。今、解くから、涙拭いて」
　美雪は右手でごしごし顔をなでる。
「何云ってるの。私が泣いてる訳ないでしょ。周りのみんなに変な誤解されちゃうから、早く解除してよ」
「ハイハイ」
　美月が左手を横に振ると、もやが一瞬で晴れていく。それと同時に結界を取り囲むように集まっている工人たちの姿が見えてくる。美月は夜露死苦に向かい身振り手振りで結界を解くように伝える。それに応えて夜露死苦が印を切る。
　結界解除とともに美月は深呼吸をする。結界の中も空気の流れは変わらないのだが、見た目から閉空間の感覚にとらわれ、いつも結界の外に出ると深呼吸をしてしまう。隣でふぅという美雪の息を吐く音を聞いて、姉妹での同じ動作に美月は微笑んでしまう。「ふとした行動や癖は美月と同じ」という美雪の設定に従った行動なのだろう。
「いかがされましたか」
　不思議そうに美月と美雪を見ている工人を代表してバイシャジャが尋ねる。それに対して、美月は左耳の後ろを掻く。
「姉妹で内緒話したかったから、結界貼ってもらっただけだよ」
「さようでございますか」
　バイシャジャはそう答えるものの小首をかしげたままである。おそらくは美月の言葉を怪しんでいるのだろうが、それを指摘するのは得策ではないと判断したのか、何も言わず黙り込んでいる。
（美月様、迷宮の攻略調査、終了しました。メッセージを送りましたが障害により不通とでました。また戦闘なのでしょうか）
　ブリュンヒルデのメッセージが頭の中に届く。まったくブリュンヒルデはタイミングが悪い。実世界にもトイレでしゃがんでいるときに限って電話をかけてくる知人がいるが、それと同じだ。
「ああ、ブリュンヒルデ。大丈夫、何でもないから。ちょっと秘密の打ち合わせをしてただけ。それにしてもさ、さっきと云い、ブリュンヒルデのメッセはタイミングが悪いね」
　美月はわざと声に出してメッセージを返す。
（失礼しました。以後気をつけます）
「何？　攻略が終わった報告？」
（はい）
「結果報告なら、その前に全階層統括あつめて。実験したいし、今後のこと

伝えたいから」
（実験ですか。集める場所はどちらがよろしいですか）
「第二階層の山頂はイェマラジャにはつらいかなぁ」
（大丈夫だと思いますが）
「やめたほうがいいかも。前より寒くなってるから」
ブリュンヒルデと美雪が同時に正反対の返事をしてくる。
「夜になったら冷え込みがきつくなったし、空気もちょっと薄いかも」
「頂上、天井なかったでしょ」
美月は再び頭の中に迷宮の地図を投影する。縮尺が正しければ、第二階層の頂上は四千メートル級の高さだ。
「うん」
「ブリュンヒルデ、あつめるのは第二階層の薬草エリアの一部屋めにして。五分後、そっち行く」
（判りました。それまでに集合しておきます）
「美雪、頂上はＭＯＢでないよね」
「うん」
通称「頂上」もしくは「山頂」は第二階層の最終部屋になる。そして美雪の待機部屋でもあった。攻略モードで迷宮に入った冒険者ここで美雪と戦うことになる。
「夜露死苦、オッチャ、美雪。頂上、行くよ。動感センサーと結界護符を持ってついてきて」
「はいとな」「ついていくぞ」と答えるオッチャ、夜露死苦に対して、美雪は「今、ブリュンヒルデから召集かかったんだけど」と返す。
「じゃ、一分だけ付き合って。その後はジークルーネとジークフリードに頼むから」
「うん、判った」
「じゃ、行くよ」
美月がジャンプアウトで消える。オッチャと美雪は動感センサーを手に取り、夜露死苦は護符を懐にしまう。そして、三名揃ってジャンプアウトしていった。

めざめのあさ

何だか体が軽い。思考がまとまらず発散しつづける。場所も場面もころころ変わる。同じシーンを何回も繰り返す。繰り返しの中で「こうなれ」「こう変われ」と念じると、時間の流れが変化して思い通りの展開になったりする。
夢の世界だ。起きかけているが、まだ眠っている。そんな状態だ。嫌な夢ならともかく、友人たちと賑やかで楽しい時間を過ごしている夢なら、このままダラダラと夢の中に沈んでいたい。ただ残念なことに、夢の中と気づいてしまってから、その夢を持続させるのは難しい。
よっしーの意識は夢の中から離脱する。閉じたまぶたを通して入ってく

る光がいつもより少ない気がするのは、まだ早い時間なのか、それとも雲が厚いのか。よっしーは目を閉じたまま細く長い息を吐く。

と、よっしーの耳によっしーの息と異なるタイミングでの寝息がかすかに聞こえてくる。確認しようと、よっしーは息を止める。寝息は続く。わざと呼吸をして自分の息の音を確認する。そして、明らかに自分のものではない息の存在を確認する。

よっしーはゆっくりと目をあける。視界の左側は暗く、何も見えない。右側は白いシーツと茶色の厚手の布で覆われている。よっしーのものではない息はその茶色の中から発せられているようだ。よっしーはその正体を確かめるべく身を起こす。ようやく醒めてきたよっしーの目に茶色の着ぐるみパジャマを着て眠っている女が映る。

「あぁ、一純《いずみ》が泊まってたのか」

よっしーは寝ている女の頬に手を伸ばした。

広さは二十畳ほどあるだろうか、部屋の中央にキングスサイズのダブルベッドがでんと置かれている。そのベッドを二分するように部屋の半分はベージュ系の壁紙、茶色の絨毯となっていて、もう半分は黒を基調としたモノトーンの色調になっている。茶系の半分には、ソファーや棚に乱雑に荷物が置かれ、黒の側には二棹の箪笥だけが置かれている。まるで趣味の違う住人のワンルームマンション二部屋の間の壁だけを取り払ったような部屋だ。

その部屋の中央にあるベッドには二人が寝ていた。一人は茶の着ぐるみを身に着け、もう一人は灰の着ぐるみを着ている。茶の部屋側に茶が、モノトーン側に灰が寝ているのは、意図的に違いない。二人とも体を「く」の字に曲げた全く同じ体勢で寝ている。しばらくすると、茶の背にくっつくように寝ていた灰がもぞもぞと体を動かし始める。そして、灰はだるそうに体を起こし、茶の顔をのぞき込む。

美月は美雪の頬に手を伸ばす。が、その手は頬に届く前に止められる。それは美月の手もまた、着ぐるみパジャマの手であったからだ。それをきっかけに美月が急に夢から醒める。そもそも一純がここにいる訳はないのだ。

よっしーと坂野一純が別れてから六年。その六年で会ったことは一度もない。未練たらしく連絡先は残してあるが、そこへの連絡も一切していなかった。それに、よくよく見れば寝ている女、美雪はさほど一純に似ている訳でもない。一純は美雪ほど色白ではないし、髪も長くない。そもそも真っ白なロングヘアーなど実世界で見たことはない。

美月はわずかな希望が打ち砕かれたことを知る。夢から醒めても、そこは異世界で、未だ美月のままだったのだ。

美月は止めた手をそのまま伸ばし、美雪の頬に着ぐるみの肉球を押しあてる。寝ている美雪は無意識の仕草でそれを払いのけようとする。美月はそれをたくみに避けては再度頬をつつく。

美月から見て美雪は美人だ。ミドの中では十人並み以下かもしれないが、実世界にいたら確実に美人の範疇で、美月の好みの顔立ちをしている。美雪

の顔や体型はよっしーがデザインしたのだから、それは当然だ。性格設定にもそれはいえ、一歩引いたところや、人を支える側であること、甘えん坊タイプでありながら根には我を持っているところなど、よっしーの理想のタイプだった。

そんな女性が目の前で無防備に寝ている。何もしないなんてことはよっしーにはできない。美月はゆっくりと美雪の肩を押し、横向きから仰向きにさせる。そして、顔を近づけ、キスをしようとしたとき、美雪がパッと目を開ける。

「ん？　どうしたの？」

美雪は寝ぼけ声で問いかける。美月は美雪に馬乗りになる。

「おいしそうな熊さんが寝てたから、食べようとしたのだぁ」

美月はぐわぁと叫びながら美雪に向かって頭をおろす。茶色い熊の着ぐるみの美雪は体をよじってベッドから抜け出すと、笑いながら部屋の中をよろよろと逃げまわる。それを灰色のシベリアンハスキーの着ぐるみを着た美月がぴょんぴょんと追いかける。

「まてー」

「きゃあ、狼さんに食べられちゃう」

美雪はベッドの周りを右へ左へと走りまわるが、最後には美月が美雪を羽交い絞めにし、美雪の頭をかじる。

「うわぁ、狼さんに食べられたぁ」

騒ぐ美雪の頭を、美月がこつんと叩く。そして、箪笥をあけると中から白いホットパンツ、白いTシャツ、白いハイソックス、白いロングシャツを出す。さらにその上に白と淡い水色の縞パンツ、白いレースが縁どられた淡い水色のブラジャーを乗せる。そして、そのセットを美雪に渡し、今度は黒いホットパンツ、Tシャツ、ハイソックス、ロングシャツをベッドの上に放る。

「このパンツって？」

「今までのってダサかったでしょ。じゅん子にカワイイのデザインしてもらったんだ」

美月は白と淡い緑の縞パンツと、薄い緑のブラジャーもベッドに放り、箪笥をしめる。

「ボックスパンツよりいいけど、何で縞パン？」

「カワイくない？」

「いやいや、この歳で縞パンってどうかと思うよ」

確かに縞パンツの許容範囲は中学生までかもしれない。だが観賞用としては、歳に関係なく心を揺らしてしまう。よっしーにとってそれは理屈ではない。だから美月が縞パンツをはくのにも抵抗はないのだが、女性の立場で主観的に見れば、明らかに大人の女性である美月や美雪が縞パンツをはくのは恥ずかしいことだろう。

「そ、そうかもね。でも今日はそれつけてよ。で、あとでじゅん子に私たちに似合いそうなデザインのイメージ伝えて。でも、オバさんパンツはヤだよ」

「オバさんパンツは私もパスだよ。…せっかくだから、ちょっとエロいので

もいい？」
「エロいの？　わお。楽しみ。…でも。美雪でも、そんなこと云うんだね。ちょっと意外」
「ベッドで寝てたら、およっしー様の匂いがして、およっしー様に抱かれている気分になっちゃったから」
「えっ、よっしーに？　美雪ってよっしーに気があったの？」
設定では美雪の想い人はウィル・オーのはずだ。氷属性の美雪と、火属性のウィル・オーの報われない恋物語だったはずだ。
自分が作った支者に自分を愛するように設定するプレイヤーは多い。だが、美月はそれを悪趣味だと思っている。そのような設定をする者をあえて非難することまではしないが、そういう設定をするつもりもないし、してもいない。「よっしーに抱かれた」との発言は前から美雪にその気があったということなのだろうか。そしてそれは、よっしーすなわち美月への愛の告白なのだろうか。
「およっしー様は私の創造主なんだから、私の真の理想のタイプだよ。そのおよっしー様と美月が同じベッドを使ってたなんて、かなりショック受けてるんだけど」
「同じベッド…って、何考えてるのよ。そもそも美雪は私とよっしーの関係、何だと思ってんの？」
「およっしー様と美月は一心同体。魂はひとつ。って聞いてたから、そう云う関係なのかなって思ってはいたけど、こういうあからさまな事実を目にしちゃうと、やっぱり、ちょっとね」
「何、気持ち悪いこと云ってんの。私とよっしーは同じ人間だよ。よっしーは私で、私はよっしーだから」
「はいはい。そこまで心が通じ合ってるってことね。ごちそうさま」
「違うって。姿は確かに違うけど。そうだ、二人とも性格は同じだったでしょ。姿が違うだけで、中身は同じなんだって」
「何照れてるのよ。およっしー様と美月が同じ人間な訳ないでしょ。そもそもどっちも人間じゃなくて亜人だし。性格は、同じ系統かもしれないけど、同じじゃないじゃない。美月はおよっしー様ほどクールじゃないでしょ」
よっしーがクールというのは大いに反論がある。美月が言うのもなんだが、だらしがなくて、いい加減で、どちらかといえば人当たりがいい性格だ。それをどうしてクールと評されるのかはなはだ疑問だ。だが、自分にない者にあこがれるという意味で、クールの評価は嬉しさもあり、否定はしないことにする。
「およっしー様、今頃何してるのかなぁ」
美雪はそうつぶやくと、美月に背を向け着替えを始める。
それにしても、支者から見ると、美月とよっしーは別人なのだろうか。姿や声は違うが、行動パターンは変えていなかった。よっしーでも美月でも同じように判断し、行動していたはずだ。それとも無意識のうちに美月でログインしているときは美月を演じていたのだろうか。
立場によって人は変わる。それは周囲がその立場に相当するような行動

をその人に要求するからだ。その要求に応じようとして、ほとんどの人は要求に沿うような行動をする。行動をとろうと努力する。それが本来の自分とかけ離れているとき、人はストレスを感じ、つぶれていくのだろう。とすれば、実世界もＲＰＧだ。皆、役割を演じているのだ。

知らないうちによっしーはよっしーを演じ、美月は美月を演じていたのかもしれない。この世界には美月としてきた。おそらく、よっしーに替わることはできない。これからは美月として暮らしていくことになるのだろう。とすれば、これからはずっと美月を演じることになるのか。ギルドマスターとしての立場を演じなければならないのだろうか。

支者たちは仲間だ。その認識は美月にもある。ギルドマスターは彼らを導く立場だ。能力的に美月が適任とは思えないが、少なくともしばらくは美月がその立場に収まるしかないのかもしれない。ギルドのみんながこの世界で暮らすことになるのならば。

ならば、自分のすべきことをするべきだ。この世界にどのような脅威があるかはまだ判っていない。どのような脅威があるかの調査を指示するのも、発見された脅威に対してどのような対応に出るのかを決定するのも、それはギルドマスターの仕事だ。

調査に関しては、昨日から開始している。そこでいくつかの問題点が見つかり、その対応も指示してある。そう考えると、すでに美月はちゃんとギルドマスターを演じていたようだ。ならば今後はそれを継続しつつ、判断を誤らないように努めるだけだ。

実世界に未練がない訳ではない。疎遠になっていたとはいえ、親兄弟もいる。一純と別れてからは、特定の彼女がいる訳ではないが、気になっている女性はいる。仕事は好きではないが、自分のせいで穴をあけるのは心が痛む。

一方、ここには未知の世界の冒険がある。仲間と呼べる支者たちがいる。そして、美月には彼らをまとめる責がある。同時に、ここでは美月自身が神に近い存在として崇められてもいる。

どちらの世界が楽だとか楽しいとか、つらいとか苦しいとか、そういうことでは割り切れない。ただいえることは、実世界はもはや『実世界』ではなく、ここが『実世界』だということだ。重要なのは美月たちはここで生きていくという事実に対し、何をすべきかということだ。

前の世界に未練はある。だが、未練だけを持って、ここで暮らすのは有意義とは言えない。現状を踏まえて、ここで暮らすのなら、美月は美月としての役割を演じなければならない。役割を果たさなければならない。よっしーではなく、美月として。

「ねぇ、美雪」

「ん？」

背を向けてシャツに手を通していた美雪が振り返りもせずに応える。

「ねぇ、美雪。キスしてよ」

「え？　何よいきなり」

今度は振り返り返事をするが、シャツのボタンを留める手はとめない。

「キス。してよ」
ベッドに腰かけ、下を向いたまま淋しげにつぶやく美月を見て、美雪の手がとまる。美月は美雪を見ることもなく、着ぐるみのままうつむいている。美雪は何か言いかけるが、それをやめ、美月に近付き、美月の頭から着ぐるみのフードをはずす。右手を伸ばし、あごを引き上げる。美月の右目は怒ったような、涙ぐんだような眼をしている。そして、左目は虚無の闇を抱《かか》えている。
美月の闇を覗きこんでいた美雪の顔が美月に向かっておりていく。そして、おでこにキスをする。
「おでこかよ。唇じゃなくておでこかよ」
そう抗議する美月の頭を美雪は黙って抱きしめる。力いっぱい抱きしめられた美月は美雪の腹に埋もれていく。
「大丈夫。私はずっと一緒だから。ずっと一緒にいるから。美月と離れたりしないから。美月を護るから」
美雪は一瞬天井を見上げ、そして美月に目を戻す。美月はもごもごと美雪の腹で何か言っている。
「お、お姉ちゃん。苦しいよ」
美雪の腕を振りほどいた美月が息もたえだえに訴える。
「何だよ。そこは感動的に『ありがとう。お姉ちゃん』だろ」
「ありがと。美雪。私もずっと一緒にいるよ。美雪を幸せにするよ」
息を整えた美月が、はにかんだような笑顔で美雪を見つめる。美雪も同じ笑顔を美月に返す。
「よし。私も着替えなくっちゃ」
美月は勢いよく立ち上がり、着ぐるみパジャマを脱ぎだす。
「ねぇ、美月。今日は靴とキャップ、交換してみない？」
「ん？」
「全身白や全身黒じゃなくて、頭と足元が逆の色だと、引き締まってよりきれいに映ると思うんだ」
「うん。いいね」
美月は慣れない手つきでブラジャーをつけシャツを着ていく。美雪は箪笥から黒い野球帽と白い野球帽、黒いバスケットシューズと白いバスケットシューズを取り出す。
「いやー、でも、正直、美雪からプロポーズしてくれるとは思わなかったよ」
「え？」
「美雪って、ウィル・オーが好きなんだと思ってたから」
「ウィル・オーねぇ。私も、そうなのかなって思ってたんだけど。設定もそうなってるし。でもね、前からなんとなく『違うんじゃないの』って気もしてたんだよね」
「そっか。でも、こんな形で私にプロポーズしてくるなんてサプライズだよ」
「は？　何そのプロポーズって」
しゃがんで靴を履いていた美雪が、美月を見上げる。眼帯をつけていた美

月が美雪を見下ろす。
「だって、『ずっと一緒にいよう』って『君を護る』って。それってプロポーズの言葉でしょ」
「はぁ？　私たち、女同士なんだよ。姉と妹なんだよ。それがなんでプロポーズなの！」
「あれ、美雪は近親婚や同性婚に偏見持ってるの？」
「そう云うことじゃなくて。私はプロポーズなんてしてないから。ったく、およっしー様の名前がリストから消えて淋しいからって、何考えてるの」
「よっしーが消えた？」
　美雪の言っているリストとはギルドメンバーのリストのことだろう。ギルドメンバーリストにはギルドに所属しているキャラクターの名前が載っている。そこから名前が消えるのは、ギルドを脱退したか、キャラクターが削除されたかだ。美月は視界の中にギルドメンバーのリストを表示させた。

ウィ・ウィッシュ

　視界一面の白い砂。否。砂ではない。細かく砕けた動物の骨が砂のように見えるだけだ。大勢の叫び声と、魔法の発動音、走り回る足音、それらがＢＧＭとなっている。
（よっしーさん？　いないすか？　みの虫す。えぇと、世界蛇、落ちるかもしれないす。よっしーさん、メッセ、外にフォワードしてたすよね。ムービー見たいって言ってたから、よっしーさんも宛先に入れるす。ちなみに、今はデスペナ三十秒待ちす。以降は無編集の視線ビデオで）
「おい。蚕蛾、ペナ終わった瞬間にレベルダウンなしの完全復活アイテム、俺に使え」
「復活アイテムは使えません」
　女の声がして、視界の隅に、ベージュ色の金属グリーブのつま先が現れる。グリーブは蚕蛾と呼ばれた女のものだろう。
「よっしーさんの店で買ったろ」
「私に回復アイテム以外の使用権限はありません」
　みの虫がぶつぶつと何かをつぶやく。
「これでいいだろ。インベの中の使用制限、外したぞ」
「確認しました。復活アイテムの使用に問題はありません」
　遠くで「蛇、残りＨＰ一パーセント」の女の叫び声と「残り四十秒」の男の叫び声が聞こえる。
　今まで固定だった視界がピクッと動く。と、同時に世界が白く輝く。視界はさらに、ぐわんぐわんと動く。おそらくみの虫が立ち上がったのだろう。
　正面に巨大な蛇、ミドガルズオルム。胴の高さは十メートルを超えている。そして、長さは地平線の先まで続いている。その蛇の口には蛇の尾が咥えられている。その尾は地平線の先からつながっている。世界を取り囲み、自分の尾を食む蛇。世界蛇。ミドガルズオルム。
　蛇には大勢の冒険者が取りついている。蛇が身をよじると、それらの冒険

者は吹き飛ばされていく。一人は視界のすぐ前に落ち、動かなくなる。視界の左端に落ちた冒険者は、剣を杖のようにして立ち上がり、「ハイヒール」の声とともに赤い輝きに包まれている。

「蚕蛾、行くぞ」

視界は蛇に向かって走り出す。視界の斜め上をクリーム色の蛾の羽根を付けた女騎士が、空を飛んで蛇に向かっていく。

「おい！　そこ！　魔法を鱗に当てるな！　蛇が回復する！　取りついて鱗がはがれたところから中に直接撃ち込め！」

視界の左前を走っているオーガがどこかに向かってわめいている。

視界は蛇にたどりつく。上を向くと、背の高さほどのところに中途半端に剥がれた鱗が見える。視界は垂直ジャンプでその鱗に取りつき、剣で鱗をはがしはじめる。蚕蛾はさらにその上の鱗がはがれたところに留まり、魔法を撃ち込んでいる。

「残り三十秒！」

鱗の根元に剣が何度も差し込まれ、グラグラになっていた鱗がひらひらと落ちていく。視界ビデオには剥がれた箇所に剣を深く突き刺していくみの虫の手が映っている。剣は繰り返し蛇の肉に刺さり、切り刻まれてぐちょぐちょの肉塊になっている。

もう刺せる場所がないと判断したのか、みの虫は隣の鱗に移る。鱗の裏に剣を滑り込ませ、力まかせに鱗を剥ぎとろうとする。

「残り二十秒！」

男の叫び声が響き渡る。それと同時にミドガルズオルムが咆哮し、身を大きく震わせる。その振動で蛇に取りついていた多くのものたちが遠くへ弾き飛ばされる。みの虫も飛ばされたようで、ビデオ映像はくるくると回転したあと、映像の半分が白い骨のかけらで埋め尽くされる。

「うぉお！」

みの虫の唸り声とともに視界の視点が高くなる。

「蚕蛾、フルヒールかけろ！」

みの虫の前方の空中で崩しかけたバランスを立て直していた蚕蛾が近づいてくる。

パスッ。

乾いた炸裂音がして、映像がぐらっと動き、再び半分が砂のような骨のかけらで埋めつくされる。残りの半分も走り回るキャラクターの足元が見えるだけだ。

（ちくしょう。狙撃弾にあたっちまったか）

「残り十秒！」

（ダメだ。デスペナ三十秒だ。間に合わない）

視界ビデオは赤いフィルターをかけたように画像が赤くなっていく。白い骨のかけらにも、赤いどろっとした液体が広がっていく。

（せめて、蛇の方向を向いてたら、討伐の結果が判ったのに）

「みの虫様を一切のデスペナルティなしに、今すぐ復活させてください！アイ・ウィッシュ・アポン・ア・スター！」

蚕蛾の声が聞こえる。と、みの虫の周りが虹色の輝きに包まれる。
みの虫はゆっくりと立ち上がる。みの虫の前で蚕蛾が星型のアイテムを天に向かって掲げている。そのアイテムが空中に溶けて消える。
「蚕蛾！　よくやった！」
みの虫の言葉に蚕蛾が微笑んだように見えたが、それは光の加減だろう。ミドでは微妙な感情表現はできないのだから。
世界蛇はのたうちまわっている。
「ＨＰ残り一パーセント未満！」
「残り五秒、四、三」
女のＨＰ報告のあと、男がカウントダウンを始める。
「ダメだ、間に合わない。ミドが終わってしまう」
みの虫がつぶやく。
世界蛇は苦しげに、大きく口を開ける。開いた口からは尾の先が見え、そこから光があふれだす。
「いやっ！　ミドガルズオルムを終わらせないで！」
視界の隅で蚕蛾が泣きそうな声で叫ぶ。
「残り一秒！」
「斃したのか？」
「ミドを終わらせないで！　アイ・ウィ…。ウィ・ウィッシュ・アポン…」
蚕蛾が再び星型を掲げる。
「ゼロ！」
そして、世界が真っ白になった。

侵入者

果たして、世界蛇は落ちたのだろうか。
この三日間で、美月はよっしーから自動転送されたみの虫のビデオメッセージを何回見ただろう。何回見ても、ミドガルズオルムは斃されたのか、蚕蛾の願いは叶ったのかは判らない。
「美月」
「美月様っ」
自分を呼ぶ美雪とジェスターの声に、美月はハッと我に返る。
「何、ボーっとしてるのよ」
「緊張感がなさすぎですっ」
二名の非難に美月は耳のうしろを掻きながら答える。
「戦略を考えていたのよ」
「ならばよろしいですっ」
ジェスターは納得したように引き下がるが、熊の毛皮を羽織った美雪は、美月を見てニヤニヤしている。
「もう、みんな揃ってるよ」
さほど広くない謁見室が、今日は特に狭く感じる。それは、それだけ多く

の支者がここに集まっているからだ。狼の毛皮を羽織り、王座に座る美月の前には、革の軽鎧と武器を装備した飛田ひとみ、ヘルムヴィーゲ、ロプロスーがいる。ロプロスーの横には茶斑の犬、シャバラが目を光らせている。そして、平服の支者たちが彼らを取り囲んでいた。着ぐるみに見える美雪の熊の毛皮も、美月の狼の毛皮も、美月によって作られた八位の軽鎧だった。

武装した者たちは、ギルド迷宮の近くに発見された洞窟に調査へ向かうメンバーで、平服はその見送りだ。発見された洞窟には低レベルの獣の生息が確認されている。その洞窟は、索敵スキルを使った事前の調査ではレベル一からレベル三に相当する蝙蝠、狼、蜘蛛、鼠人とボスキャラクターとしてレベル七相当の犬が巣くう洞窟型迷宮だった。

「何なの、この見送りは。大層なことになっちゃってるじゃない。たかだか一位の迷宮調査なのに」

「一位と言っても、この世界の迷宮であーる。何があるのか判らないのであーる。心して臨むべし」

ロデムーが伸び縮みしながら、たしなめる。それは正論なのだが、ここまですることもない。だが、こうも大げさになったのは、これがギルド、ダークサイド・オブ・マイ・マインドがこの世界に進出する第一歩であることを、みんなが判っているからだろう。

「よいしょっと」

美月はさっと王座から立ち上がる。

「じゃ、新世界でのスタートとなる、迷宮調査に…」

突如サイレンが鳴り響く。

（第二階層、薬草エリアに侵入者だよっ。数、三）

サイレンとともに河井花梨の発するギルドメッセージがギルドの全員の頭の中に伝えられる。

（亜人、たぶん妖精系。推定総合レベルは三が一名。残りの二名はレベル一。種属は判んない。こんな亜人、今までに見たことないよ）

そのメッセージを聞いて、美月は笑いだす。

「こっちから出張ろうとしたとたんに侵入者か。この世界も、面白くなってきたね」

あとがき

丸山くがねのオーバーロードに衝撃を受け、自分なりのオーバーロードを書いてみた。シナリオ形式の長い話は今までにも何回か書いたが、ここまで長い小説形式の話は初めてだ。

プロローグとエピローグを除くと、物語の中では十八時間しかたっていないが、実際に書いていた時間は七ヶ月にもなっている。最初のころと、終盤では書き方も変わってきてしまっているし、キャラクターや世界の設定自体、忘れたり間違って覚えてたりするが、それは愛嬌と思ってほしい。

続く話の構想もできている。本書の補足説明の外伝も書きつつある。もうしばらく闇面との付き合いは続きそうだ。

平成二十八年四月二十九日

太田巳波（ま）

アナザー・サイド・オブ・マイ・ダークサイド
Another Side of my Darkside.

●メイド支者誕生

「よっしーってああいう子がタイプなんだ」
　メイド喫茶を出てすぐ秋葉原の駅に向かいながらくまちゃんがよっしーをからかう。
「タイプって訳じゃないけど」
「タイプじゃなければバイト十五時間分も出して３Ｄデータ買わないだろ。それも二人分も。お大尽だなぁ。何に使うんだよ。抱き枕にしてハーレム生活でもするのか？」
「それを云ったらくまちゃんこそ何だよ。奥さんいるのに抱き枕？」
「オレはよっしーにつられて勢いで買っただけだから」
　くまちゃんの東京出張に合わせて二人でオフ会をしていたよっしーとくまちゃんは、くまちゃんの「アキバで買いたいものがある」の一声で秋葉原に来ていた。目的の品は決まっていたため、買い物自体はすぐに終了。「オレ、メイド喫茶って行ったことない」とメイド喫茶の店看板を見て言ったくまちゃんをつれて、前に一回行ったことのある店へ入ったのが一時間ほど前。楽しい（？）時間はあっという間に過ぎ、退店のときに勧められたメイドたちの３Ｄデータをその場のノリで買っていた。
「支者の元データにしようと思って」
　よっしーが駅の改札を通りながらつぶやく。
「ミドで連れ歩きたくなるくらい気に入ったんだ」
「違うよ。それくらいムカついたんだよ」
「は？」
　オーダーのときと、飲み物を運んできたときのやり取りで、メイドたちもＶＲＭＭＯＲＰＧのユーザーであることが判った。そこまではよかったのだが、よっしーが癪に障ったのは、よっしーたちがミドガルズオルムのユーザーで、彼女たちが本家のＹのユーザーだと判ったときだ。よっしーの目には彼女たちの言動が「あ、パチモンのほうね」と言っているように思えてしまったのだ。
「ほら、俺らがミドだって気付いたときのあの態度」
「ああ、あれね。オレもちょっとムッとしたけど、あんなの慣れっこだろ」
「一般人ならいいよ」
　一般人ならミドガルズオルムをパチモンと呼ぶのもしかたない。だが、彼女たちは接客業だ。それも楽しませる場を提供するのが仕事のはずの場で、少しでも客に不快感を与えるのはプロとしてしてはいけない行為だ。よっしーは彼女らの言におどけて自虐的に返したが、腹の中では別の想いが膨れていた。
「それに、よっしー、そのあとも楽しそうにしてたじゃん」

「大人だからね。闇面はミドの中でしか見せないよ」
「おー、さすがサブマス。ギルドの鑑《かがみ》」
「だからさ、買った3Dデータで支者作って、いじめようかなって」
「いいねぇ。陰険だねぇ」

その夜、珍しくよっしーはミドガルズオルムにログインしなかった。美月のログインはあったが、挨拶だけで冒険には参加せず、数時間後、二体の支者、じゅん子とぴぃなが美月からギルドに寄贈された。

そして、翌日。くまちゃんから一体の支者、白石支津香が寄贈されることになる。

●のりの最大の汚点

（サブキャラクター「あー、あのことは云わないでよ。あれ、わたしのミドガルズオルム生活の最大の汚点なんだから」の真相）

「美月さん。ここだったんだ」
薬剤士の鍛錬で工房でHPポーションと毒薬を作っていた美月は後ろを振り返った。声から相手はのりのだと判っている。
「今週は薬士のスキル上げようとおもって、ずっとここか、薬草採りです」
「ホウメイ山？」
「そこと、うちの第二階層」
「第二階層の毒草って、やっぱり美月さんの趣味だったんだ」
「せっかく手に入れた迷宮だから、有効利用しないと」
「そうだね」
のりのは魔法使いの三角帽子にくすんだ海老茶のロングガウンコード。先がくるっと丸まった長い杖。どこから見ても魔法使いのいでたちだ。
「ギルドルームにいなかったのでホウメイ山かと思ったんですが、とりあえずこっちに来て、正解」
「用だったら、わざわざ探さなくっても、メッセージ送ってくれればいいのに」
「でも、戦闘中だったら迷惑だから」
「私が戦闘しないの知ってるじゃないですか」
「そうですけど」
「それに戦闘中はメッセージは保留にされますよ」
「そうなの？」
美月は生産系キャラクターとして活動している。アイテム生成とアイテムの素材になるマジッククリスタルの採集のみを行い、基本的には戦闘をしない。ただ、高位のクリスタルが採れる場所にはそれなりのモンスターが出現するので、ある程度の戦闘系職業にはついているが、採取場の敵の相手も、ほとんどは随行する支者まかせにしている。

「だから、遠慮なくメッセージ送ってください」
「はい。次からはそうさせてもらうね」
「で、用ってなんですか」
「今度の海の日の三連休なんですけど…」
「はい」
「あの…美月さん、空いてますか」
「三連休は…土曜は休出するかもしれないから微妙ですけど、他はたぶん大丈夫ですよ」
「そうですか」
「でもクエストの手伝いだったら私より、くまちゃんに頼んだほうがいいんじゃないですか」

のりのはミドガルズオルムを始めて二ヶ月弱。ギルドに入って一ヶ月半のキャラクターだ。まだギルドに慣れていないのか、美月に対しても敬語になったりそうでなかったり、接し方が定まっていないようだ。

ゲーム自体はかなり熱心にログインしていて、美月がいつログインしても、大抵先に入っているし、美月がログアウトしてからも活動しているらしい。

美月はミドガルズオルムを始めて半年、総合レベルは三十六。よっしーとの二足の草鞋としては遅くはない。のりのは二ヶ月弱で総合レベル三十一。格段にはやい。ギルドに入ってからはレベル百の支者を常に随行させ、レベルアップに励んでいる。職業レベルも戦闘系の職業、それも魔法に特化したものを重点的に上げている。

一方、美月は生産系のため、戦闘レベルは十以下で、駆け出しの冒険者より弱かったりする。のりのの好きそうなクエストは戦闘系だろうから、美月が参加するのは逆に足手まといだ。
「えっと。…クエストじゃなくて。…美月さんて、東京の人でしたよね」
「あっ。本当は千葉県民です」
「東京じゃないんですか」
「会社は東京ですけど、それが？」
「あ、いえ。…三連休に東京に行くんで、会えないかなって」
「おー。そうですか。いいですね、オフ会。あ、くまちゃんもその頃、東京来るって云ってました。ギルドでオフ会、企画しましょうか」
「あ、あ、いえ、そうではなくて、二人で会えないかなって。…迷惑ですよね。…えっと、ギルドのこととか教えてもらいたくって」
「二人でギルドの話ってことは、くまちゃんの悪口を云い合いたいってことですね。いいですよ」
「ありがとうございます」
「のりのさんは新潟の人でしたよね」
「うん」
「新潟美人とのデート。楽しみにしてます。いつがいいですかねぇ。どこ泊まるんです？」

「汐留です。わたしも女子会、楽しみ」
「汐留」
美月の声が急に沈む。元から低い声の設定であるから、のりのには声のトーンが落ちたことは気づかれなかったようだが。
美月の勤め先は汐留にある。勤め先の入っているビルは、一部がホテルになっていた。ギルドマスターのくまちゃんはそれを知っていて、東京出張のときは、そのホテルを利用していた。そして、出張のたびに美月、というよりはよっしーを飲みに誘っていた。
同時期に同じホテルというのは偶然ではないだろう。そもそも、のりのをギルドに入れたのはくまちゃんだ。そのときの紹介も「知人」だった。
よっしーでログインしているときは戦闘にかまけ、あまり会話はしない。美月は単純作業が多く、話しながらの行動が多い。ここしばらくは、美月月間として美月中心に活動していたこともあって、美月とのりのはよく会話をしていた。その中での恋愛論議でのりのが「このごろ彼がね。ちょっと…」と言っていたこともある。
くまちゃんは妻帯者だ。実際に奥さんを見たことはないので、ウソの可能性も否定できないが、そんなことにウソをつく人はいないだろう。同じホテルに泊まるのりのとくまちゃんの関係。二人だけで会いたいというのりの。オフ会デートの内容が楽しいものになるとは思えない。
「汐留なら会社、近いんで、逆に土曜のがありがたいです」
「じゃあ、土曜日でいいですか。時間は何時ぐらいがいい？」
「昼でも夜でもいいですけど、昼だと一時間ぐらいしかとれないです」
昼休みは一時間だが、休日出勤の昼休みはあってないようなものだ。二時間でも三時間でもかまわない。ただ、それだけ時間を取ってしまうと休日出勤の意味がなくなってしまう。
「お昼か夜ね。ちょっとこっちのスケジュール確認してから、また連絡するね」
「はい」
「せっかく東京行くんだから、いろいろやりたいことあるし、連絡、ちょっと遅くなるかもしれないけど」
「大丈夫ですよ。『夜中の十時から』なんて云われなければ」
「うん。さすがにそれは云わない。あ、二人で会うの、誰にも云わないでくれる？」
「あ、はい」
「楽しみにしてるね」
「私もです」
私もと言いながら、秘密にしてとの言葉に美月は気が重くなっていった。
「のりのも、このダンジョンならついてこれるようになったか」
くまちゃん、のりの、よっしー。それに支者のバイシャジャと飛田ひとみ。五人がボス部屋から宝箱部屋に移動する。ひとみはのりのの背中にしきりにヒールを掛けている。

「バイシャジャとひとみがいなかったら、無理だったけど」
「総合レベルが三十台で、六位の迷宮に耐えるのはすごいですよ」
「よっしーさんには物足りなかったんじゃない？」
「ここ、ソロだとイッパイイッパイなんだよね。今日はのりのさんの後衛フォローがあったし、くまちゃんのいたから、特攻無双ができて、久々にストレス解消でしたよ」
「じゃあ、ギルマス権限でよっしーは報酬配分なしな」
「えーっ。オーボー」
「ボスのクリスタルもあげたろ」
「なら、できたアイテムあげないよ。のりのさんの戦闘服にいいかと思ったんだけど」
「えー、何だったの。クリスタル」
「秘密です」
　くまちゃんは部屋の中央にある宝箱の前に立つ。
「開けるよ」
　宝箱からは金貨と薬の小瓶がとび出る。
「はずれのハイポーションなら、分配なしでいいよ」
「のりの、全部もらっとけ」
「よっしーさんも、金貨、いらないの？」
「高性能の服ができたら高く買ってください」
「よっしーさんて、服、作れたんですね」
「あ、そうそう。よっしー、明日からのオレの東京出張、本決まりになったから。会わない？」
「明日？」
「明日の金曜の夜は接待だからダメだけど、よっしー土曜、休出ってたよな。土曜の夜なんかどう？」
　よっしーはのりのをチラッと見るが、のりのは知らんぷりを決め込んでいる。
「土曜は…、遅めだったらいいけど。ちょっと時間調べてみるよ」
「じゃあ、あとで直メールで結果連絡して。オレ、明日の準備で、今日はこれまでにするから」
「ほい、おつー」
（明日から出張でしばらくインできないかも。準備があるんで、今日はもう落ちるよ。おやすみ）
　くまちゃんのギルド宛メッセージにログインしているギルドメンバーたちが（お疲れ）（おやすみ）（おつー）と返す。くまちゃんは後半の返事を待たずに消える。よっしーはくまちゃんが消えたをの知っていながら（おつです）とギルド宛にメッセージを送る。のりのは直接の挨拶もギルドメッセージも返さず、宝箱の前のハイポーションを拾いあげている。
「のりのさん。土曜なんですけど、どうします？　くまちゃんの直前でいいですか」
「何のこと」

「ほら、汐留で会うって話。昼に変更します？　くまちゃんいないほうがいいんですよね」
のりのはよっしーの前に走り寄ってくる。
「何云ってるの。誰に聞いたの。そのこと」
のりのの剣幕によっしーはたじろいでしまう。
「誰に聞いたって…」
「全く、秘密にしてって云ったのに」
あれ？　ギルド宛メッセージとして話しちゃったのかと、ログを見直してもローカル会話になっている。ここにいるのはのりのだけ。厳密にいうと、のりのとよっしーの他にバイシャジャとひとみもいるが、ＮＰＣ相手では秘密を漏らしたことにはならないだろう。
プレイヤーの中には支者に対し、人と同等に接する者もいる。よっしーにはその感覚が判らないが、のりのはそういう考えなのかもしれない。
「あ、あとでメールをメッセします」
よっしーの返答を聞いているのかいないのか、のりのはまだぶつくさ言っている。
「俺はちょっと休憩してから服作りますが、のりのさんはどうします？」
女性の機嫌の変化は、よっしーにとっては不可解で、触らぬ神に祟りなしだ。
「ＭＰが少なくなったんで、魔法アイテム探しに屋台巡りしてくる」
「そうですか。じゃ、俺は一旦ログアウトします」
「じゃ」
（一旦アウトです）
よっしーはギルドメッセージの直後、誰の返事も待たずに消えた。
ログアウトのあと、トイレをすませ、シャワーを浴びて、缶ビールを軽くひっかける。そして、服作りのため美月でログインしなおす。
美月のスタート場所はギルドルームだ。美月がログインすると、ギルドルームに現れる。ギルドルームといっても、ソファーセットが一つだけの殺風景な部屋だ。ゆくゆくはバーカウンターをつけて、ギルドメンバーが憩えるような部屋にしたいとみんなで話しているのだが、一ヶ月前のギルド内でのごたごたで、放置状態のままになっていた。
（ただー）
ギルド内メッセージでログインを知らせる。
「さてと、工房行って服作りますか」
誰もいないギルドルームで、頭の中に響く（おかえり）の合唱を聞きながら独り言をいう。
「美月さん！　何で話しちゃったの。秘密にしてって云ったのに」
美月が工房へジャンプしようとしたとき、のりのがギルドルームに跳び込んでくる。支者を連れていないということは、やはりのりの中では支者はプレイヤーと同じ扱いなのだろう。
「だから、誰にも云ってないですよ」

「ウソ。よっしーさん知ってたよ」
あたりまえだ。美月が知っていて、よっしーが知らないことなんてない。
二つのキャラクターは同じ人間なのだから。
「よりによって、くまちゃんと仲のいいよっしーさんに云っちゃうなんて、どういうこと！」
そういわれて、美月はのりのが何を勘違いしているのか理解した。
「よっしーと私の中身は同じですよ」
「はぁ？　何判らないこと云ってるの。ごまかそうとしないで」
まずい、のりのは興奮して話が通じないらしい。
「私はよっしーで、よっしーは私なんです」駄目だ。これでは余計伝わらない。「誰かから聞いていませんか。よっしーと私は同一人物だって。というか、私、云いましたよね。自己紹介の時に。今はよっしーで入っているけど、時々、美月でも入ってるって」
そこまで聞いて、のりのがフリーズする。
「だって、よっしーさんは男キャラだけど、美月さんは女キャラじゃ」
「メインキャラはよっしーで、美月はサブキャラですから」
「性別偽るなんて、卑怯よ」
「それを云ったら、モンスター種はどうなるんですか」
のりのの言葉は単なるいいがかりだ。本人も判っているだろう。だから美月もミドガルズオルムの中で使い古された返事を返す。
「モンスター種は別よ。そもそも実世界《リアル》にモンスター種なんかいないじゃない」
「よっしーも私も亜人種ですから。どっちもリアルにはいませんよ」
昔の表現だと「ぎゃふん」とでもいうのだろうか。のりのが、むぅぅと唸りだす。
「大丈夫。今回会う話、くまちゃんには何も云ってませんから」
のりのはまだ唸っている。
「今回じゃなく。今までの…」
のりのは美月に対して、よく話しかけてきた。話しかけられるのは、生産系の暇キャラだからかと思っていたのだが、この反応を見ると同じ女性として話しかけていたのかもしれない。なぜ、恋愛話とかを振ってくるか不思議だったのだが、そういう理由ならうなづける。
「今まで、のりのさんと二人きりのときにした話も、くまちゃんには話していませんから」
「そ、そう。あ、別に云われて悪いことなんて話してないから。別にくまちゃんに云ってもいいんだから」
「なんちゅうツンデレ発言なんですか。じゃあ、あることないこと話しちゃいますよ」
「やめて、やっぱり云わないで」
「よしっ。のりのさんの弱みをゲットしたところで、どうしますか。土曜は」
結局、三連休の初日は、よっしー、のりの、くまちゃんの三人でのオフ会

となった。当然のことながらメインの話題はのりの勘違いについてで、くまちゃんがさんざんのりのをからかうこととなる。

●白石支津香の受難のはじまり

（精神世界　「そうだよ。暴君になってイジメたおすために白石さん呼ぶんだから」の詳細）

「しっらいっしさぁん」

ギルド部屋に呼び出された白石支津香が急いで部屋に入る。美月は入ってきた支津香を部屋の中央に立たせ、支津香の名前を呼びながらゆっくりと支津香の背後にまわる。

ツンツンツン。

支津香の後頭部を美月が指で軽くつつく。支津香は振り返ろうとするが、畏れから身が動かず、目だけがうしろを見ようと横に動いていく。

「何で呼ばれたか判ってるよね」

ツンツンツン。頭へのつつきは止まらない。

支津香は理由を必死に考える。理由があるとすれば、さきほどのお茶の件だ。料理スキルを持っていないことを告白したことだ。だが、それは支津香の責任ではない。そもそも総合レベル一の支津香には初期スキルのメッセージしか与えられていない。総合レベルが一なのも創造主であるくまちゃんがそう定めたからだ。かつ創造後はギルド部屋の拭き掃除以外は誰からも指示されなかったため、レベルアップもできない。

支者が覚えられる魔法、スキルは一レベルにつき一つまで。それ故、料理スキルを覚えられる訳もなく、料理スキルを必要とする「お茶を淹れる」行動《アクション》は支津香にはできない。

できないことをできないという以外の選択肢はあのとき存在しなかったはずだ。だが、呼び出されたのはそれが理由だろう。それ以外の要因は思いつかない。

「さきほどのお茶の件かと」

その言葉で、美月がぽーんと指で頭を小突く。

「なーんだ。判ってるんじゃない。知らないでああ云ったのかと思った。みんな判ってて、ジェスターの前で私に恥をかかせたんだ。確信犯だったんだ」

支津香には恥をかかせつもりはない。

「申し訳ございません。おっしゃっている意味が判りません。わたしは美月様に恥をかかせた覚えはございません」

「まぁたぁ。とぼけちゃってぇ。私はスキルなんか関係なく、ただ『お茶を淹れて』って頼んだんだよ。それなのに『料理スキルを持ってないメイドにそんなこと頼むなんて莫迦なんですか』って。ジェスターの前で、そう云いたかったんだよね」

「いえ。そんな畏れ多いこと」

「そこまで私をコケにする人っていないから、逆にものすごーく感動しちゃった。これだけ感動させてくれたんだから、白石さんにはちゃんとお礼しないとね」

「そんな、お礼など、もったいないお話です」

今まで頭をつついていた美月の指がとまる。そして、ものすごく緊迫した気配が背後から支津香を包み込む。即座に支津香は自分の返答が適切でなかったことに気づく。しかし、どう適切でなかったのか。考える支津香の頭の中に創造されたときに『システム』から与えられた注意点が浮かびあがった。

『やんごとなき方々の言葉は全てがそのままの意味ではありません。時には反対の場合もあります。特に攻撃性感情値が高いときの肯定的表現は嫌味と呼ばれる表現法で、言葉と正反対の内容を示しています。そして、このときの返答を誤ると、取り返しのつかない事態に陥ります』

今の美月の状態はまさにこの状態だ。であれば『感動した』訳ではなく『お礼をする』は反対の『罰を与える』だろうか。そうであれば支津香の返答はそれを拒否したことになる。

「しっらいっしさぁん。そんなツレないこと云わないでよ」

美月は背後から支津香をぎゅっと抱きしめる。そして口を支津香の耳元に近づけ、怪しくささやく。

「ねぇ、白石さん。何か欲しいものはない？　何が欲しいの？」

支津香はブルッと身震いしてしまう。それは肩から首にかけて押し付けられた美月の胸のなまめかしい感触のせいでも、耳に吹きかけられる甘い吐息のせいでもない。

何と答えるのが正解なのか。どういえばこの場を切り抜けられるのか。支津香は必死に考える。

「もう、黙っちゃって。奥ゆかしいんだから。うぅんと。じゃあ、聞きかた変えるね。白石さんが一番うれしいこと、幸せを感じることって何？」

自分にとっての幸せとは何か。支津香はいままで考えたこともなかった。支者として生まれた時から、命じられる仕事を黙々とこなしてきた。ただそれだけである。

嬉しかったこと。生まれたときは『これから支者としてやんごとなき方々のサポートができる』と喜んだ。ギルド部屋の拭き掃除を命じられたときも、これで役に立つことができると安心した。そして『ギルド部屋はいつもきれいだね。掃除、ご苦労様。ありがとう』とツカサバルに言われたときが一番幸せだった瞬間かもしれない。

「わたしたち支者はやんごとなき方々を支え、仕えることを至上の喜びとしています」

「ふーん。優等生の発言だね」

美月が耳を甘噛みしてくる。そして、左手は支津香をぎゅっと抱きしめたままで、右手はメイド服の上から腹をなでまわす。

「じゃあさ。白石さんが一番苦しむことは何？」

美月は支津香の腹をなでながら冷たい口調でいいはなつ。支津香の背筋

をゾクッとしたものが通りすぎ、思わず息を漏らしてしまう。それを何と勘違いしたのか、美月が首筋に舌をはわせだす。

支津香は首と腹に分散される意識を必死に戻しながら、問いの答えを探す。今は苦しい状態だ。だが、この状況が『一番』苦しいかと問われればそうとはいえない。

思い起こしてみると今までに苦しい思いはしたことがない。命じられたことをこなしていれば、役に立っているという安心感があった。命じられたことを行えなかったり、失敗したときは悲しい気持ちになった。これが苦しいということなのだろうか。

そういう意味ではお茶を淹れることができなかったのは苦しい。だが、そのことで、それを命じた美月から責められるのは苦しくはない。できないことに対して、美月が支津香を叱責するのは、美月からしても支津香からしても当然のことだからだ。

今苦しいのは美月の嫌味に対し、正しく対処できずに、美月を不機嫌にさせてしまったことによるものだ。

「苦しいのはやんごとなき方々…。美月様のお役に立てないことです」

「またまた優等生の発言だね。それが一番苦しいこと?」

美月が少し背をかがめるのが判る。何をするのかと身構える支津香に対し、美月は右手を腹からもっと下、太腿あたりに移動する。

美月の口調からすると、今の答えも美月の求めるものではないらしい。だがそれが苦しいのは嘘偽りない事実だ。美月の求める答えのために嘘をつくべきか、それとも正直に今の答えが正しい答えだというべきか。

そもそも、美月が求めている答えはどのようなものだろう。美月は支津香を罰するために何が苦しいかを聞いてきた。とすれば美月の求める答えは支津香が一番辛いと思うことになる。

役に立てないこと以上に辛いことは何か。それを考え始めた途端に答えにいきつく。そして、それを罰として自分が受けた時のことを想像する。と、支津香の口から嗚咽が漏れ、恐ろしさに涙がこぼれる。

「一番苦しいのは、何もするなと言われることです。指示をいただけないことです。ギルド支者はギルドのため、ギルドに所属するやんごとなき方々に仕えるために生まれてきました。仕えることが存在意義です。意義を失った支者は存在が否定されたのと同じです。いえ、それ以上に辛いことです。お願いします、美月様。わたしに仕事を与えてください。どんなことでもいいです。用を命じてください」

支津香の太腿をまさぐっていた美月の右手がとまる。

「お願いします。一所懸命頑張ります」

美月はゆっくりと支津香から離れ、「ふーん」といいながら支津香の正面へと周る。支津香はうなだれたまま顔を伏せている。

クイッ。美月が指で支津香の顔を引き上げる。涙に濡れた瞳はやけになまめかしい。

「何でも私の云うことを聞くって云うのね」

「はい。命じられたことはどんなことでも」

美月は再び「ふーん」といいながら、クイッと顔を左に向けさせ、なめまわすように顔を眺める。そして、右にクイッとして、右の顔も目で嬲る。
「じゃあ、白石さんはたった今から私の専用メイドね。どんなときでも、何をしてても、私が呼んだらすぐそばに来て」
「はい。…ですが、わたしはジャンプができませんので、すぐにという訳には…」
美月がグーパンチで軽く支津香の胸を押す。支津香はバランスを崩すがかろうじて倒れずもちこたえる。
「頑張ると云ったそばから、できない言い訳？　全く使えないメイドね」
「も、申し訳ございません。いつでも用を命じてください。全速力で駆けつけます」
美月はどこからか指輪を取り出すと、支津香の左手をつかむ。
「とりあえずこれ、貸したげる。そのうち、専用の作ったげるから、それまで、これ使って」
そういいながら指輪をはめる。支津香は手をかざし、驚いた顔で薬指にはめられた指輪を見ている。美月はそれを見てニタリと嗤う。
「その指にはめた意味、判るよね」
「も、申し訳ございません。わ、判りません」
はんっ。と美月が冷たく息を吐く。
「使えない上に物事も知らないなんて、どうしょもないメイドね。いいわ、教えたげる。それはね、白石さんは私のものって云う意味。白石さん望みは私に仕えることなんだよね。それ、叶えてあげる。ずっとそばに置いて、イジメぬいてあげるから」
それを聞いた支津香は思わず膝をついた。
自分が間違っていた。反対だった。とめどなく涙がこぼれ落ちる。が、それをとめられない。
「あ、ありがとうございます」
涙声でそういうのがやっとだった。
「これからも精一杯お仕えいたします」
美月は嫌味などいってなかったのだ。初めから『お礼』をするつもりだったのだ。でなければ、こんな素晴らしいプレゼントをくれる訳がない。
美月はずっと支津香をそばに置いて、支津香が音《ね》をあげるほど用を命じてくれるというのだ。そんなにも仕えさせてくれるのだ。支者にとってそれは最高の幸せだ。みんな羨ましがるだろう。
「ありがとうございます。わたしをイジメてください。一所懸命お仕えします」
支津香は目の前にある美月の足の甲にキスをした。
「じゃあ、さっそくイジメてあげる。これからは私がお茶淹れてって云ったら、すぐにお茶出して。お茶の淹れ方が判んないって云うんだったら、今すぐ朱大人に習ってきなさい」
「はい、かしこまりました」
支津香は再び美月の足にキスすると左手薬指の指輪を愛おしそうに優し

く回し工房へジャンプアウトした。

『イジメられることに喜びを感じる』支津香は今までこの、自分の裏設定の意味が判らずにいた。だが、今なら判る。そんなことは支者にとってはあたりまえのことだ。逆に判らなくなってしまったことがある。

『どうしてくまちゃん様はそんなあたりまえのことをわざわざ裏設定にしたのだろう』

●おもらしじゅん子

（実体化　「他に何か云いたい人は？」のあとの出来事）

怖かった。恐ろしかった。今までにあんな美月様は見たことがなかった。「莫迦にするな！」と怒鳴られた時など、恐怖のあまり、もう少しで漏らしてしまうところだった。というか、実のところ、ちょっと漏らしてしまった。だから、美月様が「何か云いたいことある人？」と聞いたとき、やっとこれで終わるって安心した。誰も何もいわないでって、心の中でお願いした。

ブリュンヒルデが話し出したときは、みんなが感動している中でただ一人、はやく終われ、はやくトイレに行かせて。ってただただそう願ってた。ブリュンヒルデの長い話が終わって、美月様の「じゃあ、ここまで」の言葉を聞いたとき、ほっとした。ほっとしてその安心感から少し漏らしそうになったくらいだ。なのに…。

「あのー。すごくつまんないことでもいいですか」

ぴぃながそういって手をあげたとき、「つまんないことなら云うなよ」とつっこみを入れたくなったほどだ。もちろん、そんなつっこみをしたら、みんなの注目をあびることになり、びびって漏らしてしまうだろうから、そんなことはしないけど。

「何、ぴぃな」

美月様がぴぃなの名前を知っていたことに、ちょっとびっくりした。ぴぃなもじゅん子も美月様の創った支者だから、名前を知っててもおかしくないのだけど、いままでは滅多なことがないかぎり声などかけられなかったし、たとえ声をかけられてもそのときは「あなたたち」とか「あんたたち」とかぴぃなとじゅん子をセットにした呼び方だったから。

「ちょっとした変化なんですけど」

ここでもぴぃなはもったいぶって、言葉を切る。何、格好つけてるのよ。さっさといってよ。

「さっき、ここを掃除してたとき、ほこりを見つけました！」

はぁ？　何でそんなつまんないこと、自慢げに話してるのよ。

「それと、誰かがトイレを使ってくれました！」

その発言に周りがざわざわする。それは私だってば。この部屋にまた大勢来ると思ったら、緊張しちゃって、トイレに行きたくなっただけ。何でそんなことをこの大勢の前でいうのよ。

「ほこりにトイレ？」
美月様は左のこめかみを押さえている。きっとあまりのつまらなさに頭をかかえてしまったのだろう。
「はい」
「それって今までになかったこと？」
「はいっ！」
どうしてそんなことで、すごいでしょアピールができるの？　っていうか、すごいでしょアピールするの？　美月様、また怒ってるじゃない。
「じゅん子、どうなの！　本当なの！」
ひっ。ひぇー。
じょぼじょぼという音がして、じゅん子の足に温かい液体が流れ落ちる。耐えられなかった。耐えきれなかった。恥ずかしさで目が潤んでくる。
「あー！　じゅん子がおしっこ漏らした！」
おしまいだ。もうおしまいだ。恥ずかしくてたまらない。それなのにぴぃなは「おしっこ、おしっこ」とはしゃぎながら駆けよってきて、いきなりじゅん子の足を広げて、足首から太腿に向かって舌をはわせる。周りのみんなは、そんな二人をあきれ顔でただ見ている。そんな中でただ一人、美月様だけが鬼の形相で小走りでやってくる。
ぱっこーん。
美月様がぴぃなの頭をはたくと、大きな音がする。きっとぴぃなは頭が足りなくて、すきまだらけだから、こんなにいい音がするのだろう。
「あんたたち、何やってんのよ。時と場所を選びなさいっ」
美月様ははプルプル震えている。だめだ。また大声で叱られる。そう思うと、今度は涙がこぼれてきた。美月様はわざと大きくため息を吐いた。もうだめだ。ここで叱られたら、また漏らしてしまう。
「じゅん子、雑巾持ってるでしょ。出して」
美月様から出た言葉はちょっと意外だった。絶対怒鳴られると思ったのに、そんなに強い口調でもなかった。顔は苦虫をかみつぶしたような顔をしているから、心の中ではどう思っているかは心配でならないけど。
あわてて雑巾を取り出すと、美月様に手渡す。雑巾なんてものを渡していいものか一瞬悩むけど、渡せといわれたものを渡さないなんてことは怖くてできない。
「外出て、着替えてきなさい」
美月様は扉を開ける。どうして急に優しくなったのかまるで判らない。それでもそれに従わないことなんて、できる訳もない。外に出て、扉が閉まるとぴぃなの声が聞こえてきた。
「美月様、だめです。じゅん子のおしっこは私がきれいになめます。雑巾なんかで拭かないでください」
ぴぃながスカトロ系の変態であることは知れ渡っている。それにしても、みんなの前であんな痴態をさらすのはさすがにどうかと思う。メイドのパートナーとしても、プライベートのパートナーとしても、ちゃんと調教し直さないと。

パンと再び扉が開かれ、ぴぃなが足蹴にされて外に転がりでてくる。
「このド変態が。あんたも外に出てなさいっ」
美月様の声がして、ぴぃなの腰をけとばす黒いハイソックスの足が見える。
「私はぁ、ドMだけど、暴力系のMじゃないんですけど」
墓穴を掘り続けるぴぃなの前で、バンと扉が閉められる。中から美月様のため息が聞こえてきそうだ。
ぴぃなは「そっち系じゃないの。おしっこが、おしっことうんちが好きなだけなの。おしっこまみれになりたいだけなの。おしっこを飲みたいだけなの」と叫んでいる。
「ぴぃな、もうみっともない真似、やめてよ」
じゅん子のその声に、ぴぃなはとろんとした顔を向ける。そして、顔をさらにとろんとさせ、目だけは輝かせる。
「じゅん子ぉ。もっとおもらししてぇ。ねぇ、してよ。おもらし。じゅん子ぉ」
恥ずかしい。そんな大きな声で叫ばれたら、中のみんなに聞こえちゃう。恥ずかしすぎて漏らしてしまいそうだ。もしかしたら、足をつたうこの生温かさは、すでにまたちょっと漏らしてしまったのかもしれない。
ぴぃなはというと、「おしっこかけて」といいながら、這いよってくる。そしてじゅん子のボックスパンツに手をかけると、サッと下におろす。
「キャッ」
乱暴におろされたパンツからは黄金色の液体が滴る。あまりのことにびっくりしすぎて何もできない。漏らすことさえ忘れてしまった。
ぴぃなは黄金色の流れに逆行して舌をはわせる。足元に下げられたボックスパンツから太腿へ。そして、秘部へと。
「あー。だめぇー」
思わず声がでてしまった。
うまい。舌づかいがうますぎる。声をあげずにはいられない。
「あーあっ！」
バタッ。扉があく。
「あんたたち、一体、何し…して…してんのっ」
扉から顔を出した美月様が目を丸くしている。まくしあげたミニスカートメイド服と股間に顔をうずめたぴぃな。さらに足首までおろされたパンツ。誤解のしようがあり得ない状態を見て、美月様は顔を真っ赤にする。そして、どんどんと大股で寄ってくる。
「何やってんのっ！　こんなところでっ！」
だめだ。耐えられない。
じょぼーともじゃーとも聞こえる音と飛びちる生温かい飛沫《しぶき》。恍惚の表情でびしょ濡れになっているぴぃな。もうおしまいだ。なにもかも。
「あーっ」
思わず絶望の声をあげて、崩れるように膝をつく。

「あーっ！」
ぴぃなは恍惚の歓声をあげる。
「あーっ」
美月様は深いため息をつき、脱力でしゃがみこむ。
気が付くと、三人とも謁見室の前の廊下で黄金色の液にまみれて、ただ呆けて座っていた。